

独居高齢女性へのインフォーマルサポート形成要因
～質的アプローチによる考察～

2016 年 3 月

九州保健福祉大学大学院
(通信制) 博士課程 連合社会福祉学研究科

D311301 岩永 耕

目 次

序章 研究の背景と目的

1. 高齢者の孤立と社会関係	2
(1) 独居高齢者の増加と孤立	2
(2) 多様な社会資源との結びつき	2
(3) 社会関係に関する量的研究の限界	3
(4) 社会関係に関する質的研究の必要性	3
(5) 近隣や友人からのサポート	4
(6) 周囲とのつながりの性差	4
2. 研究の目的	5
3. 研究の意義	5

第1章 ソーシャルサポートの定義と研究分野

1. ソーシャルサポートの定義と分類	7
(1) これまでのソーシャルサポートの定義	7
(2) ソーシャルサポートの包括的定義と操作的定義	8
2. ソーシャルサポートを対象とした主な研究分野	10

第2章 研究の方法と構成

1. リサーチクエスションと研究構成	12
2. 調査対象地域と選定理由	12
3. 倫理的配慮	13

第3章 高齢者に対する国内ソーシャルサポート研究に関する考察

1. 研究の目的	16
2. 研究の方法	16
3. 分析結果	19
4. 考察	20
(1) 近隣・友人・知人の区別	20
(2) 調査の対象者	20
(3) 近隣サポートの性差	21
(4) 独居高齢者に関する知見	21

第4章 専門職が捉える独居高齢者の課題と発生プロセス

1. 研究の目的	23
2. 研究の方法	23
(1) 調査対象者	23
(2) 調査項目	24
(3) 倫理的配慮	24
(4) 調査方法	24
(5) 分析方法	24

3. 結果と考察	25
(1) ストーリーライン A : 本人の消極性によるサポート低下・孤立の発生	25
(2) ストーリーライン B : 体の衰えによるサポート低下・孤立・不安感の発生とその悪循環	26
(3) 考察	28

第5章 市街地と農村部における独居高齢女性のインフォーマルな社会関係

1. 研究の背景と目的	32
(1) 近隣・友人と独居高齢者との結びつき	32
(2) 研究の目的	33
2. 研究の方法	33
(1) 調査対象者	33
(2) 調査項目	33
(3) 調査方法	33
(4) 分析方法	33
3. 分析結果	34
(1) 対象者の概要	34
(2) 近隣とのつきあい・相談相手・娘の居住地	34
(3) 近隣と友人との接触・交流に関する比較・検討の結果	35
(4) 類型分析の結果	36
(5) M-GTA 分析の結果	37
4. 考察	41
(1) 近隣と友人の相違点と高齢女性とのつながりの特徴	41
(2) 娘への配慮と友人への相談	41
(3) 隣の「嫁」との交流	41
(4) 独居になることのポジティブな効果	42
(5) スーパーの孤立防止機能	42

第6章 独居高齢女性のライフヒストリーとインフォーマルな社会関係

1. 研究の目的	44
2. 研究の方法	44
(1) 調査対象者	44
(2) 調査方法	44
(3) 調査項目	44
(4) 倫理的配慮	47
(5) 分析方法	47
3. 分析結果	48
(1) 対象者の概要	48
(2) 重要なライフイベントの時期の比較	49
(3) コンボイ図を用いたサポート源の順位付け	50
(4) 親しい近隣・友人との「つきあい程度」の実態	52

(5) 道具的サポートと情緒的サポートの比較	・ ・ ・ ・ ・ 53
4. 考察	・ ・ ・ ・ ・ 55
(1) 順位付けの要因と変容	・ ・ ・ ・ ・ 55
(2) Vさんの社会関係を規定してきた要因	・ ・ ・ ・ ・ 55
(3) できない行為の増加と自信の喪失	・ ・ ・ ・ ・ 56
終章 高齢者を取り巻く悪循環の打開策	
1. 近隣によるサポート	・ ・ ・ ・ ・ 59
(1) 近隣による情緒的サポートと交流の場	・ ・ ・ ・ ・ 59
(2) 近隣サポートの向き・不向き	・ ・ ・ ・ ・ 59
2. 友人や娘によるサポート	・ ・ ・ ・ ・ 60
(1) 深い情緒的サポート	・ ・ ・ ・ ・ 60
(2) 温泉施設での深い情緒的サポートの授受	・ ・ ・ ・ ・ 61
3. 近隣サポートと友人サポートの関連性	・ ・ ・ ・ ・ 61
(1) 近隣と友人の相違点と「サポートミックス」	・ ・ ・ ・ ・ 61
(2) 近隣の友人化	・ ・ ・ ・ ・ 62
4. 「消極性」と「罪と恥の意識」	・ ・ ・ ・ ・ 63
(1) 罪と恥の意識	・ ・ ・ ・ ・ 63
(2) 罪と恥の意識から起きる悪循環	・ ・ ・ ・ ・ 64
(3) 独居になることによる積極性の向上	・ ・ ・ ・ ・ 65
5. 提言	・ ・ ・ ・ ・ 65
(1) 国・自治体・社協に期待すべき点	・ ・ ・ ・ ・ 65
(2) 目指すべき好循環	・ ・ ・ ・ ・ 67
(3) 関係者による「人間理解」の必要性	・ ・ ・ ・ ・ 67
6. 今後の研究課題	・ ・ ・ ・ ・ 68
注釈	・ ・ ・ ・ ・ 69
文献	・ ・ ・ ・ ・ 70
参考資料	・ ・ ・ ・ ・ 75

序章
研究の背景と目的

序章 研究の背景と目的

1. 高齢者の孤立と社会関係

(1) 独居高齢者の増加と孤立

厚生労働省(2015)によれば、独居高齢者世帯は、この30年足らずに3倍以上に増加した(1986年の128万世帯から2014年は595万世帯)。その世帯数は高齢者がいる全世帯の中で、13%から25%に増えている。社会保障・人口問題研究所(2014)の試算によると、2035年には、46の都道府県(山形県を除く)において、高齢者がいる全世帯の3割以上を同世帯が占めることになる。

また、同研究所が行った「生活と支え合いに関する調査」(2013)では、独居高齢者の7%は、会話の頻度が2週間に1回以下であるとしている。さらに、内閣府による独居高齢者への調査(2003)においても、将来の自分への日常的な不安を「とても感じる」と答えた人が6割もいる。これらのことから、独居高齢者は、数が増え続けている上に、周囲との関係は希薄で、将来への不安感も強いことが分かる。

(2) 多様な社会資源との結びつき

「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉の在り方に関する検討会」報告書(厚生労働省 2000)では、社会的援護を必要とする人々の新たな福祉課題として、人々の「つながりの再構築」の必要性や、社会的孤立の問題が示された。また、「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議」刊行の「孤独死ゼロを目指して」報告書(2008)においても、「近隣の見守り・助け合いの機能の再構築としての住民相互ネットワーク」が挙げられており、日常のさりげないあいさつや声かけの慣行、コミュニティにおける「つながりの再構築」の必要性が述べられ、「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告」(厚生労働省 2009)においても、公的福祉サービスだけでは対応できない生活課題等に対応するために、自助、公助とともに住民、当事者、民生委員、町内会、行政、ボランティア団体等が協働する「新たな支え合い」と共助の必要性が強調されている。

上野谷(2011:174-178)は、インフォーマルなソーシャルネットワークのうち、家族・友人・近隣・個人ボランティアによるものは、地縁・血縁・情感に支えられ、自然発生的に成立した行為だとし、私たちは困難に遭遇した際の多くは、専門職には相談せずに、インフォーマルなサポートによって対処するとしている。加えて、その人固有の生活にも、彼らからのサポートの方が有効であり、フォーマルサポートと組み合わせることで初めて社会福祉援助システムとして期待できるとも指摘している。井村(2011:116-117)も、この上野谷の指摘を踏まえて、なじみのある人間関係は、安心感と信頼感を維持・継続し、助け合いや互助を高めるとし、在宅で暮らすには、多様な社会資源を、ニーズに合わせて結び付けていく必要があるとしている。

具体的なサポートに関する先行研究を見ると、高齢者への声かけは、彼らの4割弱が近隣や知人など非親族からのケアを選好している(山口ら 2011:21-31)とされている。孤立している高齢者はインフォーマルなサポートが入手できずに抑うつ傾向があり、将来の不安が大きい(小林ら 2011:438-450)とも報告されている。また、澤岡ら(2011:47-59)は社会関係の研究において用いられている非親族との関係指標の研究課題として、周辺部の

他者を調査測定する方法を開発し、高齢者の社会的関係そのものに関する研究の必要性を挙げている。

(3) 社会関係に関する量的研究の限界

これまでに、彼らが誰からどのようなソーシャルサポートやケアを受けているかといった点や、どのようなソーシャルネットワークを持っているかについて、量的に調べた研究が多く見られる(野辺 1999a:375-392, 岸ら 1994:474-488, 江上 1994:179-190, 山口ら 2011:21-31, 玉野 1990:29-39, 古谷野ら 1998:140-150, 野邊 2005:116-132, 斉藤ら 1991:361-369, 澤岡ら 2012:39-45, 板東ら 2008:93-99, 権ら 2004:52-61 ほか)。また、ソーシャルサポートやソーシャルネットワーク、社会活動といったものを「独立変数」と捉えた研究も多く見受けられる(中嶋ら 1999:48-61, 青木 2001:125-136, 齋藤ら 2005:41-47, 村田ら 2011:15-22, 野辺 1999b:105-123, 平野 1998b:95-110, 金ら 2000:395-404, 橋本 2001:65-73, 野口 1991a:37-48, 野口 1991b:89-105 ほか)。これらの研究では、高齢者の生活満足度や主観的 Well-being, モラール, 自尊感情, QOL, 孤独感といったものを従属変数と捉えている。そしてそれらが、独立変数である「社会関係」や「社会活動」によってどのような影響を受けているかについて、統計的な分析をする手法が用いられている。このような研究は、一定数のサンプル数を確保し、数量的な分析をすることで、統計的に信頼できる結果が得られることから、多くの研究者が採用している。しかし、量的な調査では難しい場合があり、その結果を深く解釈することが困難なこともあると考えられる。それは、調査者自身が事前に設定したモデルによって測れる範囲の事象しか、分析の中で扱えないために、調査対象が抱える問題や特徴の「背景にあるもの」が捉えづらいためである。その上、現実社会の様々な事象のもつ複雑な要素が、どのように連関しているのかを検討することも、量的調査では難しいといえる。早川(2010:22)も、量的調査の問題点として、①サンプリングや質問によるバイアスの発生、②未知の変数を見逃すリスク、③変数間の因果の解明が困難、④データの意味づけにあたり、数字の大小に惑わされ易い、という点を挙げている。

(4) 社会関係に関する質的研究の必要性

量的研究に比べて論文の数は多くはないものの、高齢者の社会関係について質的に調査したものもある。畠山(2014:29-110)は、過疎が進む旧産炭地である地域の独居高齢者へのインフォーマルなサポートが、介護保険サービスの利用前後でどのように変化するかを調べた。その結果、①フォーマルサービスの利用前は、配偶者や近隣との関係が喪失してしまうと子どもとの関係が強まる、②フォーマルサービス利用後は、親族や近隣との関係は変化がなく、子どもからのサポートの必要性が高まることなどを明らかにした。また、染野(2013:23-39)は4人の独居高齢女性の、転居や疾患、配偶者との離死別といった「危機的ライフイベント」が社会関係に与える影響について、ライフストーリーを質的に調査・分析した。その結果、①それらのイベントは、彼女らのソーシャルサポートネットワークに影響する、②それらのイベントに遭遇した初期に、環境の変容によって落ち込んだり、混乱や不安、戸惑いに陥る、③ソーシャルサポートネットワークは、一時的に断続、停滞、減少する、としている。

また、木下(2003:66-68)は、ある事柄を説明する「結果」ではなく、人間の行動を説明

したり予測したりする「うごき」に着目しており、後藤(1990:173-174)も、独居高齢者が孤立に至る経緯を明らかにすることを、課題に挙げている。そして課題そのものだけでなく、それが発生する「要因」や「背景」を明らかにする必要がある。そうすることで人々の動きが予測でき、実践に活用し易いためである。そのように、複雑に関連している「要因」や「背景」を明らかにするには、フリック(2011:18)が述べているように、日常生活の多様性に対応できる「質的な調査・分析」が適していると考えられる。

(5) 近隣や友人からのサポート

高齢者の「近隣」や「友人」との関係に焦点を当てた質的研究もある。平野(1998a:93-103)は、東京都台東区に住む高齢者を調査した。それにより、次のような結果を示している。

- ①近居の別居者がいれば、彼らを中心としたサポートを授受しており、近隣サポートは二次的なものである。
- ②近隣サポートの少ない高齢者は、近隣が果たすといわれる「日常性・緊急性」の高いサポートさえも、子どもを含む親族がサポートしている。
- ③近隣サポートが多い高齢者は、「日常性・緊急性」の高いサポートの他に、日常的な「おすそ分けや土産の交換」といったものや、おしゃべりをして気晴らしをするといった「情緒的サポート」を授受している。
- ④同居子や近居別居者がいても子どもに頼らない高齢者と、逆に、子どもや親族しか頼らない高齢者とが混在する。

上記のように平野は、「日常性・緊急性の高いサポート」と「情緒的サポート」とを区別している。しかし近隣からの日常的なサポートの多くは、「おしゃべり」や「おすそ分け」を中心とした「情緒的サポート」ではないかと考えられる。

渡瀬(1998:33-42)は、静岡県佐久間町・水窪町・龍山村の独居高齢者から調査をした。その結果、彼らにとっては非親族とのソーシャルネットワークも暮らしの支えに重要であり、近隣の複数の人との長年の関わりで培ったものが、「友人」あるいは「相談相手」といった緊密な関係を形成してきたとしている。ここでの「高齢者の近隣に住む人が時間の経過により『友人』という関係に変化する」という点は興味深い知見である。

(6) 周囲とのつながりの性差

近隣や友人とは、高齢男性よりも高齢女性の方が、つながりをより保持しているといった統計データや調査研究結果が多く見られる。内閣府が独居高齢者に行った調査(2003)によると、近隣とのつきあいに関して、お互いに訪問しあう女性は約46%と、男性の2倍近い回答があった。そして「つきあいがない」と答えた女性は約7%に過ぎず、男性の半分以下であった。友人との接触頻度をみても、「ほとんど毎日」や「週に1回以上」と回答したのは、女性が男性よりも10ポイント近くも多く、「月に1~3回」や「年に数回」は男性の回答割合の方が高い。このような性差について前田(2004:320-329)は、女性は家庭・職場・地域など多岐に渡る領域で活動してきた結果として、男性よりも友人関係を引き出

す文脈が豊富であるとしている。

これまで述べたように、独居高齢者の増加が見込まれる中、多様な社会資源をニーズに合わせて結びつけることが求められ、インフォーマルサポートのあり方は喫緊の課題といえる。そのためには、これまでは多くは見られなかった社会関係についての質的研究の必要性も高まっているといえる。しかし、その研究知見の蓄積は十分とはいえず、地域での支えあいにおいて重要と思われる「近隣」や「友人」との交流やサポートに焦点を当てたものはさらに限られると言わざるを得ない。また、前述したように高齢女性は地域におけるつながりをより保持している可能性があり、その実態の解明や、今度の独居高齢者へのサポートを充実させるための研究が急がれる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、今後さらに増えるとされる「独居高齢者」の中でも女性に着目し、彼女らとインフォーマルな他者との関係性の実態について調べ、質的手法によって彼女らが持つ「つながり」の要因や背景、経過を明らかにすることである。そのように女性に着目するのは、前田（2004：320-329）のいうように、女性は男性よりも友人関係を引き出す文脈が豊富ではないかと考えるためである。

また、インフォーマルな他者のうち、「近隣」と「友人」の相違も明確にすることも目的としたい。それは、近隣や友人による独居高齢者への現実的なサポートのを見いだすことで、高齢者を取り巻く孤立の悪循環を打破することが本研究の根底にあるねらいだからである。それらを踏まえて本研究では、独居高齢者の孤立防止のために、行政・地域・専門機関に求められる取組みの提言も目的とする。

3. 研究の意義

今後ますます増えるとされる独居高齢者は、少子化に伴い別居子もいない者が増え、親族全体の規模が縮小し、子どもだけでなく兄弟を含めた親族全体とのつながりが期待できなくなると考えられる。そのような中で、前述したように、独居高齢者へのソーシャルサポートやソーシャルネットワークといった社会関係を質的に調査した研究は、多くは見られず、インフォーマルなサポート源やネットワークの構成員のうち、近隣や友人に焦点を当てたものは、さらに限られる。このため本研究では「近隣」と「友人」の相違に着目することで、結論がより具体的になり、実践に応用できる提言につなげることができる。

第 1 章

ソーシャルサポートの定義と研究分野

第1章 ソーシャルサポートの定義と研究分野

1. ソーシャルサポートの定義と分類

ソーシャルサポートを授受する対象は、高齢者や児童(とその親)、障害者といったように多岐に渡る。そのため、これまで広範囲の分野で研究がなされてきた。しかし本論で着目するのは後述するように独居高齢者へのソーシャルサポートであるため、本研究では主に高齢者に対するソーシャルサポートの概念について扱うこととする。この章では、先行研究においてソーシャルサポートの概念がどのように定義・分類されてきたかを整理していく。

(1) これまでのソーシャルサポートの定義

野口(1991:89-105)は、ソーシャルネットワークは対人関係の「構造的側面」に着目するのに対し、ソーシャルサポートはその「機能的側面」に着目するとしている。

浅川(2008:163-175)はソーシャルサポートを「他者との間で取り交わされるもろもろの支援・援助」とし、「社会関係の下位概念としてソーシャルサポートとソーシャルネットワークを位置づける」としており、林(2010:141-152)はソーシャルサポートの包括的定義として「社会関係において他者との間で取り交わされるもろもろの支援・援助」としている。

岩佐(2011:660-671)は、「対人関係の機能的側面を示す」とし、上野谷(2011:174-178)は「フォーマルサポートとインフォーマルサポートの両者の援助をあわせたもの」と定義し、別々に提供されがちなためにネットワークシステムとして作動する必要があるとも述べている。

このようにソーシャルサポートは先行研究においていくつかの定義がされている。しかし浅川(1999:329-338)は、このソーシャルサポートと「情緒的一体感」とを2つの異なった次元ととらえて区別し、後者の方がより基礎的な次元であるとしている。これについてはRook(1987:1132-1147)も、日常の何気ないやりとりを「友好(companionship)」と呼び、相互作用の目的が外発的か内発的かによってサポートと友好とを区別している。しかし、大森(2005:303-312)は、気遣い合い的な日常交流は、「高齢者が自分の居場所を見出し、今日を生きる意欲を得ることで、人生の質を高める手段」と捉えている。

気遣い合い的な日常交流は、そのような機能を有していると考え、本研究ではソーシャルサポートの包括的定義を、「社会関係の中で、日常的な何気ない交流や、情緒的一体感も含め、他者から受けたり、他者に与える、道具的もしくは情緒的な支援の総称」とする(表1-1参照)。

(2) ソーシャルサポートの包括的定義と操作的定義

林(2010:141-152)は、ソーシャルサポートの定義は理論的な概念定義ではないとしている。その上でソーシャルサポートを「包括的」に定義し、操作的な定義を示す形が主流であるとしている。つまり、ソーシャルサポートが「包括的定義」により概念範囲が示された上で、現実のサポートがいくつかの具体的な尺度等(操作的定義)に還元され、それらの知見からサポートが規定をされている。

その操作的定義は「(ソーシャル)サポートの分類」「(ソーシャル)サポートの性質」「(ソーシャルサポートの方向性)」について、これまで主に次のように定義されている。

表 1-1 ソーシャルサポートの包括的定義の比較

研究者 (年)	ソーシャルサポートの包括的定義
野口 (1991)	対人関係の機能的側面に着目したもの。一方でソーシャルネットワークは対人関係の構造的側面に着目。
浅川 (2008)	他者との間で取り交わされるもろもろの支援・援助。社会関係の下位概念としてソーシャルサポートとソーシャルネットワークを位置づけ。
林 (2010)	社会関係において他者との間で取り交わされるもろもろの支援・援助。
岩佐 (2011)	対人関係の機能的側面。 ※例:家族や友人から援助を受けられるかに関する認知。
上野谷 (2012)	フォーマルサポートとインフォーマルサポートの両者の援助をあわせたもの。別々に提供されがちなため、ネットワークシステムとして作動する必要がある。
本研究	社会関係の中で、日常的な何気ない交流や、情緒の一体感も含め、他者から受けたり、他者に与える、道具的もしくは情緒的な支援の総称

野口(1991:37-48)は、ソーシャルサポートが対人関係の機能的側面に着目したもので、ソーシャルネットワークは対人関係の構造的側面に着目したものと操作的に定義した。また浦(1996:58-61)は、ソーシャルサポートが道具的サポートと情緒的サポートに大きく2分類できるとし、道具的サポートを「何らかのストレスに苦しむ人にそのストレスを解決するのに必要な資源を提供したり、その人が自分でその資源を手に入れることができるような情報を与えたりするような働きかけ」とし、情緒的サポートを「ストレスに苦しむ人の傷ついた自尊心や情緒に働きかけてその傷を癒し、自ら積極的に問題解決に当たれるような状態に戻すような働きかけ」と定義している。すでにふれたように浅川(2008:163-175)は、他者との間で取り交わされるもろもろの支援・援助・社会関係の下位概念としてソーシャルサポートとソーシャルネットワークを位置づけている。また、冷水(2011:39-64)は、道具的サポートではなく「介護・看病する・家事の手伝いをする・物品や金銭を提供するサポート」を「手段的サポート」とし、情緒的サポートの例に「慰める・励ます・悩みを聞く」といったものを挙げている。さらに「必要なサービスや買い物などの情報提供」といった「情動的サポート」を別に挙げており興味深い。岩佐(2011:660-671)はソーシャルサポートを「個人を取り巻く社会関係の機能的側面を表しており、他者との間で取り交わされるもろもろの支援・援助」としている。その上で手段的サポートと情緒的サポートの2つに分類できるとしている。これらに対して井上と上野谷の分類は、サポートを提供する主体に着目している。井上(2011:127-142)は、介護保険や社会福祉、その他関係する制度に基づいた専門職の提供するサポートを「フォーマルサポート」とし、家族・友人・知人・ボランティアなど非制度的なサポートを「インフォーマルサポート」としている。また上野谷(2012:174-178)は、インフォーマルサポートを次のように定義している。

専門職でない人々によって提供される支援。何らかの問題に出合い、自分では解決できないときや、不安を感じたときに、家族や友人、近隣住民などに相談したり手伝ってもらったり、支えてもらったりして解決する際の支援。日常生活の多くの場合は、地縁や血縁や個人の縁を用い、自然発生的な情感に支えられて成立する支援を受けている。何らかの目的をもって、意図的につくられたボランティアグループやセルフヘルプグループも含める。

また、野口(1991:37-48)はサポートの性質について、当該の個人にとって援助的な行動とその個人にとって反援助的な行動とを区別し、個人にとって望ましいものや、何らかのニーズを満たすものを「援助的な行動」としている。それに対し、個人にとって望ましく

ないものを「反援助的な行動」としている。そしてサポートの方向性について、当該の個人にとって援助的か相手にとって援助的かの 2 つの方向を区別するともしている。さらにサポート源の測定については、個人が他者と取り結ぶ関係の機能的側面を援助的か否かという観点からとらえている。その上で援助行動の相手の有無と種類によって測定するとしている。また、サポートの援助行動の経過について①予期(あるサポートをしてくれそうなのか)、②実績(実際にしてもらったのか)、③評価(それをどう思っているのか)の 3 次元を区別するとしている。それに対して浅川(2008:163-175)は、「(サポートの)授受の経験」と「(サポートの)授受の可能性」に分類している。これらの操作的定義を表 1-2 にまとめた。

表 1-2 ソーシャルサポートの操作的定義

項目	研究者	操作的定義
サポートの種類	浦 (1996)	ソーシャルサポートは大きく 2 分類できる。 ○道具的サポート : 何らかのストレスに苦しむ人にそのストレスを解決するのに必要な資源を提供したり、その人が自分でその資源を手に入れることができるような情報を与えたりするような働きかけ。 ○(社会)情緒的サポート : ストレスに苦しむ人の傷ついた自尊心や情緒に働きかけてその傷を癒し、自ら積極的に問題解決に当たれるような状態に戻すような働きかけ。
	冷水 (2011)	社会的サポート概念はその機能として下記のような分類が一般的。支援・援助の内容は ○手段的サポート : 介護・看病する・家事の手伝いをする・物品や金銭を提供。 ○情緒的サポート : 慰める・励ます・悩みを聞く。 ○情動的サポート : 必要なサービスや買い物などの情報を提供する。
	岩佐 (2011)	ソーシャルサポートとは、個人を取り巻く社会関係の機能的側面を表しており、他者との間で取り交わされるもろもろの支援・援助を指し、知覚されたサポートと、実際に受容したサポートがある。 ○手段的サポート ○情緒的サポート
	野口 (1991)	当該の個人にとって援助的な行動と、その個人にとって反援助的な行動とを区別し、「心配事や悩み事を聞いてくれる」「元気づけてくれる」など情緒または感情に働きかける「情緒的サポート」と、「看病や世話」「お金を貸す」などの手段または実体的な「手段的サポート」がある。
	浅川 (2008)	情緒的サポートと手段的サポートに加え、公的サービスの利用法を教えるといった「情動的サポート」も想定。情動的サポートは手段的サポートの派生。
	井上 (2011)	○フォーマルサポート : 介護保険や社会福祉、その他関係する制度に基づいた専門職の提供するサポート。 ○インフォーマルサポート : 家族や友人知人、ボランティアなど非制度的なサポート
	上野谷 (2011)	○インフォーマルサポート : 専門職でない人々によって提供される支援。何らかの問題に出合い、自分では解決できないときや、不安を感じたときに、家族や友人、近隣住民などに相談したり手伝ってもらったり、支えてもらったりして解決する際の支援。日常生活の多くの場合は、地縁や血縁や個人の縁を用い、自然発生的な情感に支えられて成立する支援を受けている。何らかの目的をもって、意図的につくられたボランティアグループやセルフヘルプグループも含める。
サポートの性質	野口 (1991)	当該の個人にとって援助的な行動と、その個人にとって反援助的な行動とを区別する。 ○援助的な行動: 個人にとって望ましいもの。何らかのニーズを満たすもの。 ○反援助的な行動: 個人にとって望ましくないもの。
サポートの方向性	野口 (1991)	当該の個人にとって援助的か、相手にとって援助的かの 2 つの方向を区別する。
サポート源の測定	野口 (1991)	個人が他者と取り結ぶ関係の機能的側面を援助的か否かという観点からとらえ、援助行動の相手の有無と種類によって測定する。
サポートの援助行動の経過	野口 (1991)	予期(あるサポートをしてくれそうなのか)、実績(実際にしてもらったのか)、評価(それをどう思っているのか)の 3 次元を区別する。
	浅川 (2008)	「(サポートの)授受の経験」と「(サポートの)授受の可能性」に分類する。

2. ソーシャルサポートを対象とした主な研究分野

林(2010)によれば、ソーシャルサポートに関する研究は大きく次の2つの流れで進められてきた。まず、主に老年社会学の分野で、社会関係をソーシャルサポートとソーシャルネットワークの2つの下位概念から構成されるものとし、その状況から他者との関係について考察されてきた。そして、その一方で主に精神衛生学・公衆衛生学・心理学の分野で、ストレスフルなライフイベントから、心身の疾患に至るプロセスにおける影響に関する研究がされてきた。この分野では、ソーシャルサポートのストレス緩衝効果が定説とされ、他者からのソーシャルサポートを受けることにより、心身機能低下に対する不安や孤独感、配偶者との死別後の悲嘆が緩和され、精神的健康やQOLを良好な状態に導くとされている。これらを表1-3にまとめた。

表 1-3 ソーシャルサポートを対象とした主な研究分野

分類	主な研究分野	主な研究の流れ
社会関係の態様に関するもの	老年社会学	社会関係をソーシャルサポートとソーシャルネットワークの2つの下位概念から構成されるものとし、その状況から他者との関係について考察。
ストレスに対する影響に関するもの	精神衛生学 公衆衛生学 心理学	ストレスフルなライフイベントから、心身の疾患に至るプロセスにおける影響に関する研究。

林(2010)から筆者が表を作成

このようにソーシャルサポートは様々な定義がされ、多くの研究がこれまで進められてきた。本研究では第3章において、高齢者に対する国内でのソーシャルサポート研究の知見を整理していくこととする。

第 2 章

研究の方法と構成

第2章 研究の方法と構成

1. リサーチクエスションと研究構成

本研究では独居高齢者のサポート源がどのように構成され、どのようなサポートをどの程度の頻度で受け、それらが市街地と農村部でどのような相違があるのかを1つのリサーチクエスション(リサーチクエスション a)とした。さらに独居高齢者がどのような課題を抱え、その課題がどのようなプロセスで発生しているのかを、もう1つのリサーチクエスション(リサーチクエスション b)とした。

まず初めに、このリサーチクエスション a を基に文献調査をした。この調査では社会老年学文献データベースを使用し、「サポート」等をキーワードとして、64本の論文を抽出した。その中でも36の論文について、「近隣住民からのサポート」と「独居高齢者へのサポート」に着目して、研究結果を整理した〔文献調査〕。

次にこの文献調査の結果と、リサーチクエスション b を基にインタビューガイドを作成し、調査地域の専門職(市社会福祉協議会¹⁾職員、地域包括支援センター²⁾職員、民生委員児童委員³⁾、ケアマネジャー、ヘルパー)から、独居高齢者が抱える課題等について、インタビュー調査を行った。その上で修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、「M-GTA」)を用いて2つのストーリーラインから分析した〔専門職調査〕。

さらにこの専門職調査の結果を基に、独居高齢女性へのインタビューガイドを作成し、Q市のR町(市街地)及びS町(農村部)に住む同高年齢女性18名に対してインタビュー調査を行った〔独居高齢女性調査その1〕。このように、調査対象者を市街地と農村部から選定したのは、このQ市が市街地であった市と農村であった5つの町が、2005年に市町村合併をしてできた自治体であり、同じ市内であっても地域性に差があると考えたためである。

調査項目は、①年齢、②職業、③出身地、④自動車の運転、⑤独居生活年数、⑥要介護度、⑦デイサービス・ヘルパーの利用、⑧いきいきサロン参加、⑨ゴミ出し可否、⑩地域団体等の役職、⑪サークル・老人会等への参加、⑫買物の行き先・手段、⑬通院先・病名・通院方法、⑭子ども・兄弟姉妹の所在地・接触頻度、⑮頻繁に会う近隣との接触頻度、⑯その他の交流相手、⑰民生委員との接触頻度・悩み相談の有無、⑱ケアマネジャーとの面会頻度・悩み相談の有無、⑲軽微な作業の依頼相手、⑳暮らしの満足度、㉑不安のその相談相手、とした。そしてその調査結果を用いてそれらを類型分析やM-GTAなどにより分析した。

最後にこの調査をした独居高齢女性18人のうち、S町(農村地域)に住む女性4名を有意に抽出し、改めて①親しい他者との関係と彼らの居住地、②本人のライフストーリー、③親しい他者の重要度の変容、などについてインタビュー調査をした〔独居高齢女性調査その2〕。

これらのリサーチクエスションと調査研究の構成を図2-1に示す。

2. 調査対象地域と選定理由

本研究ではP県Q市(高齢化率23.3%、独居高齢者世帯8.5% 総務省2011)を対象地域に選定した。それは研究成果を全国的に社会に活かしていきたいためである。このQ市は高齢化率や独居高齢者の割合が全国平均値(高齢化率22.8%、独居高齢者世帯9.2% 総務省2011)に近いと、分析結果が一般化し易いと考えたためである。またこの地域を選定し

たもう 1 つの理由として、同市は 2005 年に一市と五町とが合併した自治体である点である。旧市は市街地であり旧五町の大部分は農村部であることから、市街地と農村部における「独居高齢者へのソーシャルサポート」の差異も比較ができると考えられる。

主にこれらの理由で上記の地域を選定したが、近隣や友人、親族との「つきあい」はその地域の慣習や特性によって異なるため、その点にも留意しつつ調査や分析を進めることとした。

3. 倫理的配慮

九州保健福祉大学倫理委員会において調査の承認（承認番号 13-026）を得た上で、対象者に調査の依頼をする際に「調査計画」を文書と口頭で説明し、承諾書に署名をしてもらった。この調査計画には①調査の目的、②調査対象、③調査の項目、④調査の回数、⑤調査の所要時間、⑥匿名性の確保、⑦得られた結果の公表、⑧IC レコーダによる録音、⑨録音データの厳密な保管が記載されている。

個人が特定もしくは限定される可能性のあるデータ（特徴的な職業他）については、意図的に明確な表現を避けた。さらに対象者の語りは、地域の特定を避けるために全て方言から標準語に修正している。

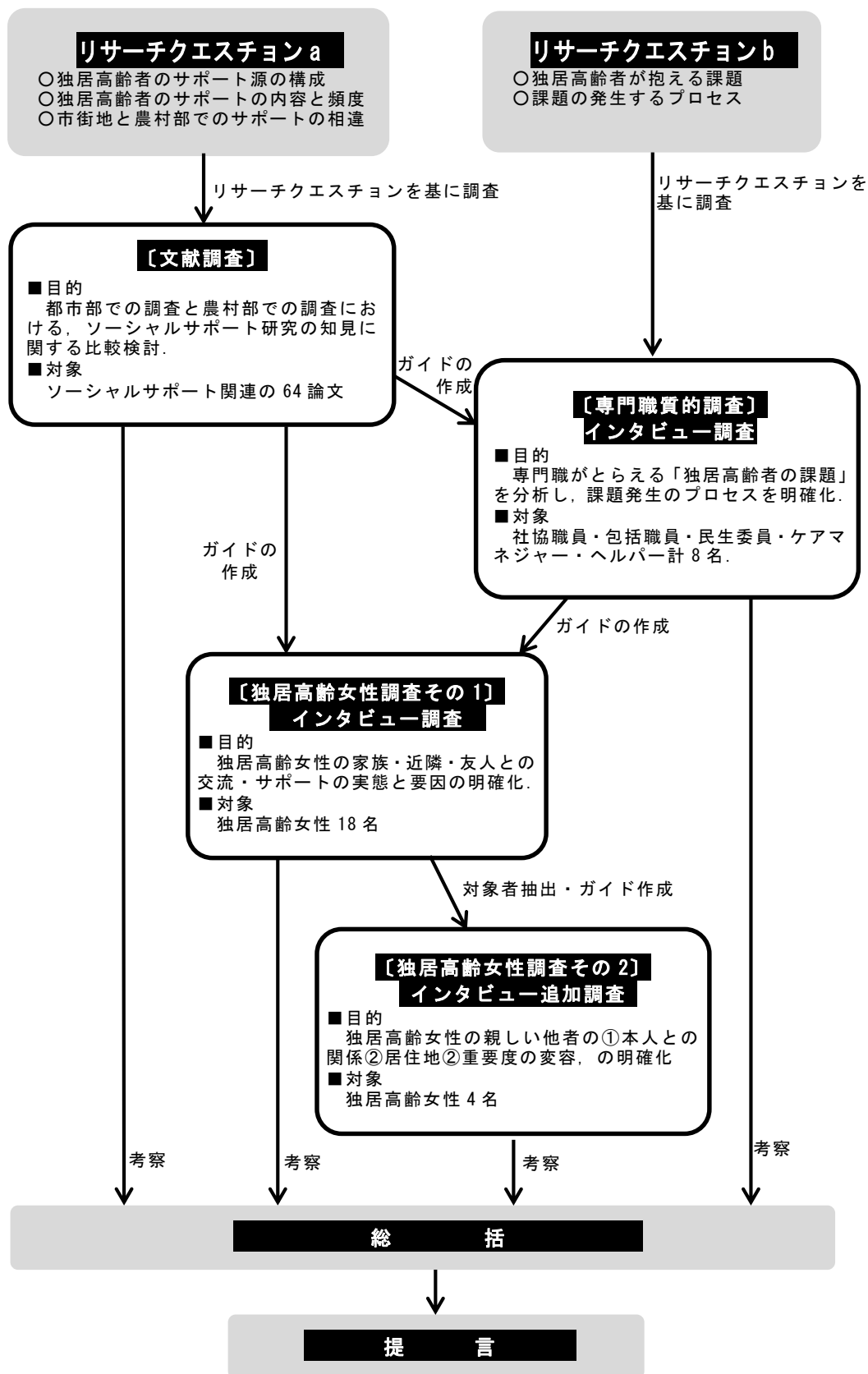


図 2-1 博士論文のリサーチクエストジョンと各調査研究の構成

第 3 章

高齢者に対する国内ソーシャルサポート研究に関する考察

第3章 高齢者に対する国内ソーシャルサポート研究に関する考察

第1章ではソーシャルサポートの定義を整理した。そこで本章では、そのソーシャルサポートに関する国内の研究においてはどのような知見が得られてきたかを深めていくこととする。

1. 研究の目的

「地域で高齢者や社会的弱者を支える」という理念は、行政だけでなく、社会福祉学・老年社会学・公衆衛生・精神衛生といった多岐に渡る研究分野で注目されている。とりわけ「ソーシャルサポート」の重要性は多くの研究者が指摘をしていることはすでに述べた。しかし、それらの知見の整理がこれまで十分に行われたとはいえない。そこで、本研究では「都市部に住む高齢者への近隣住民によるサポートと、農村部でのサポートとではどのような違いがあるのか」とのリサーチクエスチョンを立て、特に独居高齢者に対するソーシャルサポートに着目することとした。

この章では、これまでの高齢者に関するソーシャルサポート研究について、社会老年学文献データベース⁴⁾を用いて検索し、都市部を対象とした研究知見と、農村部を対象とした研究知見とを比較して検討していく。その際は「近隣サポート」や「独居高齢者に対するサポート」の内容を重視することとする。

2. 研究の方法

文献研究では、一定の基準は設けずに筆者の判断で主だった先行研究を選定していく手法(浦 1996 他)と、何らかのデータベースにおいて検索対象期間や検索キーワードを設定し文献を抽出する方法(澤岡 2011 村山 2013 他)などがある。

そのような手法がある中で、本研究では澤岡(2011)の手法を基本にして文献調査の対象とする研究を検索・抽出することとした。それは、澤岡の手法では、まずキーワードを設定した上でデータベースから文献を抽出し、さらに別に設定したキーワードを用いて抽出した文献を再び絞り込む作業がされているためである。この行程により、はじめに比較的広く文献を抽出した上で、それらを検索者の意図に沿った条件で絞りこむことが可能となる。

本研究では、公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団の社会老年学文献データベースを使用した。「サポート」「関係」「ネットワーク」「支援」をキーワードとして1983年から2013年を対象年に設定し、意図する研究のみを抽出することにした(1次抽出)。なお、1次抽出でのみキーワードを設定してコンピュータで抽出し、それ以降の抽出は筆者の判断である。ここでキーワードを「ソーシャルサポート」ではなく上記の4つのものとしたのは、ソーシャルサポートに関する研究である。キーワードに「ソーシャルサポート」と設定していない研究も含まれているためであり、検索対象を1983年以降としたのは、ソーシャルサポートに関する先行研究を概観した結果、それらが引用している論文は概ね過去30年間に執筆されたものと判断したためである。

次に、上記の各キーワードでヒットしたものについて、「近隣」「近所」「隣人」「友人」「友達」「友だち」「親友」「知人」「知り合い」「仲間」「親密」「親しい」の12のキーワードで、それぞれ絞り込み検索を行った。上記の4つのキーワードで検索したままだと抽出

する論文数が膨大になるため、その中でも本研究の着目する「近隣住民」や「友人」「知人」によるサポートについて論じているものをコンピュータで抽出した。

また、抄録が英文のものも含むため、上記と同様に「relation」「network」「support」をキーワードに設定して検索し、各キーワードでヒットしたものについて、「neighbor」「friend」「acquaintance」「mate」「close」の5つのキーワードでそれぞれ絞り込み検索を行った(2次抽出)。

その結果、日本語のキーワードによって延べ526本がヒットし、英単語のキーワードによって、延べ218本の文献がヒットした。これらのうち、重複しているものを除くと合計は302本であった。だが、この中には被虐待高齢者といったように特定の者を対象とした研究も多く含まれている。本研究は、近隣住民による独居高齢者へのサポートに着目するため、「虐待防止」「国外での事例」「高齢者を対象としていない」「要介護者・虚弱者・特定疾患患者が対象」「施設・老人福祉サービス・入所者が対象」「認知症や疾病・医療に焦点を当てた研究」「公的サービスに焦点を当てた研究」「高齢者教育」「障害者・障害福祉サービス」といった研究対象や研究テーマが特定されている研究は筆者の判断基準で分析から除いた。その結果、140本の研究に絞ることができた(3次抽出)。

この140本の研究のうち、「ソーシャルサポートに関連している」と判断できるものを抽出すると64本となり、これらについて①掲載年、②掲載学術雑誌、③調査対象者、④調査方法、の分析を行った。しかし、この64本の研究にもソーシャルサポートに関しての結論が述べられていない研究や、「家族と死別した高齢者」「リハビリテーション棟を退院した高齢者」「市外から転居してきた高齢者」を対象にした研究が含まれていた。そこで、この64本の研究のうち、「ソーシャルサポートに関する結論」が述べられていないものや、上記のような特定の状況にある高齢者を対象とした研究も除いた。すると最終的に37本の研究に絞り込むことができた(4次抽出)。この検索・抽出の流れを図3-1のとおりまとめた。

このようにして抽出した37本の研究の主な結論(知見)を整理したものが参考資料の表①である。さらに、近隣サポートや、独居高齢者へのサポートについて知見を述べているものだけを参考資料の表②及び表③のとおり抽出し、近隣サポートに関するものや独居高齢者へのサポートに関してどのような知見があるのかを分析した。

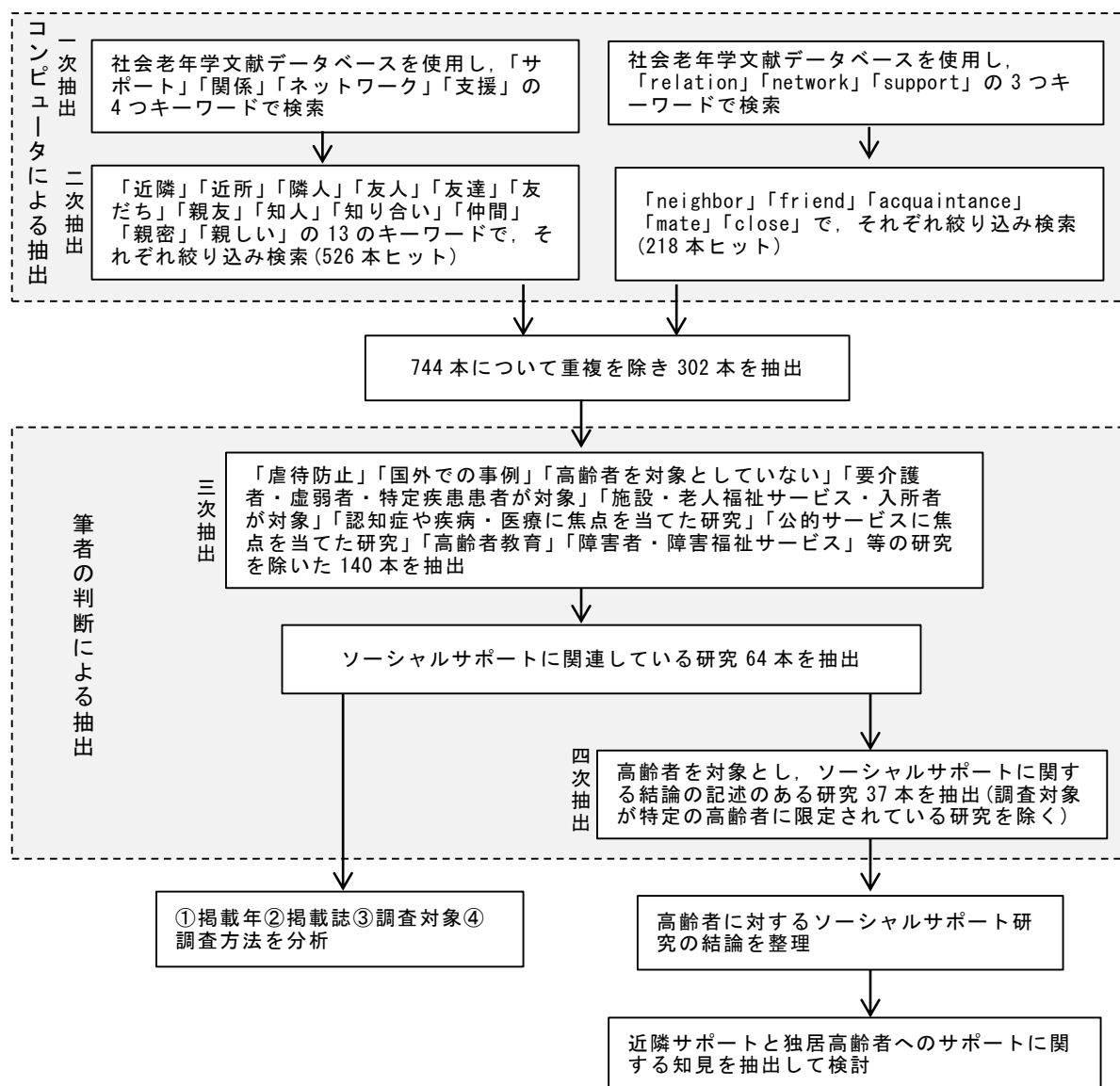


図 3-1 本研究における高齢者に対するソーシャルサポート研究の検索方法と考察までの流れ

3. 分析結果

調査の形式について分析したところ、全てが「調査研究」であり、64本のソーシャルサポート研究の中に「文献研究」は含まれていなかった。

また、調査研究のうち、「量的調査」を行っていたものが76%であった。「質的調査」を行っていたものは21%であり、質的調査と量的調査の混合研究は3%であった(図3-2参照)。

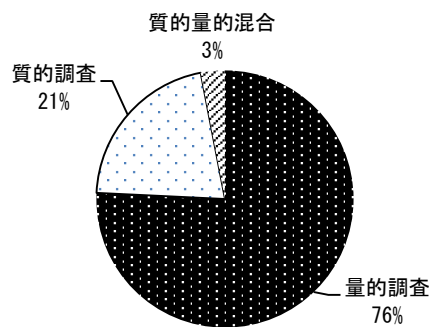


図 3-2 ソーシャルサポート論文の調査方法の割合

調査対象についてみると、「高齢者(65歳以上)」と「60歳以上の人」を合すると66%になった。これに、「60歳未満と60歳以上混在」14%を加えると、80%となる。そのことから、今回抽出したサポート論文の多くは高齢者を対象に調査をした研究であることも分かった(図3-3参照)。

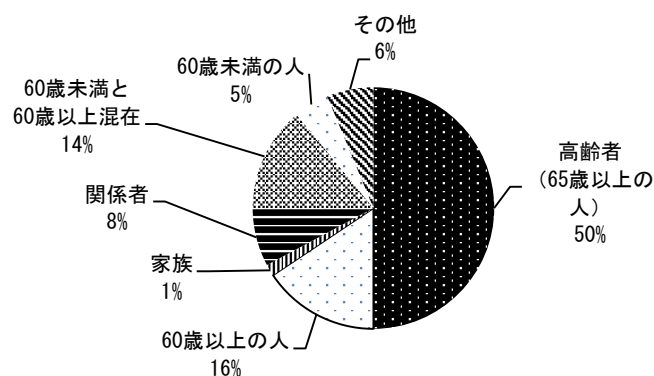


図 3-3 ソーシャルサポート論文の調査対象者割合

さらに、調査対象の高齢者がどのような条件で選定されたかについても分析をした。すると何らかの年齢条件を加えていたものが最も多く、次に独居高齢者に限定したものが多かった(図3-3参照)。また、64本の研究のうち、ソーシャルサポートに関する結論が述べられていた。そして調査対象者が特定されている研究を除いた、37本の研究の主な結論(知見)は参考資料の表①のとおりである。この調査対象者が特定されている研究とは①家族と死別した高齢者、②リハビリテーション棟を退院した高齢者、③市外から転居してきた高齢者などを指す。

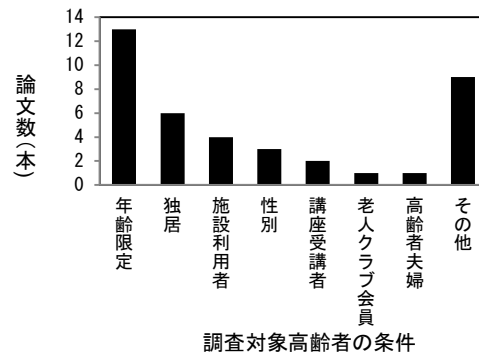


図 3-4 ソーシャルサポート論文の調査対象高齢者の条件

4. 考察

(1) 近隣・友人・知人の区別

先行研究では「近隣」とひとくくりにしている尺度を多く見かけるが、特に農村部では近隣に親族が住んでいることも多く、どこまでが親族で、どこからが他人なのかは家系図を見ないと自分たちでも完全には分からないということも珍しくはない。つまり、近隣の中には、親族が少なからず含まれているはずである。また、これは農村部に限らないが、「近隣」と「友人」と「知人」を区別することは、実際には困難な作業である。そのため、「近隣・友人・知人」をひとまとめの尺度にしている量的研究も多く見られる。

しかし、今後、「地域」、とりわけ「近隣」で高齢者を支えていくシステムを模索していく際には、高齢者の家からすぐ近くに住んでいる「近隣」と、車で何十分もかかる所に住んでいる「友人」や「知人」とをひとまとめにしていれば、インフォーマルなサポートの実態は、いつまで経っても明らかにはならないといえる。そのため、近隣サポートの実態把握に加えて、「近隣」と「友人」や「知人」を明確に区分した調査の実施など、まだ不十分なことも多く、「地域福祉」への注目や、独居高齢者の増加も伴い、ソーシャルサポート研究は、今後さらに注目されていくと考える。

(2) 調査の対象者

ソーシャルサポート論文の調査方法は「量的調査」が約 8 割を占めていた点については、今回分析したのが社会老年学のデータベースであり、「調査対象者が地域の高齢者である研究」が多くの割合を占めていたことと関係があると考えられる。もし、分析するデータベースに、「看護」の分野を加え、調査対象を高齢者に限定しなければ、質的なソーシャルサポート研究の割合が増えてくるように思われる。それは、質的研究が「看護」の分野で注目され、看護において実践ですでに活かされているからである。

また、調査対象者の条件は「年齢限定」が最も多かったが、これは、あまりに高齢の方を調査対象に含めると、郵送調査や面接調査において回答が困難な場合など、様々な理由があるのではないかと考えられる。

対象を独居高齢者に限定した研究も多かったが、これは、独居高齢者は、必然的に配偶者を含む同居家族からのサポートが無いから、独居高齢者は「別居子や近隣からのサポートを、より必要とする存在」とであるという認識によるところが大きいように思われる。ただし、高齢者夫婦世帯を対象とした研究はこれまで少なく、今後は、より注目をされるこ

とに期待したい。それは、第4章で述べる専門職への調査において、複数の専門職が、高齢者夫婦も、例えば「老々介護」といった、独居高齢者とは別の深刻な課題を抱えていると語っていたためである。そして、独居高齢者と同時に高齢者夫婦世帯も増えていくと試算されている。ところが、フォーマル・インフォーマルの両面のサポート対象として、高齢者夫婦は注目されていないと考える。その要因の1つに、高齢者夫婦には独居高齢者ほどには「孤独死」への懸念がないことがいえるだろう。

また、施設利用者や講座受講者、老人クラブ会員を調査対象としている研究が多いのは、調査の「しやすさ」が大きな要因といえよう。概ね、対象者が一堂に会しているため、説明や調査が進めやすい上、記名してもらえる調査であれば、欠損データなどの確認も容易なためである。しかし、このように調査対象を有意に抽出した研究の結果は、在宅高齢者に一般的に当てはめて考えることはできず、あくまで「施設利用者に関するサポート」であったり、「講座受講者に対するサポート」であることに留意が必要である。

(3) 近隣サポートの性差

近隣サポートに関する性差に着目してみると、都市部での研究結果は、女性が男性よりも近隣サポートを求める、もしくは近隣関係をもつ(山口他 2011, 野辺 1999, 野口 1991)といった知見のみであり、はっきりとした傾向が見られた(参考資料の表②参照)。これは都市部に限らず、一般的に、女性は男性よりも他者とのコミュニケーション能力が長けているためと考えられる。

一方、農村部では、上述したように、男性同士は農業などの仕事を通じてコミュニケーションをとらざるをえないが、都市部の男性にはそういった「お互いを繋ぐもの」は、農村より少なく、他者と接する機会は、自発的に動かなければ増えない。このため、都市部では、自発的にコミュニケーションがとれる女性の方が男性に比べて、より近隣サポートを求めたり、サポートを受けている可能性がある。

(4) 独居高齢者に関する知見

最後に、独居高齢者に注目して、主な知見を検討してみた。すると、都市部での研究においては、「孤立状態の人のうち、約8~9割の人は緊急時や日常の軽微な支援を頼める人が1人もいない(岸他 1994:474-488)」「他者との間で話されるのは軽いあるいは習慣的な事柄が多く情緒的サポートの授受はわずかである(澤岡 2012:39-45)」「日常的に交流する他者のなかには役割のうえの関係のみを有する非親族も多く含まれている(澤岡 2012:39-45)」といったように、独居高齢者へのサポート不足が懸念される知見がいくつも見られたのに対し、十分なサポートがあるとした知見は見られなかった(参考資料の表③参照)。

一方、農村部での研究においては、「独居高齢者は、複数の近隣住民との関わりや、長年のネットワークにより緊密な関係を形成している(渡瀬 1998:33-42)」というものがあり、「別居子と会う頻度が密であるからといって独居高齢者が不安を感じる頻度が減る訳ではない(渡瀬 1998:33-42)」といったものもあった(参考資料の表③参照)。これらの知見から、農村部に住む独居高齢者は、別居子からの情緒的サポートが十分でない反面、近隣などの周囲と密な関係を保持していると考えられる。

第 4 章

専門職が捉える独居高齢者の課題と発生プロセス

第4章 専門職が捉える独居高齢者の課題と発生プロセス

ここまではソーシャルサポートの定義を整理し、国内のソーシャルサポート研究の知見について考察してきた。本章からは調査対象地域におけるインタビュー調査の結果を用いて、独居高齢者が抱える課題が発生するプロセスや、同高齢者が授受しているサポートが形成していく要因について深めていくこととする。

1. 研究の目的

これまでに「高齢者の周囲との関係」や「不安感」等に関する先行研究としては、権ら(2004:52-61)や山口ら(2011:21-31)、澤岡ら(2012:39-45)、西村(2004:184-191)、板東ら(2008:93-99)の、「サポート源」や「交流相手」、「ネットワーク」等の分析がある。また、斎藤ら(2009:100-122, 2010:470-480)は「孤立の発現率」や「独居に至る経緯」を調べ、渡瀬(1998:33-42)や小林(2011:446-456)は「不安感や抑うつとサポートとの関連」を分析している。しかし、これらは高齢者自身を対象とした調査研究であり、専門職等の支援者の視点から見ればこれらの調査とは異なる課題が浮き彫りになる可能性がある。

専門職が独居高齢者の抱える課題をどのように捉えているかを調査した研究もある。たとえば小川(2006:24-29)はケアマネジャーや包括職員に対して、援助拒否等への対応を調べた。しかしそのような研究は多くは見られない。

また、序章でも述べたように、木下(2003:28-34)のいう「人間の行動を説明したり予測したりするうごき」や後藤のいう「独居高齢者が孤立に至る経緯」を明らかにするには、日常生活の多様性にも対応ができる「質的調査・分析」手法が適していると考えられる。

そこでこの章では、市社協や包括職員、介護保険事業所のケアマネジャーやヘルパー、民生委員といった、日頃から同じ地域で高齢者の相談援助や介護を行っている専門職に対し、彼らが高齢者の課題をどのように捉えているかについて調査をする。ここで、民生委員は地域住民の一員という側面もあり、専門職に含めるかは各研究によって不統一ではあるが、本研究では専門職に含めた。その調査結果であるインタビューデータの質的分析を通して、独居高齢者が抱える課題がどのようなプロセスで発生しているのかを明らかにしていく。

2. 研究の方法

(1) 調査対象者

調査は、市社協の福祉活動専門員、北部包括及び南部包括の各所長、R町(2名)及びS町の民生委員児童委員(以下「民生委員」)、介護保険事業所のケアマネジャー・ヘルパーといった5職種(8名)を対象に行った。市社協は高齢者等の見守りネットワークを推進しており、包括は高齢者の相談窓口である。民生委員は住民の身近な相談機関であり、ケアマネジャーはケアマネジメントを専門としている。ヘルパーは在宅高齢者に頻繁に接している。なお、調査が市街地もしくは農村地域の高齢者に関するものに偏らないように、包括及び民生委員はR町(市街地)及びS町(農村地域)を管轄する各部署⁵⁾から調べた。それは岸ら(1994:474-488)が示したように、「市街地」と「農村地域」では高齢者の他者との繋がりに差があるため、彼らの抱える課題も異なると考えたためである。また、ケアマネジャーとヘルパーは、市内の市街地と農村地域のどちらにも拠点がある事業所Uの職員から調

査をした。

(2) 調査項目

調査項目は、①地域の独居高齢者が抱えていると思われる課題、②前述の課題に対して所属の機関や調査対象者が進めてきた取組み、③今後、前述の課題に対して所属の機関や調査対象者が進めたい取組み、④これまでの取組みや今後の取組みを進める上での問題点、⑤その問題を解消するための対策、の5点とした。①及び②を設定したのは同高齢者が抱える課題の捉え方は5職種で異なり、なおかつ各職種はこれまでにそれぞれの特性を活かした取組みを行ってきたと考えるためである。また③から⑤を設定したのは、同高齢者支援の構想や問題点も調査することで新たな課題が浮かびあがると考えたためである。

(3) 倫理的配慮

調査の依頼時に①調査の趣旨、②匿名性の確保、③得られた結果の論文としての公表、④ICレコーダによる録音、⑤録音データの厳密な保管、等を含めた「調査計画」を文書と口頭で説明した。さらに各調査の対象者に結果内容を確認してもらった。

(4) 調査方法

2013年7月から10月に、各機関の拠点で半構造化インタビューを行った。調査は8人に対して行い、所要時間は平均1時間1分（合計で8時間11分）であった。民生委員は常駐する施設がないため、民生委員の自宅もしくは公民館を使用した。

(5) 分析方法

分析は修正版グランデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を用いることとした。この手法のオリジナル版は①理論生成の志向、②データに基づいた分析、③経験主義の立場で現実理解のためのデータ化、④分析者の感覚的理解、等を重視している(木下2003:150)。そしてM-GTAは、木下がオリジナル版の特長を継承しつつ、分析プロセスの明示によりインタビューデータ(以下、データ)のコーディング方法を明確化し、さらに分析のプロセスでデータの持つ意味を深く解釈するといった点を修正した手法である(木下2003:223-229)。このM-GTAはデータの切片化を行わず語りの「文脈」から理論やプロセスを導き出す手法(木下2003:223-229)のため、本研究に最適であると考えた。木下はM-GTAに適した研究として「健康問題や生活問題を抱えた人々に専門的に援助を提供するヒューマンサービス領域が最適」としており、この点においても、M-GTAは本研究の分析手法に適しているといえる。なお、本研究では分析テーマを「独居高齢者の課題発生プロセスの明確化」とし、分析の焦点者は「独居高齢者」とした。ここで「分析テーマ」とは、研究そのもののテーマをデータに即して分析ができるように絞り込んだものを指し、分析焦点者とは解釈のために設定する視点を指す。

3. 結果と考察

分析ではデータをテーマに照らしつつ「分析焦点者」である独居高齢者の視点に立って読み解き、テーマに該当する部分を、文脈を崩さずに「具体例(参考資料 表④参照)」とし

て、合計 32 の「分析ワークシート」に抽出した。この「分析ワークシート」とは、分析テーマに沿って抽出した具体例、および定義、概念、および理論メモ(気づきなどを適宜メモしておくもの)を、概念ごとにまとめておくものを指す。例を参考資料の図①に示した。

その上で、具体例を説明し得る「概念」を生成していった。木下は、具体例が他に抽出されなかった概念は廃止してカテゴリーに反映させていないが、本研究は具体例が 1 つであっても、具体例⑨のように考察に欠かせないものはそのまま概念として残すこととした。次に、概念のまとまりである「カテゴリー」を生成する作業の中で、他の概念と重なっているものは統合し、カテゴリーとしてまとまらないと判断したものは廃止する作業を繰り返した。木下(2003:223-229)のいう「理論的飽和状態」になった時点で、14 の概念と、【本人の消極性】⁶⁾、【不安の増幅】、【支援者との意識のズレ】、【サポートの低下】、【家族サポートの不足】、【周囲からの孤立】、【経済的な制約】、【体の衰え】という 8 つのカテゴリーを確定させた。

次に、本研究で焦点を当てている「課題発生のプロセス」について 2 つのストーリーラインから検討することとする。

(1) ストーリーライン A：本人の消極性によるサポート低下・孤立の発生

調査の対象は次のように語っていた。

そういう電化製品がうまく…。こちらがいいと思ってもやっぱ利用できないってこともあるんですけど。あとは、今、私が一人関わってる方がですね。介護拒否じゃないですけど、なかなか受入がうまくいなくて、私たちがこうあった方がいいっていう状況が必ずしもその人たちがいいと思ってないですね。

つまり、消極的な本人と、本人を心配する支援者とは意識のズレが生じることがあるのである。そのため、支援者がサービス利用を提案しても本人は受け入れないことも少なくない。なおかつ支援者間の情報共有も了承しないこともある。それは次のような場合である。

家に人が入って来て掃除してもらうのが「いい」家と「いや」な家とね、それがうちの一区は特に、もう。うちの家内なんかは徹底的に嫌だった。それで、この間もね、家に入れてね、介護 2 やから入れて、掃除してもらって、なんか作ってもらおうっていうんだけど、やっぱり嫌がるから、どうしても自分だけでしないといけない。そういう、個人の意識の問題もあるんですね。

そのような場合、フォーマル・インフォーマルの両サポートが低下してしまう可能性が高まると考えた。

また、本人が消極的であるために自らサービスを利用することは多くは望めない。さらに、人に会うのが面倒であるために周囲から孤立していく恐れも強いといえる。そのため、それまでは悩みを聞く等の情緒的なサポートをしていたインフォーマルな「近隣・友人」とも会わなくなるので、彼らからのサポートも低下いくことが十分に考えられる

「日常の安否確認という事ですけど、これも、あの、買い物などで、自分で、あの、外出できる間は、人と会ったりとか交流する機会に恵まれていますけど、そのようなつきあいを行っていないとか、そういった方は、孤立しやすいという風に考えます。」

これらのプロセスを視覚化したものを図 4-1 に示す。

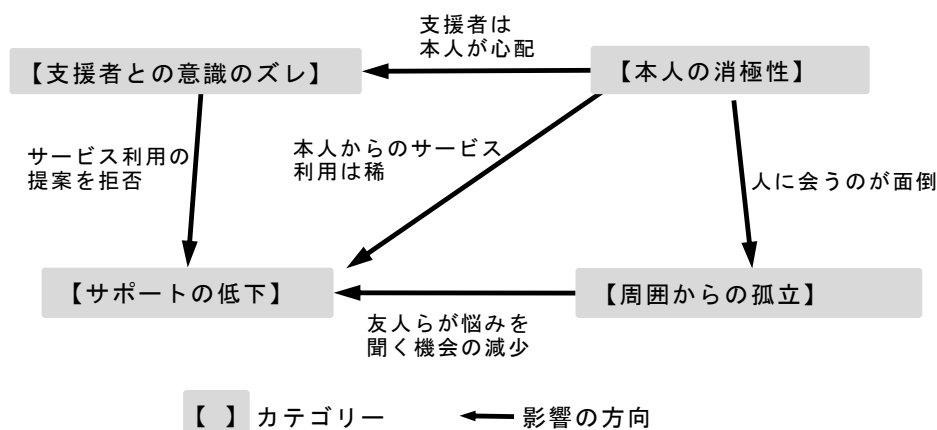


図 4-1 本人の消極性による課題の発生プロセス

(2) ストーリーライン B：体の衰えによるサポート低下・孤立・不安感の発生とその悪循環

次のような語りがあった。

「85 前の人、4 だったのかな。もう、歩けなくなって、っていうか外に出て、こう買い物とかなんかができないくらい、足腰が痛んで、そういう方が病院に治療に行くのはタクシーでね、R 町から、W 外科とかタクシーで行って、タクシーで帰って、とか、そういう状態のときに、やっぱりゴミ出しを近所の人がしてくれてるけれど、とっても気の毒っていうところで介護保険を使って、ゴミ出しをしてもらう、それから買い物をしてもらう、っていう、そういう使い方をして、今は元気になって、はい。86、今は元気になりましたけどね。そういう使い方…」

つまり高齢者には、体の衰えによって医療費や通院費が増えることがしばしば見受けられるのである。すると家計が苦しくなり、何らかの部分に経済的な制約が生まれることもある。そのような制約があると、食費を減らしたり、タクシーを節約して外出が減る傾向になり、次のように体の衰えを加速させる場合があった。

「特に、今、(中略) 大きな、あの一、スーパーが、ね、車を若い人は持っていて、さっと買い物に行ってですね、あの、買い物できるような状況にはありますけれども、独居の方って、自分で運転して行く方は、問題ですけど。そういう所にも、あ一例えば、

タクシーを使っていけないといけないとかなると、経済的に恵まれた方ばかりじゃないので、えーそのいうのを辛抱してしまったりとか、必要最低限のものを買うとか、いうような生活になるんじゃないかと思いますね。で、まあ要支援とか、要介護認定とか受けている方であれば、あの、ヘルパーの活用とかですね、ヘルパーに、こう、買い物をしてもらうとか、そういうこともできるんですけど、えー、まあ認定を受けてない方でも、自費のヘルパーとか活用は考えられますが、それでも1時間1500円ぐらい、あーかかったりとかするから、やっぱり、これもさきほどのような、経済的な、あの一、不安がある方は、なかなか利用しにくいんじゃないかと思います。」

また、そのような制約のために介護サービス等のフォーマルサポートが思うように利用できなくなる場合もある。

「去年も、ほんと買い物支援とかもヘルパーさんもできるんですけど、今、介護保険の縛りとかも、さっき言った経済状況もあるし、1回の利用時間が1時間とか決まってるんですね。生活支援が入れるのが1時間って決まってるんですね。1時間の中で掃除、食事、買い物って無理なんですよ。じゃあ、週に2回入ってもらえばいいんじゃないかっていうと、経済的にとか、なってきた本人さんがお金がかかるのが、ってなればですね、まあそこは三回、ほんの数分ですけど、「元氣してる」みたいな。」

「だから、ま、自分が、体が健康だと全然考えなかったけど、自分がだんだん弱っていくと、やっぱりすごく不安が募って来てる方も多いですね。やっぱりそして、ひとり暮らしでも、やっぱりほら、認知が始まったりとかですね、そういう方たちには、また、「それなりに分かってらっしゃるのか、ちょっと不安は、あの、またちがった不安が出てこられてるのか、全く、そんなの気づかれてないのか」っていう感じで。」

このようにしてヘルパーの利用を減らすと、食生活の乱れや外出減、服薬忘れにも繋がります、ますます体が衰える「悪循環」に陥ることが懸念される。さらには、体の衰えにより外出が減るので、次のように近隣や友人と会う機会が減少につながりかねない。

「あと、V地区の方はギリギリまで、自分で自立して生活を楽しみたいっていうのもあられるので、あの一、公民館活動も、公民館もすぐ近くじゃないですか。(中略)だからギリギリまではそういう自分の活動を積極的に、楽しまれてる方も多くて、ここに相談に来られる方っていうのは、若年性とか、早く障害を持たれる方は別として、85過ぎぐらいから、うん、85過ぎたら、とたんに体が弱って、そういった公民館活動もできなくなって、っていうところで相談に来られる方がいらっしゃるんですよ。」

「日常の安否確認という事ですけど、これも、あの、買い物などで、自分で、あの、外出できる間は、人と会ったりとか交流する機会に恵まれていますけど、そのようにつきあいを行っていないとか、そういった方は、孤立しやすいという風に考えます。」
そうしているうちに、人と会う意欲そのものが低下し、外出する回数が減るために、ま

すます体が衰えるという「悪循環」がここでも起きる可能性が考えられる。このように、体の衰えそのものに加えて、周囲から孤立することで本人の不安が募っていくと考えられる。

「あー課題ですね。うーん、そうですね。そういったのに、ついていけない方が取り残されるのかなっていうのもありますね。(中略)やっぱりその身体的に、活動に参加できないとか…。」

「最近では買い物難民とか言葉が使われていますけど、まあ、自分の歩いていける範囲で食材の買い物ができる店があったりとか、あー、移動販売車が、こう来てからですね、あの利用できる、食材を買うことができるとか、食材の配達とか、弁当の配達を利用するなど。そういうことを利用されてる独居高齢者の方は、いいとは思いますが、いずれのような方法もとれないとかですね、知らないとか、んー、そういった方は、食に直結することは健康の維持にもつながることですので、あのそういった点は不安だなあと思います。」

さらには、家族からの優しい言葉や安否を気遣う連絡が少ないと、本人の不安は増していく場合も考えられる。

「その介護サービスにつなげるにしても、男性の方は目的意識がないといかないじゃないですか。」

「男性の引きこもりじゃないですけど、活動をする場がないっていうところを、どういう風に地域にいっぱい出すのかってところで。」

これらの一連のプロセスを図 4-2 に示す。

(3) 考察

上記のとおり、課題発生プロセスを整理したところ、ストーリーAでは、本人の消極性が、支援者との意識のズレや、フォーマル・インフォーマルなサポートの低下を生み、さらに、本人を周囲から孤立させることにより、サポートがますます低下するプロセスを明らかにした。

先行研究では独居高齢者の消極性について、小川(2006:24-29)は、ケアマネジャーの6割が援助拒否や消極的態度を経験しているとし、河合(2009:114-115)は「おっくう」や「集団活動が苦手」なために社会活動に参加しない人が多いとしている。また、横山(2005:424-437)は、日常生活に支障のない高齢者の閉じこもりは、友人や町内会との関係等を原因とする「自らの意思」によるものとしている。これらは、いずれも本人の消極性により課題が発生していることを示したもので、前述の分析結果に相当する。そのため、

今後、高齢者が一人でも安心して在宅生活を送るためには、自ら率先して人に会い、相談をしたり、支援者の意見に耳を傾ける「自助」が欠かせないとする。

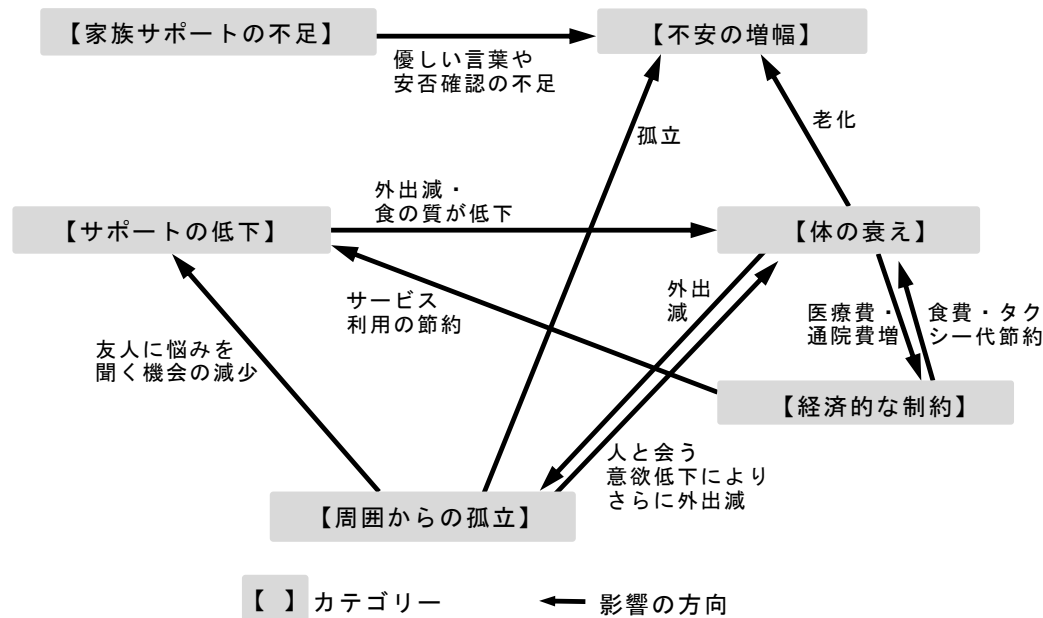


図 4-2 体の衰えや家族サポートの不足による課題発生プロセス

また、ストーリーライン B では、体が衰えると、医療費や通院費が増え、介護等のサービスや食費、タクシーの利用を減らさねばならず、食生活の乱れや外出減、服薬忘れ等につながり、体が衰えていく「悪循環」に陥る上、衰えにより外出が減り、近隣・友人と会う意欲が低下することによって、ますます外出は減り、さらに体が衰える「悪循環」も起きる可能性がある。さらに体の衰えそのものや孤立に加えて、家族サポート不足により本人の不安は増幅する、というプロセスを明らかにした。

山口市で 400 人以上の在宅高齢者の調査をした青木 (2004:23-34) によれば、高齢者の心身の健康度と自己効用感には、双方に強い有意な関連がある。さらに青木は、自己効用感が高い程、サポートと社会活動性は高められ、サポートが高いほど社会活動性を高めるとも結論づけている。また、独居高齢者に関する内閣府 (2013) の調査によると、健康状態がよくない独居高齢者のうち、経済的に心配な人や外出にタクシーを使う人が、それぞれ 3 割以上おり、趣味や運動、町内会活動に全く参加しない人が 7 割以上で、近所づきあいがいない人は 2 割おり、将来にとっても不安を感じる人は 6 割近くもいる。また、山口 (2011:21-31) は、孤立している人はインフォーマルなサポートが得られず、将来の不安が大きいとしている。さらに渡瀬 (1998:33-42) は、彼らの不安が大きくなるのは病気の時だとしている。これらの知見からも、「衰え」や「孤立」が、サポート低下や将来不安に起因している可能性が十分に考えられる。

その「衰え」に密接に関連していると思われる「外出」を促すには、乗合バスなどのハード面の整備も一定程度は効果があると思われる。一方のソフト面では、「外出したくなる動機」になり得る「役」が重要だと考える。それは、「閉じこもりに独居男性が多

い」とされる中で、インタビューにおいて「男性は『役』により社会参加の動機付けが効果的である」との語りがあったためである(具体例⑭)。そこで、地域団体や各種グループなどが、意図的に多くの男性独居高齢者に対し、その人に見合った「役」を割り振ることができれば、彼らの精神的な「張り」となり、外出や社会参加の強い動機になる可能性がある。

また、未婚や子どもがいない独居高齢者の増加によって、「家族サポートの不足」は、今後も深刻化していく恐れが強い。澤岡(2012:39-45)は、独居高齢者にとって、他者からの情緒的サポートはわずかであるとしている。内閣府の調査(2013)では、日頃の用事を頼む相手について、将来が不安な人のうちの12%の人が「子ども」と答えた一方で、29%の人は「民生委員」と答えた。これは、子どもに用事を頼める人は、将来の不安が少ないことの表れといえる。そのため、「働き盛りや子育て中の世代」に対し、自分の親がに優しい言葉かけや安否を気遣う連絡をしていくように啓発していくことも効果があるのではないかと考える。

第 5 章

市街地と農村部における独居高齢女性のインフォーマルな社会関係

第5章 市街地と農村部における独居高齢女性のインフォーマルな社会関係

第4章では、「支援する側」の専門職にインタビュー調査をすることで、独居高齢者が抱える課題について検討した。そこでこの章からは、「支援を受ける側」である独居高齢者の中でも女性に絞ってインタビュー調査をし、彼女らが親族・近隣・友人といったインフォーマルな他者との間にどのような社会関係を保持しているかを検討していく。

1. 研究の背景と目的

(1) 近隣・友人と独居高齢者との結びつき

林(2010:141-152)は「少子化の進行や都市における人間関係の希薄化や限界集落化などにより、家族・友人・近隣からのソーシャルサポートが得られない一人暮らし高齢者は今後増加する」としている。そして独居高齢者に対するソーシャルサポート研究の動向を整理し、下記のようにまとめている。

- ①一人暮らし高齢者のソーシャルサポートにおける他者の選択機序は、居住地域(特に都市部、郡部の違い)や援助行動の相手の続柄やソーシャルサポートの内容などにより異なる。
- ②家族・親族以外のネットワークの援助行動の相手との関係についての研究が少ない。
- ③一人暮らし高齢者のソーシャルサポートについてはネットワークの周辺部の他者についての知見が求められている。
- ④友人・近隣・ボランティア・フォーマルな援助者などの非親族との関係形成については不明な点が多い。

しかし、家族や近隣との関わりが異なると考えられる「都市部」と「農村部」を比較した研究は野邊(2005:116-132)などの研究に限られる。第1章でも述べたようにこれまでのソーシャルサポートに関する研究は、そのほとんどが大都市を調査対象地にしたものであり、都市部と農村部においてソーシャルサポートがどのような違いがあるのかは、十分に解明されているとはいえない。

上野谷(2011:174-178)は、インフォーマルなソーシャルネットワークのうち、家族・友人・近隣・個人ボランティアによるものは地縁・血縁・情感に支えられ、自然発生的に成立した行為だとしている。その上で、私たちは困難に遭遇した際の多くは、専門職には相談せずにインフォーマルなサポートによって対処するとしている。さらに、その人固有の生活にも、彼らからのサポートの方が有効であり、フォーマルサポートと組み合わせることで初めて社会福祉援助システムとして期待できるとも指摘している。井村(2011:116-117)も上野谷の指摘を踏まえて、なじみのある人間関係は安心感と信頼感を維持・継続し、助け合いや互助を高めるとしている。そして独居高齢者が在宅で暮らすための、多様な社会資源をニーズに合わせて結び付けていく必要性を述べている。

澤岡ら(2011:47-59)は社会関係の研究において用いられている非親族との関係指標の研究課題として、高齢者の社会的関係そのものに関する研究の必要性を挙げている。

(2) 研究の目的

今後とも増加するとされる独居高齢者が孤立しないように、家族だけでなく、近隣や友人

といった「本人になじみのあるインフォーマルなサポート」と、「専門職らによるフォーマルなサポート」を適切に結びつけた支援体制が求められていると考えられる。そしてそのためには、近隣や友人と、独居高齢者との結びつきの解明が急務だといえる。

そこでこの章では独居高齢女性 18 人に対し、彼女らと近隣・友人との「交流」や「サポート」についてインタビュー調査した結果を質的に分析し、独居高齢女性の持つ「つながり」の実態とその要因を検討していく。なお、分析では近隣と友人との相違に特に着目しながら、彼女らの語りを分析していくこととする。

2. 研究の方法

(1) 調査対象者

P 県 Q 市の R 町(市街地)及び S 町(農村部)に住む独居高齢女性 18 名にインタビュー調査を行った。調査対象者を市街地と農村部から選定したのは、この市が 2005 年に市街地であった「市」と、農村であった「5 つの町」が市町村合併してできた自治体であり、同じ市内であっても地域性に差があると考えたためである。なお調査対象者の選定は、R 町および S 町の民生委員に、①インタビューに答えられる判断能力があること、②調査に対する協力意思があること、③独居高齢者であること、の 3 点を依頼し委ねた。

(2) 調査項目

調査項目は、①年齢、②職業、③出身地、④自動車の運転、⑤独居生活年数、⑥要介護度、⑦デイサービス・ヘルパーの利用、⑧いきいきサロン参加、⑨ゴミ出し可否、⑩地域団体等の役職、⑪サークル・老人会等への参加、⑫買物の行き先・手段、⑬通院先・病名・通院方法、⑭子ども・兄弟姉妹の所在地・接触頻度、⑮頻繁に会う近隣との接触頻度、⑯その他の交流相手、⑰民生委員との接触頻度・悩み相談の有無、⑱ケアマネジャーとの面会頻度・悩み相談の有無、⑲軽微な作業の依頼相手、⑳暮らしの満足度、㉑不安のその相談相手、とした。

なお、これらの調査項目は、第 4 章においての、専門職へのインタビュー調査の結果を元に、主なカテゴリーを整理して作成したものである。

(3) 調査方法

2013 年 10 月から同年 12 月に各高齢者の自宅で半構造化インタビューを行った。調査の平均時間は約 45 分であった。

(4) 分析方法

まず、対象者ごとに年齢、職業(以前のものを含む)、出身地、自動車の運転、独居年数、要介護認定、歩行能力、デイサービス・ヘルパーの利用、ゴミ出しの可否、主な買物の行き先と手段、通院先と通院手段・頻度、その他の外出先と移動手段、子どもや兄弟の所在地・接触頻度・頼みごと、近隣との接触・交流頻度と主な相手、その他に頻繁に接触・交流する相手、軽微な作業の依頼相手、生活の満足度、不安の内容と相談相手、その他の対象者に関する印象について整理し、対象者の状況を概観した。

次にそれらを踏まえて以下のとおり分析した。

1) 近隣と友人との接触・交流の比較

上記のとおり、インタビュー項目ごとにデータを整理したところ、近隣と頻繁に接触したり、友人に悩みを相談する者が少なくないことが明らかになった。そこで、上記のデータを用いて、独居高齢女性の「近隣・友人との接触・交流の頻度」や「その長さ」「形態」「内容」「その他の接触・交流、悩み相談の有無」について対象者全体の傾向を分析し、近隣と友人における相違点とその要因について検討した。

2) 類型分析

独居高齢女性は娘に不安や悩みを相談する人が多いが、その娘は市内に住んでいることもあれば、県内の市外や県外に住んでいることもあるし娘がいない女性もいる。そこで、冷水(2009:39-64)の手法を参考にして、相談相手が「近隣」、「友人」、「娘」であるケースと、誰にも「相談しない」ケースの、4つの類型に独居高齢女性を分けた。その上でそれぞれを、娘の居住地が「市内」、「県内市外」、「県外」、「なし」のケースに分け、特徴的な類型の背景にある要因を調査結果のデータから分析した。

さらに、独居高齢女性が住む居住地によって相談相手に違いがあるのかを検討するため、彼女らの居住地を「市街地」と「農村部」の2つの類型に分け、前述の分析の「相談相手」を用いてさらに4つの類型に分けて同様の分析を行った。

3) 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

最後に、独居高齢女性らと近隣・友人との関係が深まる要因を検討するため、M-GTAを用いて分析することとした。このM-GTAは第4章でも述べたとおり、データの切片化を行わず、語りの「文脈」から理論やプロセスを導き出す手法である。M-GTAを開発した木下(2007:66-68)はこの手法に適した研究として「健康問題や生活問題を抱えた人々に専門的に援助を提供するヒューマンサービス領域が最適」としている。本論では、専門的サービスではないが、同じ「援助」である「ソーシャルサポート」が健康問題や生活問題を抱えた独居高齢女性に提供されている。そのため、このM-GTAがここでの分析に最適であると考えた。なお、分析テーマは「独居高齢女性への近隣・友人とのつながりが深まる要因の明確化」とした。また分析焦点者は「独居高齢女性」とした。

3. 分析結果

(1) 対象者の概要

対象者は独居高齢女性18名であった。また対象者の平均年齢は80.9歳であり、居住地は市街地であるR町が6名でS町が12名であった。生涯未婚の女性はおらず、全員が夫とは死別もしくは離別していた。子どもがいないのは3名(D, F, N)で、現在も働いているのは1名のみ(B)であった。

(2) 近隣とのつきあい・相談相手・娘の居住地

近隣と会う頻度は「毎日」という人も多かった(C, H, I, L, N, V)。しかし、頻繁には会わなかったり、ほとんど会わないという人も少なくなく(K, M, T, U)、市街地よりもむしろ農村部にその傾向が強かった。ここでの農村部では、近隣に親族が住んでいることも多いが、本稿での「近隣」は、非親族の人たちのみを指すこととする。

近隣とのつきあいは、「おすそ分け」をもらったり道端や庭でおしゃべりをする人が

多かった(F, G, H, I, J, K, L, N, O, V)。その相手は同年代の高齢女性に限らず、隣の嫁であることも少なくなかった(G, I, L, O)。Aさんは近隣とカラオケ仲間になっており、お互いに近隣に住んでいるDさんとEさんは一緒に服を買いに出かける中で、近隣というよりも「友人」に近い付き合い方であるといえる。

また、近隣への頼みごとは、予想に反して「頼みごとはしない」という人が多かった。しかし、Bさんのように近隣に「見守り協力員」になってもらっている人もいた。これは、Q市が要援護者の台帳を整備しており、普段から見守りをしている人の氏名や連絡先情報を、市だけでなく市社協・民生委員・警察・消防・自治会等の関係機関で共有するシステムの一環である。足が不自由なFさんは、回覧板を届けてくれた隣の嫁にその場で読んだ回覧板を次の家に回してもらったり、近隣の人に不幸があった際の香典を預けると語っていた。Nさんは、庭先で大きな蜂の巣を見つけた際に近隣の住民に相談して業者を読んでもらったことがあった。Vさんは以前に家で倒れたところを近隣住民が気づいてくれ、病院まで車で送ってもらった経験がある。このように、近隣には頼みごとをしない人が多い反面、それぞれの事情と近隣との仲により、様々な頼みごとをしていることが明らかになった。

次に、「不安」や「悩み」と「相談相手」について聞いた。すると不安や悩みは、「健康面」や「食事面」といった人が多く(D, F, L, V)、「経済面」(F, I, K)や「他界後の財産」(H, T)を挙げた人もいた。また「防犯」(B)や「子どもの将来」(C, H)を挙げた人もいたが、「不安や悩みはない」と答えた人も多くいた(A, E, G, J, M, N, O, U)。

多くの女性が不安や悩みは娘に相談すると答えた(G, H, I, K, L, O, T, U)が、友人に相談する人もいた(A, B, F)。中には相談相手に「近隣」を挙げた人もいたが、お互いを相談相手に挙げたDさんとEさんは、わざわざバスに乗って買物に出かける仲であった。Vさんの相談相手も近隣に住んでいるが、約束をして温泉センターで会い、人には言えない相談をする仲であった。つまり彼女たちの相談相手は、近くに住みつつ、その関係が「友人化」していると考えられる。

さらに「娘の居住地」を尋ねた。すると市内(H, K, L, U)や県内の市外(B, E, I, M, O, T)、県外(A, C, G, J, V)といったように様々であった。これらの状況を表5-1にまとめた。

(3) 近隣と友人との接触・交流に関する比較・検討の結果

近隣と友人とでは、本人との関係に差が見られた。まず「接触・交流の頻度」は、近隣とは多い人で1日に何度も顔を合わせていた。それに対して友人とは、多くても週に数日間といった人がほとんどであった。また、「接触・交流時間の長さ」は、近隣は短く友人は長い傾向にあった。

次に主な接触・交流の形態を比較した。近隣とは、本人の自宅玄関や周辺の道端での立ち話が多いのに対し、友人とは本人や友人宅にあがった会話や電話が多かった。接触・交流の内容は、近隣とは挨拶のみだったり、簡単な会話をしたりおすそ分けをもらったりするが、悩みを相談したりはしていなかった(友人化した近隣はここでは除く)。また、近くに住んでいることもあり、本人を気遣いゴミ捨てをサポートしてくれる人もいた。一方の友人は、長く会話する中で悩みを相談したりもしていた。また、買物やカラオケを一緒に楽しむこともあった。これらの相違点を表5-2にまとめた。

表 5-1 独居高齢女性の近隣とのつきあい・相談相手・娘の居住地

対象者	地域性	親族以外の近隣とのつきあい (①会う頻度②つきあい③頼みごと)	不安の相談相手	娘の居住地
A	市街地	①週2回程度 ②カラオケサークルの仲間 ③しない	友人	県外
B	市街地	①週に3日以上 ②ゴミ捨てや買物の時に会う ③見守りを依頼(市に登録)	友人(一部は娘)	県内市外
C	市街地	①毎日 ②ゴミ捨てをサポートしてもらう ③しない	相談しない	県外
D	市街地	①週に数回 ②電話したり一緒に買物に行く ③しない	(友人化した)近隣	娘なし
E	市街地	①週に数回 ②電話したり一緒に買物に行く ③しない	(友人化した)近隣	県内市外
F	市街地	①週に数回 ②道でおしゃべり ③家電の調整他	友人	娘なし
G	農村部	①週に1日程度 ②隣の嫁からおすそ分け ③回覧板を次に回してもらう。香典預け。	娘	県外
H	農村部	①毎日(朝・晩) ②犬の散歩の時間におしゃべり ③しない(近隣の親戚にする)	娘	市内
I	農村部	①ほぼ毎日 ②隣の嫁からおすそ分け ③しない	娘	県内市外
J	農村部	①週に1日程度 ②おすそ分け・温泉センターでおしゃべり ③しない	相談しない	県外
K	農村部	①不定期 ②道で挨拶程度 ③しない	娘	市内
L	農村部	①毎日 ②隣の嫁と庭先でおしゃべり ③しない	娘	市内
M	農村部	①あまり会わない ②あまりない ③しない	娘	県内市外
N	農村部	①毎日 ②近くの商店や道でおしゃべり ③蜂の巣の撤去	近隣(元民生委員)	娘なし
O	農村部	①週に1日程度 ②土産・野菜のやりとり ③家具の移動・田畑の管理	娘	県内市外
T	農村部	①あまり会わない ②あまりない ③しない	娘	県内市外
U	農村部	①月に数回 ②集会に連れだっていく ③しない	娘	市内
V	農村部	①毎日(不特定) ②散歩時に会う ③緊急時に病院に送迎	(友人化した)近隣	県外

(4) 類型分析の結果

相談相手を「近隣」「友人」「娘」「相談しない」の4類型に分けた上で、娘の居住地が「市内」「県内市外」「県外」と「(娘)なし」に振り分けた。すると、近隣に相談するのは娘がいないケース1件(類型〔4〕)であり、友人に相談するのは、「県内市外」と「県外」と「なし」にそれぞれ2件のケースが該当した(類型〔6〕～〔8〕)。娘に相談する人のうち、娘が「市内」「県内市外」のケースが4件ずつで「県外」が1ケースであった(類型〔9〕～〔11〕)。誰にも相談せず、娘が「県外」の類型に2件のケースが該当していた。

表 5-2 独居高齢者の近隣と友人における接触・交流の相違点

項目	近隣	友人
接触・交流の頻度	多い場合は、1日に複数回	多くても週に数日
接触・交流の時間の長さ	短い	長い
主な接触・交流の形態	本人宅玄関や、自宅周辺での立ち話	本人・友人宅での会話や電話
接触・交流の内容	挨拶や簡単な会話やおすそ分け	長い会話や悩みの相談
その他の接触・交流	ゴミ捨てのサポート	買物の同伴
悩みの相談	相談しない	相談することもあり

次に、対象者の居住地を「市街地」と「農村部」の2類型に分けた上で、「相談相手」によってさらに4類型に分けた。すると、市街地に住んでいて友人に相談する類型は5件(類型〔18〕)で、「相談しない」は1件(類型〔20〕)であった。一方で農村部に住む女性は、「近隣」「友人」に相談するケースと誰にも相談しないケースがそれぞれ1件であった(類型〔21〕,〔22〕,〔24〕)。それに対して「娘」に相談するケースは9件もあった(類型〔23〕)。

これらの結果を表5-3および表5-4にまとめた。なお、友人化した近隣住民が相談相手の場合は「友人」に振り分けている。

表 5-3 独居高齢女性の相談相手と娘の居住地による類型

相談相手	娘の居住地	該当 ケース数	類型 番号
近隣	市内	0	〔1〕
	県内市外	0	〔2〕
	県外	0	〔3〕
	なし	1	〔4〕
友人	市内	0	〔5〕
	県内市外	2	〔6〕
	県外	2	〔7〕
	なし	2	〔8〕
娘	市内	4	〔9〕
	県内市外	4	〔10〕
	県外	1	〔11〕
	なし	0	〔12〕
相談 しない	市内	0	〔13〕
	県内市外	0	〔14〕
	県外	2	〔15〕
	なし	0	〔16〕

表 5-4 独居高齢女性の居住地と相談相手による類型

本人の居住地	相談相手	該当 ケース数	類型 番号
市街地	近隣	0	〔17〕
	友人	5	〔18〕
	娘	0	〔19〕
	相談しない	1	〔20〕
農村部	近隣	1	〔21〕
	友人	1	〔22〕
	娘	9	〔23〕
	相談しない	1	〔24〕

(5) M-GTA 分析の結果

M-GTA 分析では、データをテーマに照らしつつ「分析焦点者」である独居高齢者の視点に立って読み解き、テーマに該当する部分を、文脈を崩さずに「具体例(バリエーショ

ン)」として最終的に合計 14 の「分析ワークシート」に抽出した．その上でそのシートの具体例を説明し得る定義を記述し，それらを概念化した．

具体的には，例えばシート 3 では抽出した「それまでは主人の介抱で．もお，おしりの世話からみんなでしたから大変でした」といった具体例を説明できる定義として「夫との死別などにより，家族介護から解放され，家事の負担も減る」とした．その上でこの定義の概念を「夫による制約の解消」とした．その他のシートの主な具体例・定義・概念は表 5-5 のとおりである．この具体例は，表 5-6 に示している．

次に，そのように生成した概念のまとまりである「カテゴリー」を生成する作業の中で，他の概念と重なっているものは統合した．そしてカテゴリーとしてまとまらないと判断したものは廃止する作業を繰り返し，木下(2007:223-229)のいう「理論的飽和状態」になった時点で，12 の概念と，【本人や状況の変化】【近隣・友人・仲間との関係の変化】【近隣・友人からのサポート】という 3 つのカテゴリーを確定させた．なお，その概念を生成するために抽出された具体例の主なものを表 5-6 のとおりである．

次に，高齢者が独居になることにより近隣・友人との関係が深まっていくことに対して，各概念がどのように関係しているかについて，表 5-6 のそれぞれの具体例を用いて検討していく．

表 5-5 独居高齢女性への近隣・友人サポートに関するカテゴリー・概念・定義・具体例⁷⁾

カテゴリー	概念		定義	主な具体例
本人や状況の変化	概念 3	夫による制約の解消	夫との死別などにより，家族介護から解放され，家事の負担も減る．	③
	概念 4	本人の積極性の向上	夫との死別により介護から解放されたことにより老人会に加入する．	④
	概念 9	夫との離死別	夫との離死別や，同居子の転居による独居生活が始まる．	⑨
	概念 11	体の衰え	老齢により体が衰える．	⑪
近隣・友人・仲間との関係の変化	概念 2	友人との関係の深まり	友人と会う機会が増えることにより信頼が向上する．	②
	概念 5	近隣との関係の深まり	本人が独居であることや，身体的状況を，近隣が心配し，本人と近隣との関係が強まっていく．	⑤
	概念 7	仲間・知人との交流の増加	趣味や活動を始めることで，新たな仲間との交流が増える．	⑦
	概念 8	近隣・仲間と会う場の確保	人に会うために，老人会やいきいきサロンや温泉センター，スーパーに積極的に足を運ぶ．	⑧
近隣・友人からのサポート	概念 1	友人への悩みの相談	親族ではなく，友人に悩みを相談する高齢者も多い．	①
	概念 6	近隣による見守り・おすそ分け	近隣がさり気なく見守ってくれたり，頻繁におすそ分けを届けてくれる．	⑥
	概念 10	近隣による買物・通院・ゴミ捨てのサポート	近隣が，買物や通院，葬式参列時に車に乗せてくれたり，ゴミを持ってくれたりする．	⑩

独居高齢女性は若い頃から独居であるか，同居していた子どもや兄弟の転居や死別という場合もありえる．しかし高齢女性は夫との離死別によって独居となることが少なくない

(具体例⑩参照)といえる。そのことによって深い孤独感を感じる一方で、それまでの家事が軽減されたり、夫の介護から解放されたり、夫が自宅にいて友人が来づらかった状況が解消されるといったように、それまでの家族による制約が解消される(具体例③参照)。

表 5-6 分析ワークシートに抽出した独居高齢女性の語り⁸⁾

具体例 番号	発言者	発言(語り)
具体例①	Bさん	<u>Wさんもちよつと、子どもに言えないこともありますしねえ。(略)わたしも何もかも子どもに言っても心配するでしょ？(略)そういう時は二人でこんな風っていつて話したりしています。</u>
	面接者	<u>ああ、心配されるからってということですね。</u>
	Bさん	<u>はい。</u>
	面接者	<u>やっぱりあるんですね。こどもさんには逆に言いにくいというというのは、そしたら、Wさんとか、ほんとに信頼されて…。</u>
具体例②	Bさん	<u>そうです。</u>
	Fさん	<u>もお、孫には(心配事は)言わないみたいねえ。</u>
	面接者	<u>あ、じゃあXさん？ええ？信頼関係が、すごい…。</u>
具体例③	Fさん	<u>そうです。Xさんとはね。(略)向こうも(心配事を)いろいろ話す(し)ね。</u>
具体例④	Bさん	<u>それまでは主人の介抱で、もお、おしりの世話から、みんなでしたから、大変でした。</u>
具体例⑤	Bさん	<u>だから、少し(家から)出ないといけないと思って、老人会にも入ってですね、主人が亡くなってから入ったんですよ。</u>
具体例⑥	Cさん	<u>Yさん、私がひとりだからかなんか知らないけど、(お隣りが)ゴミとか、まあ、ほとんど毎日っていいくらい(持ってくれて)、朝はねえ。</u>
具体例⑦	Iさん	<u>あの、遅くまで、閉めていたらね、どうかあるんじゃないかと思って、お隣のね、嫁さんが起こしてくれますので。</u>
具体例⑧	面接者	<u>俳句のお仲間…。へえ、いいですね。</u>
	Dさん	<u>だから、行って話すだけでもいいのよ。(略)私はそう思ってね、上手になるよりもね、それで行くの。</u>
	面接者	<u>気持ちの面も体もですねえ。</u>
具体例⑨	Dさん	<u>うん。家にだまっていたってどうしようもないじゃない。</u>
具体例⑩	Aさん	<u>私、スーパーに行ったら結構、友達がいるんですよ(略)。</u>
	面接者	<u>誰かに会われるっていいですよ。</u>
	Aさん	<u>遊んでくるんです(略)ああ、今日はひまねと思って、ぶらっと、今日はどこも行かなかったと思って行ってみたら、スーパーのところにられるんだもん(略)おしゃべりしたりして。そしてもう、買い物して帰ってきて。</u>
具体例⑪	Bさん	<u>だから、昼間はですね、こんなことをしたり、字を書いたり、可愛い箱でも折り紙で折ったりしますけどね。夜がね。(略)夜が、もお、晩御飯食べるときからが、一人で食べるのがですね(略)寂しいです。</u>
具体例⑫	Oさん	<u>いつだったかは、(近所の方が、具合の悪い私を、車で)病院に連れて行ってくれたんですよ。</u>
具体例⑬	Hさん	<u>今まで、なんーでも自分でしてたけど、もう腰が痛かったりなんだったりますんすもんね。</u>

※下線は、概念生成に特に重要な部分。括弧内は筆者が加筆した。

そして孤独感を感じていることや、《夫による制約の解消》⁷⁾により、本人の積極性が向上することがある(具体例④参照)。一方で、本人が独居になったことを心配する近隣と、積極性が増した本人との関係が深まり(具体例⑤参照)、近隣は買物や通院の送迎をしてくれたり、ゴミ捨ての際に代わりにゴミを持ってくれたりするようになる例もある(具体例⑩参照)。また、緩やかな見守りをしてくれたり、おすそ分けを届けてくれたりと、自然な形で本人をサポートしてくれることも少なくない(具体例⑥参照)。

さらに本人は、老齢によって体が衰えてきていること(具体例⑪参照)が、心配する近隣との関係をますます深める要因にもなり得ると考えられる。また、本人が積極的になることで、人と会うためにいきいきサロン・温泉センター・スーパー等に出向くことが増え、近隣や知人と会う機会を自らで保つようになることが期待できる(具体例⑧参照)。一方で、新しい趣味や活動を始めれば、新たに仲間と交流するようになる可能性もある(具体例⑦参照)。

加えて、本人が積極的なために、友人と会ったり電話する機会が増え、友人も独居になった本人が心配なために彼らとの関係が深まり(具体例②参照)、定期的な見守りをしてもらえたり悩みを聞いてもらうようになることも期待できるであろう(具体例①参照)。

このように、独居高齢女性が、近隣・友人・仲間と交流を深めたり、サポートを受ける「要因の連関」を視覚化したものを図5-1に示す。なお、木下(2007:226-229)はM-GTAでは、何らかのプロセスを視覚化しているが、本論では導き出したものが「要因」の関係性であったため、見田(1984:9-41)を参考に「要因連関図」を作成することとした。

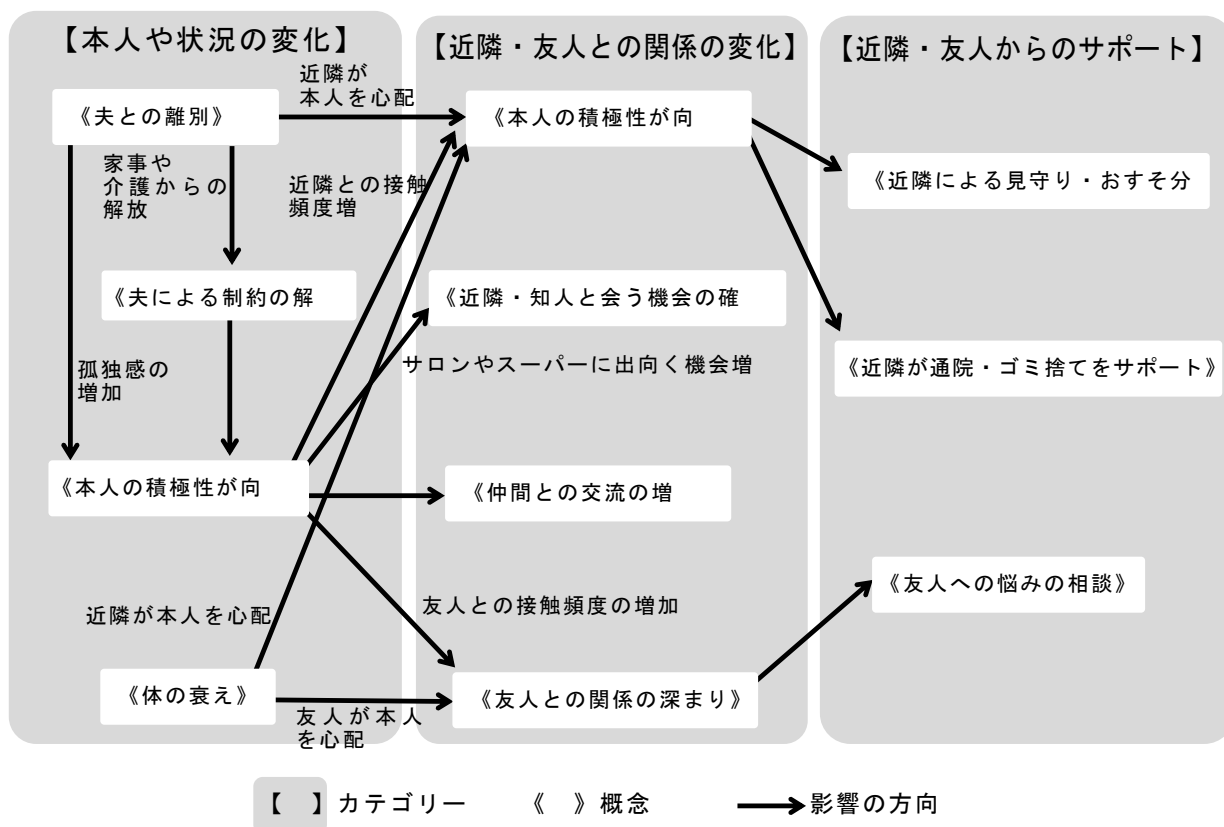


図5-1 独居高齢女性と近隣・友人・仲間との関係が深まる要因の連関

4. 考察

(1) 近隣と友人の相違点と高齢女性とのつながりの特徴

近隣は独居高齢女性の近くに住んでいるため、友人よりも彼女らに接する労力が少ない上に、偶然、道で会うことも多い。そのことが、接触・交流の頻度や形態・内容の違いを生んでいる要因の一つであると考えられる。さらには、近隣は独居高齢女性が自らの意志で選定したのではなく、言わば、偶然そこに住んでいた人や、彼女らの後から近くに越してきた人たちである。しかし、長年、同じ地域で住んでいることでの共通性や、いざという時の頼りがいなども加わり、多くの独居高齢女性にとって欠かせない社会資源となっている。しかし、友人ほどの信頼をおいていることは稀で、お互いに適度な距離を置いた「つきあい」を保っていると考えられる。一方の友人は、性質が大きく異なる。出会いは趣味であったり、仕事であったりと様々であるが、どの友人も独居高齢女性につきあいを迫られた訳ではなく、お互いがお互いを選び、良い関係を築いてきたことで、現在、深い信頼を保っていると考えられる。そのために、子どもを含めて、誰にも言えない悩みであっても友人には打ち明ける。しかしその反面、友人は彼女らの近くに住んでいるとは限らず、おすそ分けやゴミ捨てサポートや緊急時の手助けは当てにはできない。それらは、相手が近くに住んでいないと成り立たないため、近隣に期待すべき面といえる。

(2) 娘への配慮と友人への相談

表 5-3 から、友人に悩みを相談している独居高齢女性は、娘が市内に住んでおらず、娘に相談している女性は、娘が市内か県内市外に住んでいることが多いことが分かった。つまり、彼女たちは娘がいても、近くに住んでいないと、悩みを相談しづらいと考えている。Aさんは「(心配事は)子どもには言わないですね。(略)遠いからね。やっぱ友達かな」と語り、Cさんは、「なんもかんも子どもに言っても心配するでしょ?」と語っていた。手段的サポートを受ける際は、例えば力作業をしてもらう場合、お願いする相手の体力や体調を気遣うのが一般的である。また、忙しい人に何かの作業をお願いする際は、相手の時間的な問題が気になりになるはずである。それらと同じように、彼女たちは、情緒的サポートを受ける前の段階で、そのサポートの提供者である「娘」を思いやり、頻繁に会っている訳ではない自分の悩みやトラブルを娘に伝えたと、娘の心理的負担を増やすばかりで解決には至らない、と判断している。それには、同じ地域に住んでいないために、娘には自分の地域独自の問題は話しても伝わらないといったことや、心の機微は面と向かっていないと話しづらいといった心理が働いていると考えられる。

次に表 5-4 を見ると、市街地に住む人には近隣や娘に相談していた女性はおらず、友人に相談していることが多かった。そして農村部では多くの女性は近隣や友人ではなく、比較的近くに住んでいる娘に相談していた。つまり、彼女らは市街地に住んでいても農村部に住んでいても近隣には相談はしない傾向が見てとれる。その要因としては、市街地の女性は娘が近くに住んでいないため、上述した理由で娘に相談をしないと考えられることができる。そして農村では娘が比較的近距離に嫁いでいるのではないかと考える。加えて農村部の高齢女性は、「以前の勤め先や大学・短大時代の友人」という対象そのものが存在せず、つきあいの範囲が、近隣で完結している可能性がある。

(3) 隣の嫁との交流

近隣では、隣の「嫁」と深く交流しているケースも少なくなく、それは高齢女性の
実の娘が近くに住んでいても、いなくても、変わりがない。その背景には、隣の嫁の、独
居高齢女性に対する、姑との関係のような「煩わしさの無さ」が考えられる。つまり、お
すそ分けを持っていく際に、味つけに文句を言われることはなく、隣の嫁は、相手が素直
に喜んでくれることに、喜びや満足感を感じていると考えられる。

(4) 独居になることによるポジティブな効果

M-GTA を用いた分析結果より、独居になることはネガティブなことばかりではなく、そ
れまでの家事が軽減されたり、夫の介護から解放されたり、夫が自宅にいて友人が
来づらかった状況が解消されるといったような《家族による制約の解消》や、孤独感が逆
に《本人の積極性の向上》に寄与するといった、ポジティブな効果ももたらすことが分か
った。それは、年代的にもそれまで家族や夫の介護を一手に引き受けてきた高齢女性に特
徴的であるとも考えられる。

(5) スーパーの孤立防止機能

A さん他の複数の女性が、「私、スーパーに行ったら結構、友達がいるんですよ(略).」,
「(略)今日はひまねと思って、ぶらっと、今日はどこも行かなかったと思って行ってみた
ら、スーパーのところにおられるんだもん。(略)おしゃべりしたりして。そしてもう、買
い物して帰ってきて。」などと語っている(表 5-6 の具体例⑧参照)。これらの語りから、
いきいきサロンや温泉センターだけでなく、スーパーにも、高齢者が集い、おしゃべりを
してリフレッシュし、閉じこもりの予防となる機能があると考えられる。

第 6 章

独居高齢女性のライフヒストリーとインフォーマルな社会関係

第 6 章 独居高齢女性のライフヒストリーとインフォーマルな社会関係

1. 研究の目的

戦後まもない日本では女性は学校を卒業するとすぐに嫁ぎ、農業の手伝いをしたり専業主婦になるの者が大勢いて、企業で働く女性は「職業婦人」などと呼ばれた。しかし時代の変化とともに、人々の生活や価値観が多様化することで核家族化や個人化が進み、同時に女性の社会進出も進んできた。そのことで、それまでは「お決まり」だった日本女性のライフコースも多様化し、女性たちは自分たちの意思で様々な人生を歩むようになってきた。そのような中、核家族化により親族との社会関係が変化すると同時に、都市化により近隣との社会関係も大きく変化をし、現代女性は個々に多様なライフヒストリーを歩んできたといえる。そのため、現代の高齢女性は人生のその時その時で自分の置かれている環境も異なり、その時その時の社会関係を保持していたと考えられる。

女性の中でも独居高齢女性の多くは、夫との離婚や死別というライフイベントを経験しており、それらの前後で社会的関係に変化があったことが第 5 章で明らかになった。そこでこの章では、調査を依頼した女性の中からさらに 4 名を抽出し、①これまでどのような人生を歩んできたのか、②これまでのライフイベントによって、親族や近隣住民、友人との関係がどのように変化してきたのか、③親族や近隣、友人の重要性についてどのような順位づけをしているのか等を調査し、彼女らの「ライフヒストリー」と「授受サポート」との関連や、「ライフイベントによる近隣・友人とのつながりの変容」を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) 調査対象者

P 県 Q 市の農村部である S 町に居住する独居高齢女性 4 名を調査対象者とした。なお、この 4 名は第 5 章で行った同市における独居高齢女性 18 名へのインタビュー調査の対象者の中から有意に抽出した。その基準は、ライフヒストリーと授受サポートとの関連等を分析するにあたり、地域性・移転・娘の有無・年齢による影響を最小限にするため、「農村地域である現居住自治会の出身で、娘のいる 75 歳以上の女性」とした。

(2) 調査方法

対象者宅において改めて倫理的配慮について説明した後、下記の調査項目を中心にインタビュー調査を行った。1 人の対象者へのインタビュー時間は最短が 40 分で最長が 113 分（2 回の調査時間の合計）であり、4 人の対象者の合計は 4 時間 50 分（1 人あたりの平均は 1 時間 13 分）であった。なお、1 回で十分な調査ができなかった場合は対象者の承諾の上で複数回に分けて調査を行った。音声の記録による客観性の確保のため、対象者の承諾を得て会話を IC レコーダに録音した。なお、サポート源の順位づけについては図 6-2 に示す図を対象者に提示した。その上で対象者のサポート源が 3 段階のどの順位に当てはまるかを質問した。

(3) 調査項目

1) 日々の暮らしと授受サポート

①年齢、②職歴、③出身地、④利用しているサービス（民間サービスを含む）、⑤買い物

の方法，⑥外出の方法や外出先，⑦娘の人数と所在，⑧娘からの主なサポート，⑨娘以外の親族との接触やサポート，⑩非親族との接触やサポート，⑪不安の相談相手，⑫重要なライフイベント前後でのサポート源の変化，などについてインタビュー調査を行った。

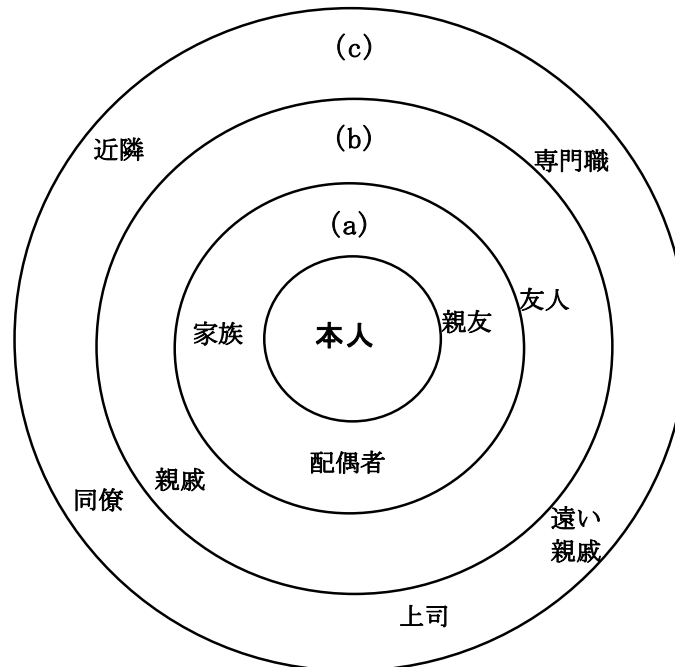
なお，第5章でのインタビュー調査で聞き取り済みの点は，その後は変わりがないかを確認した。

2) ライフヒストリーとライフイベント

生まれたころからこれまでのこと(ライフヒストリー)について①最終学歴の卒業，②就労，③転居，④結婚，⑤出産，⑥子どもの独立・転居，⑦退職，⑧夫との離死別，⑨大病，を中心に語ってもらった。なお，第5章での調査で聞き取り済みの点をインタビュアーが投げかけ，それに補足してもらう形式とした。

3) コンボイ図を用いたサポート源の順位づけ

ここでは重要なライフイベント前後での，親しい他者の順位づけを依頼した。なお，その際は図6-1のコンボイの構成例(古谷野 2003:115)を参考に作成した図6-2を用いた。このコンボイとは，元は「護衛艦」を意味する。人々が他者から守られながら危険に満ちた人生の航路を進むことから，Antonucci(1987)はこれをコンボイモデルとした。本研究ではこれ以降はこの「コンボイ」を「サポート源」に置き換えることとする。なお，コンボイモデルの順位づけは3段階で，内円が自分自身であり，最外円・外円・中間円というように，円の内側に位置するほどに本人にとって重要であるとされている(図6-1参照)。



- (a) 役割に依拠しない安定したコンボイのメンバー
- (b) いくらか役割に依拠し，長期的には変化しやすいコンボイメンバー
- (c) 役割に依拠し，役割の変化に影響されるコンボイのメンバー

図6-1 コンボイ・モデルの構成例(出典 古谷野 2003)

調査で順位づけをしてもらうサポート源はコンボイモデルのもの(図 6-1 参照)よりも細分化し、なおかつ口語体に加工作をした(図 6-2 参照)。また 3 つの順位(レベル)の名称も、高齢者が理解し易いように「とても親しく、いなくてはならない人(中間円)」、「中間円の人ほどではないがいなくてはならない人(外円)」、「外円の人ほどではないがいなくてはならない人(最外円)」とした。ただし、実際の調査では、中間円をピンク色、外円を黄色、最外円を水色にしており、それぞれの円については色を用いて説明・依頼をした。

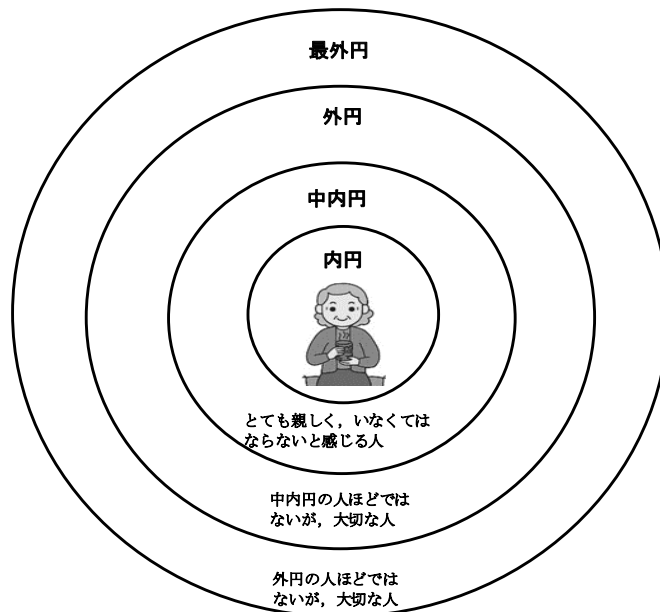


図 6-2 本調査で対象者に提示したコンボイ調査の図
(出典 古谷野 2003 を筆者が加工)

4) 親しい近隣・友人との「つきあい程度」の実態

親しい近隣や友人とのつきあいのうち「おすそ分けをもらう」、「病気の時の世話や見舞」、「冠婚葬祭の手伝い」、「買い物の手伝い」、「日用品の貸し借り」、「送迎・同乗」の 6 つの道具的サポートと、「何でも話しあう」、「困ったときの相談」、「一緒に趣味・娯楽」の 3 つの情緒的サポートについて当てはまるものがあるかを質問した。なおこれらの項目は、独居高齢者のライフヒストリーについてインタビューした畠山(2014:45)や農村女性のパーソナルネットワークについて調査した原(2009:51-53)や西下(1987:45)の調査項目を参考に作成した。当てはまるサポート源がある場合、その相手の性別や年齢、サポートの詳細も併せて質問した。なお、近隣住民については聞き漏らしがないように、インタビュアーと対象者とで対象者の自宅周辺のゼンリン地図を確認しながら質問をした。

5) 道具的サポートと情緒的サポートの比較

日頃から受けているサポートや他者との交流のうち、第 5 章での調査で把握できなかった点を中心に質問をしながら対象者に語ってもらった。その際、親族や親族以外からのサポートに加えてフォーマルなものについても「サポートの有無」と「サポート源」について質問をした。

(4) 倫理的配慮

本調査は第5章で実施した独居高齢女性へのインタビュー調査の追加調査と位置付けた。そのため同調査前に著名を得た「調査協力承諾書」をもって承諾とみなすこととした。また、下記についてインタビューの前に対象者に説明し、これらを遵守することを伝えた。

- ①研究の報告や発表等をする際は対象者のプライバシーを守り、個人が特定できない内容とする。
- ②答えなくない質問には回答しなくてよい。
- ③インタビューは、途中で中止しても構わない。
- ④聞き取りした情報の管理には細心の注意を払い、研究終了後は速やかに破棄する。
- ⑤研究目的以外に、得られた情報を使用しない。

(5) 分析方法

1) 対象者の概要

各対象者からの回答や語りを、年齢、独居年数、職歴、出身地、利用サービス、買い物の方法、外出手段、娘の人数と所在、非親族との接触・授受サポート、不安の相談相手、娘からのサポート、娘以外の親族との接触・授受サポート、サポート源の変容、の13項目に整理した。その上でそれらについて4人のものを比較し、相違点とその要因を検討した(表6-2参照)。

2) ライフストーリーと重要なライフイベント

4名の独居高齢女性の語りから、①子の独立、②退職、③夫との離死別、④独居開始、⑤大病、といった「重要と思われるライフイベントの時期」が何歳の時であったかを比較した。それを踏まえてそれらのイベントが、彼女たちがその当時に受けていたサポートとどのように関連しているかを分析した。

3) コンボイ図を用いたサポート源の順位づけ

まず、4名の女性の現在のサポート源の順位付けについて比較をした。それを踏まえて、それぞれの女性にとって重要と思われるライフイベントの前後での「サポート源の変容」も分析をした。なお、それぞれの女性にとって重要と思われるライフイベントは、HさんとMさんは「夫の他界」とした。Lさんは「娘の結婚による自分自身の独居開始」とし、Vさんは退職とした。夫と離死別する前に子ども全員が独立した場合、高齢女性は夫の他界によって独居生活が始まることが多いと考えられ、Hさんがこれに当てはまる。Lさんは、結婚後、間もなく離婚したため、娘の結婚によって独居生活が始まった。そのため、重要なライフイベントは「娘の結婚」とした。Mさんは、若い時に夫が亡くなり、一人で幼い子を養うことになったため「夫の他界」とした。またVさんは、まだ夫が健在の時に仕事を辞め、それまでの仕事中心の生活から社会関係が一変した。各対象者にとっての重要ライフイベントはこれらのような理由で選定をした。これらを表6-1に整理した。

4) 親しい近隣・友人との「つきあい程度」の実態

対象者4名の親しい近隣や友人とのつきあいについて表に整理し、近隣や友人とのつながりの相違とその要因を分析した。

表 6-1 各対象者にとっての重要ライフイベントの選定理由

対象者	重要と思われる ライフイベント	選定理由
H	夫の他界	夫の他界によって、独居生活が始まったため。
L	娘の結婚	娘の結婚により、独居生活が始まったため。
M	夫の他界	若い時に夫が他界し、1人で幼い子を養うことになったため。
V	退職	夫が健在の時に退職し、それまでの仕事中心の生活から社会関係が一変したため。

5) 道具的サポートと情緒的サポートの比較

それぞれ語りから、①ゴミ捨て、②買物・配食、③送迎、の3つの道具的サポートと、④悩み相談、⑤おしゃべり、⑥情報提供・手続きの代行、の3つの情緒的サポートをどの程度に授受しているかについて、筆者の判断で「0～3」の4段階に評価した。そしてその結果についてレーダーチャートを用いてグラフ化した(図 6-4～7 参照)。なお、サポート源は「親族」、「インフォーマルな非親族」、「フォーマル」の3種類に分けて示した。その上で、このグラフを用いて4人の対象者が受けているサポートの相違とその要因を分析した。

3. 分析結果

(1) 対象者の概要

1) 個人属性

4名の対象者の年齢は70代前半から80代後半であった。独居年数は、最も短いHさんは9年であったのに対して最も長いMさんは31年であった。

また、4名全員に職歴があった。しかしHさんは勤めに出たことがなく、結婚前も結婚後も農業に従事してきた。他の3名は「タイプライター」や「弁当の配布」、「食品会社の工員」などの仕事に就いていた経験があった。元農業従事者であるHさんは隠居後も近隣農家とのつながりが強固であり、最も長く被用者であったVさんは、勤務先で培った社交性や、退職後に顔の広い隣人と親密になることで、近隣や友人ネットワークを形成していた。

4名の対象者の出身を聞いたところ、4名とも現在住んでいる自治会の出身であり、結婚の前後での移動距離が短かった。

利用している介護保険や介護保険外のサービスは、「デイサービス」や「デイケア」、「業者の配食サービス」等であった。買い物はVさんを除く3名は娘に依頼しており、Hさんは娘に加えて孫も食材を買ってきてくれていた。外出は、2名(H, V)が毎日のように散歩に行くのに対して残りの2名(L, M)はほとんど外出していなかった。また、Vさん以外は市内か隣接市に娘が住んでいて買い物などのサポートを娘から受けていた。娘以外の親族からのサポートは、買い物のサポートを受けている女性は2名(H, V)おり、1名(L)は相談やゴミだしといったサポートを受けていた。

2) 非親族との関係

非親族との接触や受けているサポートは、上述の「毎日のように散歩に行く」という 2 名は必然的に近隣と毎日会ってして立ち話しもしていた。また別の女性(L)は、隣の家と洗濯物干場が隣接していることから、隣の嫁とそこでほとんど毎日のように顔を合わせて会話をしていた。

3) 不安の相談相手

不安を相談する相手は、3 名(H, L, M)が「娘を中心とした親族」を挙げた。それに対して 1 名(V)のみが「友人」を挙げた。そして彼女だけが、重要なライフイベントの前後でサポート源(サポートの提供者)に変化が見られた。この女性の場合は在職時には夫も健在だったこともあり、近隣とのつきあいは一部の人のみであったのに、それに対して退職後は、上述のように毎日のように散歩をすることで多くの近隣といつも顔を合わせる生活を送っていた。

これらを整理したものを表 6-2 に示す。

表 6-2 対象者の概要

	H さん	L さん	M さん	V さん
年齢 (独居年数)	80 代前半 (9 年)	70 代後半 (30 年)	80 代後半 (31 年)	70 代後半 (11 年)
職歴	農業	タイプライター他	弁当配布	裁縫 食品会社工員
出身地	同一自治会内	同一自治会内	同一自治会内	同一自治会内
利用サービス	デイケア	配食	デイサービス 医者巡回	無し
買物	娘や孫、野菜は近 所から。	娘	娘	親戚の車
外出	毎日、散歩	しない	しない。	毎日、散歩
娘	2 人は市内、1 人東 京。	市内に 1 人。	隣接市に 1 人。	県外に 1 人。
娘のサポート	買物	買物	買物、ゴミ持ち帰り。	無し
娘以外の親族との接 触やサポート	買物(孫) 毎日会話(親戚)	相談(義妹) ゴミ出し(弟)	無し	買物での同乗(親戚)
非親族との接触・サ ポート	朝晩の散歩で毎日 会話(近隣)	毎日会話(隣の嫁)	無し	毎日の散歩で立ち話し(近 隣)、温泉センターで相談(友 人)、旅行や会食(元同僚)。
不安の相談相手	娘や甥	娘や義妹	娘	友人
サポート源の変化	変化なし	変化なし	変化なし	在職時から変化大

(2) 重要なライフイベントの時期の比較

4 名の独居高齢女性が夫と離死別した時期について比較をした。すると 30 代(L)から 70 代(H)といったように大きな幅があった。詳細を表 6-3 に示す。次に 4 名の女性が独居になった時期を比べた結果、50 代(L)から 80 代(H)まで大きな幅があった。詳細は表 6-4 に示す。また、4 名の独居高齢女性が退職した時期について比較したところ、50 代(M)から 70 代(H)までの幅があった。その詳細を表 6-5 に示す。さらに 3 名の独居高齢女性が夫

病に罹患した時期を比べたところ、60代(V)もしくは70代(L,M)であった。なお1名(H)は大病には罹っていないかった。詳細を表6-6に示す。

表 6-3 独居高齢女性の夫との離死別の時期の比較

	Hさん	Lさん	Vさん	Mさん
30代		離婚・実家へ転居		
		職業訓練校入学		出産
		就職		
	母他界			出産
40代			就職	
			退職・就職	
50代		娘結婚・独居開始	息子転居	夫他界・就職
60代			退職・癌罹患	退職・転居
				父他界・独居開始
		退職		
			夫他界・独居開始	
70代	夫他界・農業終・独居開始		趣味の会入会	
				脳内出血（半身麻痺）

表 6-4 独居高齢女性の独居開始時期の比較

	Hさん	Lさん	Vさん	Mさん
50代		長女結婚・独居開始		
				退職・転居
60代			退職・大病	父他界・独居開始
		退職		
			夫他界・独居開始	
			趣味の会入会	
70代	夫他界・農業終・独居開始			脳内出血
			趣味の会退会	
	娘と同居		肺炎罹患	
			姉妹他界	
			調査現在	
80代	娘転居・独居再開	父母他界・体調悪化		
		調査現在		

表 6-5 独居高齢女性の退職時期の比較

	Hさん	Lさん	Vさん	Mさん
50代		長女結婚・独居開始		
				退職・転居
60代			退職・大病	
				父他界・独居開始
		退職		
			夫他界・独居開始	
70代	農業隠居		趣味の会入会	脳内出血
			趣味の会退会	

表 6-6 独居高齢女性が大病に罹患した時期の比較

	Hさん	Lさん	Vさん	Mさん
60代			退職・大病	
				父他界・独居開始
	退職			
			夫他界・独居開始	
70代	夫他界・農業終・独居開始		趣味の会入会	脳内出血
			趣味の会退会	
	娘と同居		肺炎罹患	
			姉妹他界	
			調査現在	
	父母他界	体調悪化		

(3) コンボイ図を用いたサポート源の順位づけ

Hさんには「夫の他界前」と「現在」のサポート源の順位を聞いた。すると、現在はケアマネジャーと主治医が「最外円の人ほどではないがなくてはならないと感じる人(c)」に加わったが、他のサポート源に順位付けの変化はなかった。結果の詳細を表 6-7 に示す。

Lさんには「娘の結婚前」と「現在」の順位を聞いた。すると娘の結婚前に比べて「仲間」が「外円の人ほどではないが大切な人(b)」に加わった。結果の詳細を表 6-8 に示す。

Mさんにも「夫の他界前」と「現在」の順位を聞いた。すると、孫が「とても親しく、なくてはならないと感じる人(a)」に加わり、「外円の人ほどではないが大切な人(b)」にも甥・甥の妻・医者・ケアマネジャーが加わった。詳しい結果を表 6-9 に示す。

Vさんには「退職前」と「現在」の順位を聞いた。すると、現在は「とても親しくなくてはならないと感じる人(a)」に「その他の親族」や複数の友人が挙がり、さらに「外円の人ほどではないが大切な人(b)」に兄や別の友人が挙がった。結果の詳細を表 6-10 に示す。

(4) 親しい近隣・友人との「つきあい程度」の実態

Hさんには5人の親しい近隣住民がいた。彼女らとはおすそ分けをもらう仲で、その一人とは以前、同じ趣味を楽しんでいた。

Lさんの親しい近隣住民は2人であった。そのうちの1人は最後の勤め先が同じ職場であったために、通勤時に職場まで同乗させてもらうこともあった。また、団体の代表を務めていた女性にも、その団体の会合がある時には自宅まで迎えに来てもらっていた。その女性は、本研究のインタビュー調査中にも、体調を崩していたLさんを気遣って見舞いに見えた。しかし、以前は老人会や趣味の会で仲間だった人たちとは、調査時点では交流がなくなっていた。

Mさんは自宅に隣接している近隣住民が2軒とも親戚であった。その他の近隣住民とは会っても挨拶をする程度の関係であった。

Vさんのみが何でも話せる友人がいた。その友人以外にも急病の際には病院まで送ってくれたり、Vさんの自宅まで来て世話をしてくれる近隣住民もいた。これらを表6-11にまとめた。

表 6-7 Hさんのサポート源の変容

大分類	中分類	小分類	(c)	(b)	(a)
親族	夫	夫			●
	子	長男			●○
		長女			●○
		次女			●○
		三女			●○
	兄弟	兄弟		●○	
		義妹	●○		
	孫	孫			●○
		孫			●○
	甥姪	おい			●○
その他親族				●○	
				●○	
			●○		
				●○	
非親族	近隣			●○	
	近隣		●○		
	近隣		●○		
フォーマル	専門職	ケアマネジャー	○		
		主治医	○		

●: 夫の他界前のサポート源

○: 現在のサポート源

関係 →
弱 強

- (a) とても親しくいなくてはならないと感じる人
(b) 外円の人ほどではないが大切な人
(c) 最外円の人ほどではないがいなくてはならないと感じる人

表 6-8 Lさんのサポート源の変容

大分類	中分類	小分類	(c)	(b)	(a)
親族	親	父			●
		母			●
	夫	夫			
	子とその配偶者	長女			●○
		長女の夫			
	兄弟	弟			●○
		弟			●○
		弟			●○
		妹			●○
		妹			●○
		義妹			●○
		義妹			●○
		義妹			●○
		義弟		●○	
	その他の親族				
非親族	近所	近所	●○		
	仲間			○	

●: 娘の結婚前のサポート源

○: 現在のサポート源

関係 →
弱 強

- (a) とても親しくいなくてはならないと感じる人
(b) 外円の人ほどではないが大切な人
(c) 最外円の人ほどではないがいなくてはならないと感じる人

表 6-9 Mさんのサポート源の変容

大分類	中分類	小分類	(c)	(b)	(a)
親族	親	父			●
		母			●
		義母		●	
		義父		●	
	夫	夫			●
	子	長男			●○
		長女			●○
		次男			●○
	兄弟	妹			●○
		義姉	●		
	孫	孫		○	
		孫			○
	甥姪	甥		○	
		甥の妻		○	
その他親族		いとこの子	○		
		いとこの子の妻	○		
非親族	近隣	その他の近所	●○		
	その他	同僚	●		
フォーマル	フォーマルサポート	医者		○	
		ケアマネジャー		○	

●: 夫の他界前のサポート源

○: 現在のサポート源

関係 →
弱 強

- (a) とても親しくいなくてはならないと感じる人
(b) 外円の人ほどではないが大切な人
(c) 最外円の人ほどではないがいなくてはならないと感じる人

表 6-10 Vさんのサポート源の変容

大分類	中分類	小分類	(c)	(b)	(a)
親族	親	母			●
	夫	夫			●
	子	長男			●○
		長女			●○
	兄弟	姉			●○
		兄		○	
	甥姪				
非親族	その他の親族				○
	友人			○	
	友人		○		
	友人				○
	近隣				●
フォーマル	フォーマルサポート	(元)同僚		●○	

●: 退職前のサポート源

○: 現在のサポート源

関係 →
弱 強

- (a) とても親しくいなくてはならないと感じる人
(b) 外円の人ほどではないが大切な人
(c) 最外円の人ほどではないがいなくてはならないと感じる人

表 6-11 独居高齢女性の近隣・友人とのつきあいの実態

対象者	近隣・友人	情緒的サポート			道具的サポート					
		何でも話しあう	困った時の相談	一緒に趣味・娯楽	おすそ分けをもちう	病気の時の世話や見舞い	冠婚葬祭の手伝い	買物の手伝い	日用品の貸し借り	送迎・同乗
Hさん	近隣				○					
	近隣			▲	○					
	近隣				○					
	近隣				○					
	近隣				○					
Lさん	近隣									▲
	近隣				○					
	友人(団体の代表)			▲	○	○				▲
	友人(趣味の仲間)			▲						
	友人(老人会の仲間)			▲						
Mさん										
Vさん	友人	○	○							
	近隣					○				
	近隣			○						

○:現在, サポート授受

▲:以前にサポート授受

(5) 道具的サポートと情緒的サポートの比較

Hさんは「買い物」や「送迎」といった道具サポートに加えて、「悩みの相談」や「おしゃべりの相手」、「情報を得たり手続きの代行」といった情緒的サポートも市内に住む娘や孫に頼っていた。また、たまに買い物を頼んだり法事に同乗させてくれる親しい近隣住民もいた。その上、ペットの散歩で毎日のように外出し、多くの近隣住民と立ち話もしていた。一方でフォーマルなサポートは、ケアマネジャーから介護保険サービスの情報を聞くといった程度で、他のサービスは利用していなかった。

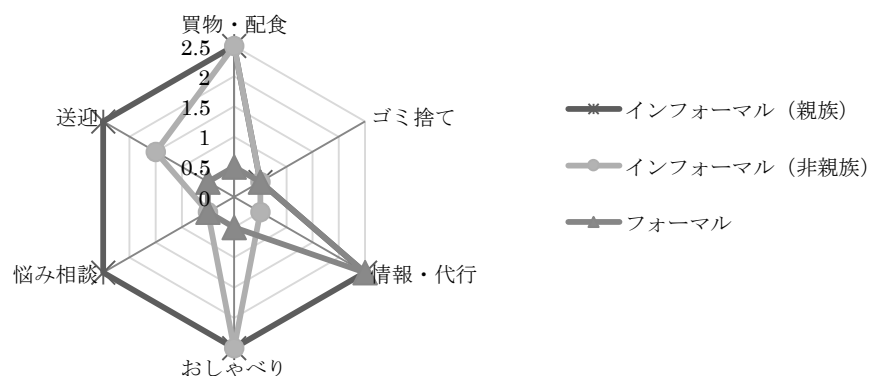


図 6-4 Hさんの授受サポート

Lさんは「買物」や「送迎」、「ゴミ捨て」といった道具的サポートに加えて、「悩みの相談」や「おしゃべり相手」、「サービスの情報の入手や手続きの代行」といった情緒的サポートをは、すべて弟や義妹たちに頼っていた。親族以外のインフォーマルなサポートは「おしゃべりの相手」のみであった。一方で利用しているフォーマルなサポートは、毎日の配食サービスだけであった。

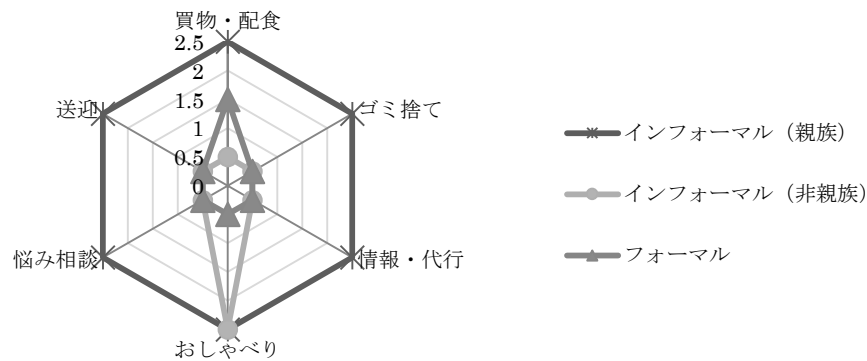


図 6-5 Lさんの授受サポート

MさんもLさんと同じく「買物」や「送迎」、「ゴミ捨て」といった道具的サポートに加えて、「悩みの相談」や「おしゃべり相手」、「サービスの情報の入手や手続きの代行」といった情緒的サポートはすべてを、隣の市に住む娘に頼っていた。しかしLさんとは異なり、非親族からのサポートは何も受けていなかった。またフォーマルなサポートとして、タクシーを利用したり、乳製品の配達員とおしゃべりをしたり、ケアマネジャーから介護サービスなどの情報を得たりしていた。

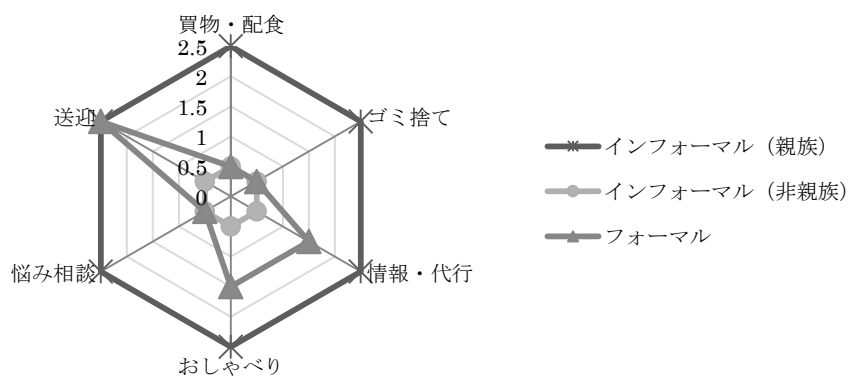


図 6-6 Mさんの授受サポート

Vさんは、買物の際に親戚に同乗させてもらっていることを除いて、4人のうちでただ一人だけ親族からのサポートを受けていなかった。その反面、非親族からの情緒的サポートを最も顕著に受けていた。それは、悩みを相談したり、毎日の散歩を兼ねて畑仕事をし

ている近隣住民に自ら声をかけておしゃべりをしたり、時には畑仕事を手伝うことなどである。このように、散歩をしたり畑仕事を手伝うのは近隣住民とおしゃべりをするために行っている。また、まだ彼女は足が健康であり、フォーマルなサービスは何も利用していなかった。

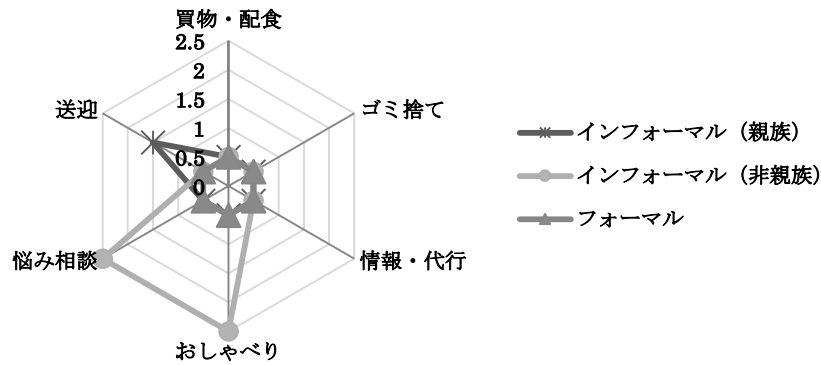


図 6-7 Vさんの授受サポート

4. 考察

(1) 順位付けの要因と変容

現在のサポート源の順位付けは、「接触の頻度」ではなく、自分自身が「情緒的に相手に頼っている」か、もしくは「相手を可愛がっているか」が大きく影響していると考えられる。後者の典型例は子どもの場合である。例えばVさんの子どもは県外に住んでおり、連絡をとり合う頻度は少ないが、2人の子どもを「とても親しくいなくてはならないと感じる人(a)」に順位づけしていた。第1章で述べたように野口(1991)は、ソーシャルサポートの操作的定義として、サポートの援助行動の経過について、「予期（あるサポートをしてくれそうか）」、「実績（実際にしてもらったのか）」「評価（それをどう思っているのか）」の3つの次元を分けて捉えている。ここでの調査結果をこの野口の定義に当てはめてみると、彼女は子どもからのサポートを予期していないし、サポートを受けた実績も乏しいが、子ども（たち）を愛しい相手だと「評価」しており、その相手こそが「とても親しくいなくてはならないと感じる人」だと言い替えることができると考える。

また、すでに重要なサポート源を保持していれば、退職や夫との離死別、独居生活の開始といった重要なライフイベントを経験しても、サポート源の順位づけはほとんど変容しないことも分かった。さらに、Vさんのように、在職当時に重要なサポート源であった親代わりの女性と死別したとしても、親族や友人の中から、その女性に代わるサポート源(代替サポート源)を確保していたことも明らかになった。

(2) Vさんの社会関係を規定してきた要因

「とても親しくいなくてはならないと感じる人(a)」にインフォーマルな非親族を含んでいたのはVさんのみであった(表 6-10)。このうちの1名は、彼女の悩みを聞いてくれる友人である。彼女は重要なライフイベントである「退職」の前も、「とても親しくいなくてはならないと感じる人」に近隣の女性を挙げ、この女性のことを親代わりだったと語って

いた。仕事に明け暮れ、現役時代は他の住民とはつきあいはあまり無かったが、この親代わりの女性は、娘のようにVさんを可愛がってくれ、その女性が経営していた小店の店頭にも立つようになった。すると、小店に来る近隣の人々と自然に顔を合わせるようになり、このことは退職後の社会関係の広がりにも強く影響したはずである。

また、幼少時代は無口だったVさんは、仕事の休憩中の同僚とおしゃべりを通して、他者とのコミュニケーションが欠かせないものになっていった。本調査の対象女性4人のうち、全ての子どもが県外に住んでいるのは彼女のみであり、このことも「他者とのコミュニケーション欲求」を高めた要因の1つと考えられる。

また、現在の彼女の他者とのコミュニケーションの中心は、毎日の散歩と「温泉施設」である。この毎日の散歩には、健康な足腰が不可欠である。これはHさんにも共通しており、この毎日の散歩は足腰を鍛えると同時に、近隣住民とおしゃべりをする中で、「ゆるやかで心地の良い情緒的サポート」を、複数の人々から得ていると考えられる。そして、同時にVさんやHさんも同様のサポートを近隣住民に提供しているといえる。浦(1992:120-121)も、ストレスに苦しむ人自身が自らストレスに対応できることが情緒的サポート固有の機能であり、それは日常の何気ない「つきあい」の中から生まれるとしている。

(3)できない行為の増加と自信の喪失

高齢になると身体的に衰えることで、それまでできていたのにできなくなる行動が増えたり、行動範囲そのものが狭くなるために、ますます消極的になり、そのことによって外出が減ったり、それまであった他者との交流が途絶えてしまうことがある。Mさんは、少し寂しげに次のように語っていた。

なんーでも今までしてきたからですねえ。できるんですけど、きついですもんね。

(中略)(外で)食べるのはですね、私が連れて行ってたの。そこのほら、庄屋っていうところに。(中略)もうけど、私の足の弱くなったから、もう(娘たちも)自分たちだけでいくもの。

この例は外食についての語りだが、それはゴミ出しであっても買物であっても同様ではないかと考える。このようにこれまでできていたことが難しくなった場合は、他者が代わりにすることも選択肢の一つであろうが、それよりも高齢者本人が継続できることがより望ましいといえよう。

①ゴミステーションの容易な開閉とワンコインサービスの普及

本研究の調査地域であるQ市のごみステーションは、鉄の思い蓋を自力で上げられない場合、ゴミを中に入れられないものが多く、力が弱まったり、背骨が曲がって前かがみの姿勢の高齢者には、ゴミ出しの作業が大きな課題となっていることも明らかになった。ゴミステーションの開閉が容易になれば、高齢者自身でゴミ出しが継続できる事例もあると考えられる。

しかし、ゴミそのものをステーションにまで運べなくなることもあり得る。そのように重い荷物をかかえたり、細かな作業を必要とする「家事」など、独居高齢者らが不便に感

じている点をサポートするために、熊本県八千代市のシルバー人材センターが、1 時間に 500 円程度の代金で、ゴミ出しや布団干し、墓の掃除といった作業が依頼できる「ワンコインサービス」事業を始めた。この事業は現在では、全国的に同様にサービスが広まりつつある。

②集配トラックへの有料乗車やタクシーによる買い物代行

買物難民の問題はすでに全国的な問題となっている。特に地方では、利用者の減少に伴い、バスや電車といった公共機関の、廃線や運行頻度の減少が各地で進んでおり、「買物難民」の増加が問題となっている。農林水産政策研究所(2014)が公表した推計によると、スーパーなど生鮮食料品店が自宅から 500m 以上離れている上に、車を持たない「買物難民」は全国で約 910 万人にものぼる。これを受けて、各自治体は、独自で、買物弱者を支援する助成制度などを進めており、売り手による配達等も広まりつつある。しかし、高齢者の身体的・精神的健康面からみると、本人が店舗に足を運ぶことが最も望ましいはずである。それは、外出が増えることで、運動に加えて、近隣と会って世間話しをする機会も増えるためである。そのためには、荷物の集配トラックが有料で助手席に客を乗せられる仕組みや、タクシーによる買い物代行が広まることの方がより望ましいといえる。

終章

高齢者を取り巻く悪循環の打開策

終章 高齢者を取り巻く悪循環の打開策

1. 近隣によるサポート

(1) 近隣によるゆるやかな情緒的サポートと交流の場

第1章で述べたように、浦(1996:58-61)はソーシャルサポートが道具的サポートと情緒的サポートに大きく2分類できるとしている。そしてその情緒的サポートを、「ストレスに苦しむ人の傷ついた自尊心や情緒に働きかけてその傷を癒し、自ら積極的に問題解決に当たれるような状態に戻すような働きかけ」と定義している。また、第1章でもふれたように、ソーシャルサポートは大きく2つの分野で研究されてきた。そのうちの1つは主に「精神衛生学・公衆衛生学・心理学」の分野であり、ストレスフルなライフイベントから心身の疾患に至るプロセスにおける影響に関する研究などが見られる。この分野ではソーシャルサポートはストレス緩衝効果があることが定説とされ、他者からのソーシャルサポートは、心身機能低下に対する不安や孤独感や配偶者との死別後の悲嘆を緩和し、精神的健康やQOLを良好な状態に導くとされている。

このような先行研究がある中、本研究では第1章において、ソーシャルサポートの包括的定義を「社会関係の中で、日常的な何気ない交流や、情緒的一体感も含め、他者から受けたり、他者に与える、道具的もしくは情緒的な支援の総称」とし、「情緒的サポート」に「おしゃべり」のような交流も含めて考えてきた。それは大森(2005:303-312)が気遣い合いの日常交流(いわば「ゆるやかな情緒的サポート」)を「高齢者が自分の居場所を見出し、今日を生きる意欲を得ることで、人生の質を高める手段」と捉えているように、本研究でも、普段の何気ない交流によって独居高齢者が自分の居場所を見出し、それによって日々の生きる意欲を支えられていると考えるためである。

第5章での調査では、この「ゆるやかな情緒的サポート」が「近隣」から独居高齢女性に日常的に提供されていることが明らかになった。そしてそのように近隣から日常的に「ゆるやかな情緒的サポート」を得るには、「健康な足腰」が不可欠であると考えられた。それは近隣が独居高齢女性宅に上がり込むことは稀なため、独居高齢女性は足腰が弱って外出が減ると、近隣との交流が激減してしまう恐れがあるためである。

また、商店などにフリースペースがあれば、彼女らは近隣と話すためにわざわざ買い物に出かけており、そのようなスペースが、独居高齢女性が外出する動機づけになっている場合も見受けられた。つまり、このようなスペースは、彼女らの外出機会を増やすことに直結し、運動量も増やすと同時に、近隣との「ゆるやかな情緒的サポート」のやりとりの場にもなり得るといえる。スーパーや商店のように我々の生活に欠かせず、全国のどの地域にも身近にある商業施設において、「高齢者が買物のついでに無料で他者と交流ができる憩いの場」が設けられていることは、必然的に買物に出かけることの多い独居高齢女性の孤立防止に対しての効果が期待できるといえよう。

(2) 近隣サポートの向き・不向き

厚労省が報告した『地域における「新たな支えあいを求めて」』報告書によれば、地域における最も身近な関係は「近隣」であり、日常的な近所づきあいの中で、近隣が話し相手になる場合も多いとしている。また、少子高齢化の中で世帯の少人数化や家族機能のさらなる低下が進み、住民が地域の交流や支え合いに期待するところは大きいとも述べている。

しかし一方で同報告書では、地域福祉で取り組む課題には、自力では問題解決に向かえない状態にある人の問題など、そもそも地域であっても見えにくいものも多いとも述べている。これらのことから「地域における支え合い」という聞き心地のよいキャッチフレーズが一人歩きしているように思われる。本研究ではこれまでの調査知見から、近隣住民を中心とした「地域」で独居高齢者のような「社会的弱者」を情緒的に支えるのは、特に農村部においては不向きではないかという結論に達した。それはその地域の住民同士のネットワークが密接であるほど、自分の悩みを近隣に相談することを躊躇するためである。

鱸(1998:40-41)は「恥と意地」について、「ドーナツ現象」のように、親密な人たちと見知らぬ人たちとの中間に属する人たちに対して羞恥が発生するとしている。この理論を用いれば、親族や親しい友人、訪問介護員のような見知らぬ他者には悩みを話す、その中間に属する「近隣」には「恥」を抱いているために本音を明かさない可能性がある。さらにその背景にある彼女らの意識に、日本人特有の消極性も関わっているのではないかと考えた。この消極性については本章 4.「消極性」と「罪と恥の意識」において詳しく述べてい。

2. 友人や娘によるサポート

(1) 深い情緒的サポート

本研究では近隣には期待できない場合の「深い情緒的サポート」について把握できた。すなわち、多くの独居高齢女性は娘を中心とした「家族」をサポート源としているが、娘が近くに住んでいない女性は友人に悩みを相談している点である。その背景には、近隣はいわば「偶然」に近くに住んでいる存在なのに対して、友人は「本人とお互いに選考し合い、長い年月をかけて築きあげてきた信頼のできる存在なのではないかと考えられた。また彼女らは、夫が健在であった時はお互いの夫に気兼ねして自宅への訪問を躊躇していたが、「独居になる」という、一見、ネガティブなライフイベントの影響により、逆にお互いの訪問機会が増える可能性もあるという点も見出した。

第 5 章では友人に悩みを相談している独居高齢女性は娘が市内に住んでおらず、娘に相談している女性は娘が市内か県内市外に住んでいることが多いことが明らかになった。つまり、彼女たちはもしも娘がいても、近くに住んでいないと悩みは相談がしづらいと考えている可能性がある。それは、彼女たちは情緒的サポートを受ける前の段階で、そのサポートの提供者である「娘」を思いやり、頻繁に会っている訳ではない自分の悩みやトラブルを娘に伝えと、娘の心理的負担を増やすばかりで解決には至らないと判断しているためではないかと解釈された。それには、同じ地域に住んでいないために、娘には自分の地域独自の問題は話しても伝わらないといったことや、心の機微は面と向かっていないと話しづらいといった心理も働いているという理解を深めた。そして、そのように感じている女性たちは、相談相手に近隣ではなく友人を選んでおり、特に市街地にその傾向が強かった(第 5 章表 5-3 参照)。これは、ひとつには農村部の高齢女性は、「以前の勤め先や大学・短大時代の友人」という対象そのものが少なく、つきあいの範囲が近隣で完結していることが多いためではないかと考えられた。

また第 6 章では、独居高齢女性の現在のサポート源の順位付けは「接触の頻度」ではなく、自分自身が「情緒的に相手に頼っている」か、もしくは「相手を可愛がっているか」

が大きく影響しているのではないかと考えた。Vさんのように、県外に住んでおりいて連絡をとり合う頻度は少ない子どもに対して、「とても親しくいなくてはならない」と感じる女性もいた。

第1章で述べたように野口(1991)は、ソーシャルサポートの操作的定義として、サポートの援助行動の経過について、「予期（あるサポートをしてくれそうか）」、「実績（実際にしてもらったのか）」「評価（それをどう思っているのか）」の3つの次元を分けて捉えている。この野口の論考を彼女に当てはめてみると、彼女は子どもからのサポートを予期しておらず、サポートを受けた実績も乏しいが、子ども（たち）を愛しい相手だと「評価」しており、その相手こそが「とても親しくいなくてはならないと感じる人」だと捉えていると考えられた。

先行研究では、過疎地域で民生委員や母子保健推進員に調査をした松下ら(2010:51)は、「要介護高齢者が独居生活を継続できる要因として、似た境遇にある長年の親友が、精神的安らぎを与える存在となっていた。」としている。また、鹿児島県B町の全高齢者を調査した小窪ら(1998:1-20)は、孤独感と最も関係が強いのは友人関係で、次が相談相手、近隣関係となり、家族関係が最も弱いとしている。さらに、全国の60歳以上男女を調査した野口(1991:89-105)は、モラルと独居高年者の友人数にとくに強い関連があるとしている。これらの知見は、本研究の結論の信頼性につながるものといえよう。

(2) 温泉施設での深い情緒的サポートの授受

高齢者は温泉施設で深い情緒的なサポートを授受し合うことがあることも、独居高齢女性の語りから明らかになった。いきいきサロンでは狭いスペースに多くの参加者が集まっていることから、人には聞かれたくない深刻な悩みは話づらく、商店などのフリースペースでは、簡単な世間話はできてサロンと同様に深刻な話しには向いていない可能性がある。これらのことから、自分と話しを聞いてくれる相手とだけで、ゆったりと話しができる場の1つとして「温泉施設」は適していると結論付けた。

しかし、調査に協力してくれた高齢女性らが利用していたS町の温泉施設は、経営難のために閉鎖に追い込まれた。このことから、行政は温泉施設を単なる娯楽施設としてだけでなく、独居高齢者の孤立防止機能を備えた施設として捉える必要があるのではないかと考えられる。

岡(2013)は、徳島県の海部町の自殺率の低さに目をつけ、町に入りこんでインタビュー調査を行い、その要因を明らかにした。岡によれば、海部町には「行けば必ず誰かに愚痴が聞いてもらえるようなサロン機能を有するような小コミュニティ」が数多く存在しているという。それは商店や診療所、役場などであり、地理的にコンパクトにまとまっている海部町では、だれもが徒歩や自転車でそれらの小コミュニティにアクセスができる環境にあるというのである。これは、地域の特質や場・空間の設定次第でコミュニティが変化をする好例といえ、その地域その地域の特質に合わせて施設が配置されていくことには大きな意義があると考えられる。

3. 近隣サポートと友人サポートの関連性

(1) 近隣と友人の相違点と「サポートミックス」

第5章では、近隣は独居高齢女性の近くに住んでいるため、友人よりも彼女らに接する労力が少ない上に、偶然、道で会うことも多いことが、接触・交流の頻度や形態・内容の

違いを生んでいる要因の一つであると提起した。さらには、「近隣」は独居高齢女性が自らの意志で選定したのではなく、偶然そこに住んでいた人や、彼女らの後から近くに越してきた人たちであると考えられる。そのために友人ほどの信頼をおいていることは稀で、お互いに「適度な距離を置いたつきあい」を保っていると述べた。一方の「友人」は、性質が大きく異なる。出会いは趣味であったり、仕事であったりと様々であるが、どの友人も独居高齢女性につきあいを迫られた訳ではなく、お互いがお互いを選び、良い関係を築いてきたことで、現在、深い信頼を保っていると考えられる。そのために、子どもを含めて、誰にも言えない悩みであっても友人には打ち明けているという語りがあった。しかしその反面、友人は彼女らの近くに住んでいるとは限らず、日常的なゆるやかなサポートを期待すべき相手は、本人と会う機会が比較的多い「近隣」ではないかと論を展開した。

浦(1992:120-121)は、「ストレスに苦しむ人自身が自らストレスに対処できることが情緒的サポートに固有の機能」であり、それは「日常の何気ないつきあいの中から生まれてくるもの」だとしている。そして、「その何気なさゆえに、サポートの受け手は、自分が他者からサポートされている意識を持たずにすむ」とも述べている。この何気なさこそが、専門職にはない、近隣や友人といったインフォーマルな社会資源の最も大きな特徴であり、長所の一つであると理解を深めた。

配偶者や子どもと同居していない高齢者のうち、男性に比べて、人々との結びつき志向が高いとされる「女性」は、普段から上記のような交流やサポートをしてもらえる「近隣」と、悩みを打ち明けられる「友人」との、両方のつながりを個々に適した形で「ミックス」させて保持していると考えられる。本研究ではこのことを「サポートミックス」と呼ぶこととした。このようなサポート授受の柔軟性を第5章や6章では具体的に把握することができたが、その多様性は総合的に今後一層検討されることが適切な支援につながると考えられた。そのためにはインフォーマルなサポートをひとくくりにせず、それぞれの特性をより詳しく調べたうえで、長所と短所を踏まえて組み合わせていくことが重要になるといえよう。それは、上野谷のいうフォーマルサポートとインフォーマルサポートの組み合わせに加え、インフォーマルな社会資源の中でも近隣や友人、仲間などをうまく組み合わせることであり、序章でふれたように井村が述べている「ニーズに合わせた多様な社会資源の結び付け」にあたるものである。

(2) 近隣の友人化

多くの調査研究と同様に、本研究でも調査段階では「近隣」と「友人」を別のカテゴリとして扱い、生活に即した詳細な分析を行い、その2つの社会資源を適切にミックスさせることの必要性を述べた。しかし過疎地域（静岡県佐久間町・水窪町・龍山村）に住む独居高齢者を調査した渡瀬(1998:33-42)は、「近隣の中で、独居高齢者は複数の人々と関わり、長年のネットワークによって培われてきた関係が、友人あるいは相談者といった緊密な関係を形成してきた」としている。ここでの「高齢者の近隣に住む人が時間の経過により『友人』という関係に変化する」という点は興味深い。

本研究の対象者をみても、Dさん・Eさん・Vさんのように、近隣に住む住民の中でも特に信頼している相手は「近くに住む友人」に変容し、悩みも相談ができる存在となっていた。そこで、友人のように信頼できる存在になった近隣を、本研究では「友人化した近隣」

と定義することとする。

この「近隣」と「友人」，「友人化した近隣」の3者の関係を図終-1に示した。

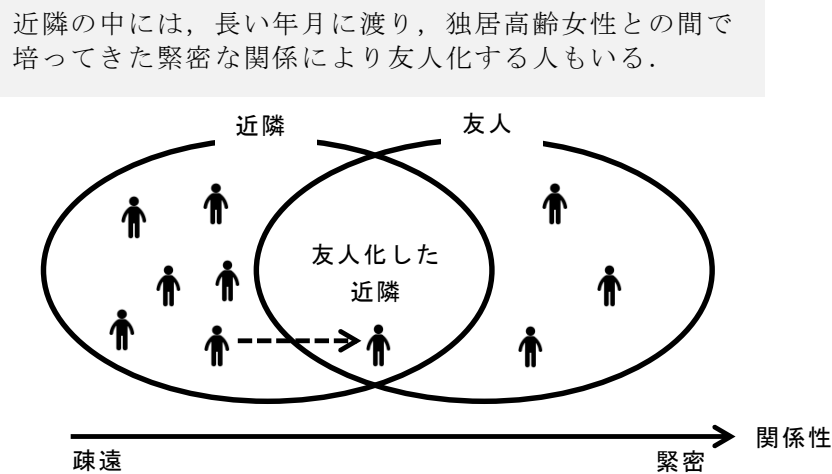


図 終-1 「近隣」・「友人」・「友人化した近隣」の関係のイメージ

4. 「消極性」と「罪と恥の意識」

(1) 罪と恥の意識

第4章では「自助」と関連が深い我々日本人の「消極性」について述べた。ベネディクトが「菊と刀」において、日本人の文化を「恥の文化」として以降、多くの研究者がそれについて指摘をしてきた。そのうちの1つに井上(1986:127-142)の「世間体の構造」がある。その中で井上は、行為主体の自我理想にもとづく比較機能によって、主体が彼自身をその所属集団の内部における劣位者として認知し、他者のまなざしを介して所属集団から孤立している自己を見出したときに覚える恥を、「私恥」と区別して「公恥」としている。そして主体の超自我にもとづく規範的機能によって、自己が所属集団からの逸脱者として認知されたときに覚える罪の意識を「個別的罪」と定義している。そのうえで、ともに所属集団からの孤立を基底としている点から、この「公恥」と「個別的罪」は構造上かなり類似していると結論づけている。

上記の井上の論考を用いるなら、独居高齢者は、サポートを活用することで「何もかも自力で済ませてきたそれまでの自分」から逸脱してしまうことを恐れている可能性がある。その逸脱による「罪の意識」や、「サポートを利用している自分を冷ややかにみつめる他者のまなざし」による「恥の意識」が高齢者に働いているのではないかと考えた。私たち日本人が他者に親切にされた際、「ありがとう」というよりも、本来は謝罪の意味である「すみません」という言葉を用いてしまうのはこの井上の指摘と無関係ではないだろう。この点は、土居(2001:36-40)も『「甘え」の構造』において同様の指摘をしている。これらのことから、ソーシャルサポートが円滑に提供・授受されていくためには、むやみに積極性を促すよりもむしろ、高齢者に働いている可能性のある「罪や恥の意識」を、意図的にとり除いていく必要があるのではないかという結論に至った。

(2) 罪や恥の意識から起きる悪循環

上述したように私たちは、「恥の文化」からくる「罪や恥の意識」から逃れられることができずにいるといえる。その上、高齢になると身体的に衰えることで、それまでできていたのにできなくなる行動が増えたり、行動範囲そのものが狭くなるために、ますます消極的になる場合がある。そしてそのことによって外出が減ったり、それまであった他者との交流が途絶えてしまうことがあるため、さらに身体的な衰えにつながる悪循環に陥る危険が高まるのではないかと考えた。また、消極性や体の衰えは第4章で導き出した悪循環を引き起こす恐れもある。これらの関係を一体にしたものを図終-2に示す。

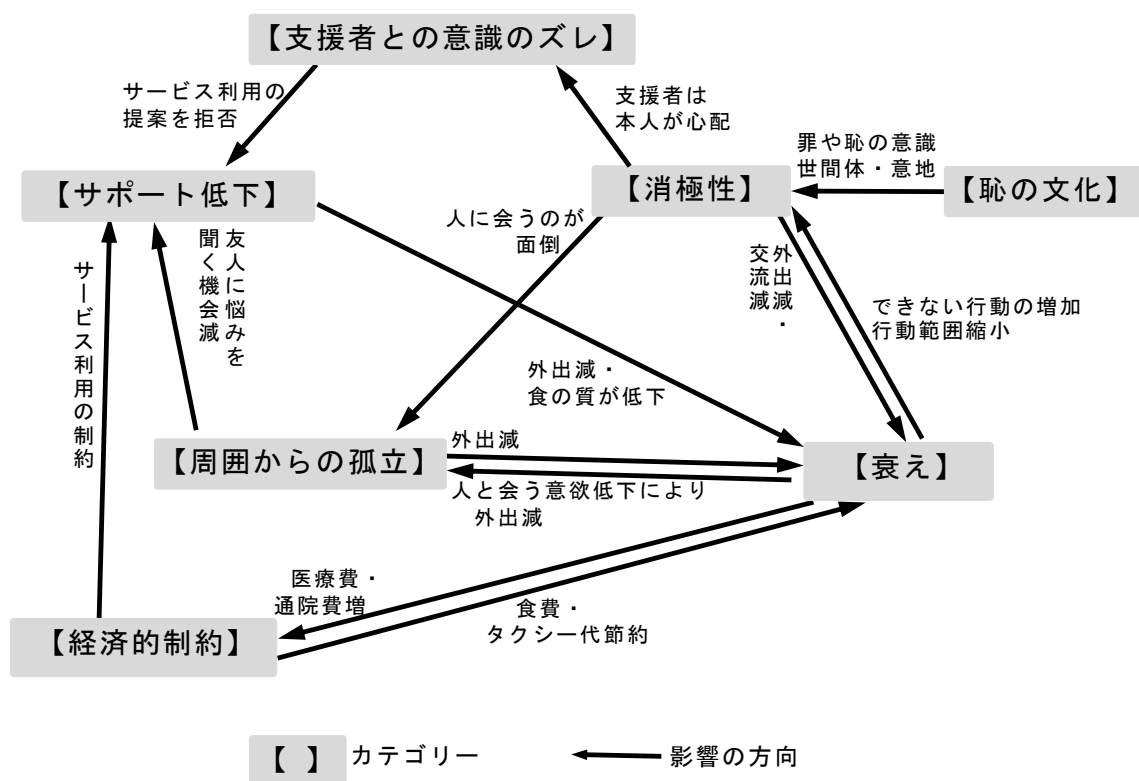


図 終-2 高齢者の精神面と身体面の悪循環

高齢者を上記のような悪循環に陥らせないためには、「年をとれば誰もが様々なフォーマル・インフォーマルのサポートを活用している」ということを、専門職や親族が繰り返し本人に伝えることで、彼らの「罪や恥の意識」を意図的に取り除いていくことも、改善策の一つではないかと考えられた。

さらに、「周りからのサポートを活用せずに自力で踏ん張る姿勢」を、「我慢強い」と評価するのではなく、これからは独居高齢者を取り巻く周囲の人々全体で、「お互いに気軽にサポートを授受・提供し合う『相互扶助』の意識を共有していくことも不可欠といえよう。

(3) 独居になることによる積極性の向上

第4章におけるM-GTAを用いた分析結果より、独居になることはネガティブなことばかりではなく、それまでの家事が軽減されたり、夫を介護する必要がなくなったり、夫が自宅にいて友人が来づらかった状況が解消されるといったような《家族による制約の解消》や、孤独感が逆に《本人の積極性の向上》に寄与するといった、ポジティブな効果ももたらすことが明らかになった。それは、年代的にもそれまで家族や夫の家事や介護を一手に引き受けてきた高齢女性に特徴的であるとも考えられる。別居子や専門職は、独居になった高齢女性と接する際は、このポジティブな効果も意識した上で接することも重要であると推察される。そこで、もしも独居になった高齢女性が第5章の図5-1のように上手く影響が働かずに家に閉じこもりがちになりそうな場合、何か好きなことを見つけるための情報の提供や、新たなことを始めることを提案したり、出にくければ自宅に友人を誘ってはどうか等の言葉かけをすることが生活の見直しにつながる可能性もあるといえよう。すると、《夫との離死別》の段階で停滞していた高齢女性であっても、《夫による制約の解消》の段階に進み、《本人の積極性の向上》に至る可能性もある。そのようにして、本人の、他者とのつながりを促すことも必要ではないかとまとめた。

5. 提言

(1) 国・自治体・社協に提案する具体策

1) 地域空間の活用とコミュニティの生成

Bさんは、誰かに会うために、パン1個を買うことを理由にしてスーパーに出かけると話していた。このように、高齢者の外出を増やすために、人々が普段の暮らしの中で自然に通る、商店や公共のスペースに、気の合う相手と何気ない会話ができる「フリースペース」を確保しておくことが必要といえる。そのためには行政が公共の場にスペースを確保するとともに、スーパーや商店にその効果を説きつつスペース確保を啓発していくことを提言したい。

また、高齢者同士が悩みを分かち合う場として「温泉施設」が持つ機能が明らかになった。いきいきサロンでは、狭いスペースに多くの参加者が集っていることから、人には聞かれない深刻な悩みは話づらく、上記のようなちょっとしたフリースペースでは、簡単な世間話しはできても、サロンと同様に深刻な話しには向いていないためである。自分と話しを聞いてくれる相手とだけで、ゆったりと話しができる場として、温泉施設は適しており、高齢者はそこで情緒的なサポートを授受し合ってきた。しかし、S町にあり、調査に協力してくれた高齢女性らが利用していた温泉施設は、経営難のためにすでに閉鎖に追い込まれた。そこで行政には、温泉施設の保持する「高齢者が相互に悩みを共有できる機能」を理解し、このような機能を持つ施設が営業不振で閉鎖していくことを防ぐために、その規模に適した補助金を支給することを期待したい。同時に、より小規模で、高齢者らがそこに行けば誰かに会えるという「身近な場」を、住民自ら開設できるような「仕組み」づくりを、社協が中心となって進めていくことが望ましいといえる。

ここで、包括やNPO法人、自治会ではなく、社協を挙げるのは幾つかの理由がある。それは、社協は小地域ごとに住民や当事者の主体的な福祉活動の支援を行うことが求められており（全国社会福祉協議会 1992）、社会福祉法においても、社会福祉を目的とする

事業の「企画」や「普及」をするとされているためである。さらには、社協は地域福祉活動計画を策定する役割も担っており、その地域のニーズに沿った「仕組み」づくりを進める役に、最も適していると考えられる。

2) 高齢者の自信向上のための日常行為の継続

第6章の調査により、独居高齢女性は、それまで可能であった「買い物」や「ゴミ出し」といった日常の行為ができなくなったことで自信も喪失していくことが明らかになった。そのため、高齢者本人が買物やゴミだしなどを続け易い環境を整えていくことが、彼女らの自信の維持・回復につながると考えられる。

① 軽量ゴミステーションやワンコインサービスの普及

第6章でも述べたように、調査地域のQ市のごみステーションは、鉄の重い蓋を自力で上げられない場合、ゴミを中に入れられないものが多く、力が弱まったり、背骨が曲がって前かがみの姿勢の高齢者には、ゴミ出しの作業が難しい。そこで、このようなゴミステーションが普及している市町村では、自治会・町内会に対し、高齢者の視点から、ゴミステーションに関する補助金を支給すること提言したい。そうすることで、例えば、フットペダルを踏めば蓋が開いたり、扉が横にも開くようなステーションが普及すれば、高齢者だけでなく、障害者や妊婦といった多くの市民にとって、ゴミ出しが容易になることが期待できる。

しかし、ゴミそのものをステーションにまで運べなくなることもあり得る。そのように独居高齢者らが不便に感じている家事などをサポートするために、熊本県八千代市のシルバー人材センターが、1時間に500円程度の代金で、ゴミ出しや布団干しなどを依頼できる「ワンコインサービス」事業を始めたことは第6章でも述べた。

この事業は現在では、全国的に同様にサービスが広まりつつあるが、剪定などの大口の注文とちがい、このサービスは代金が安価なために採算が合わないことから、事業の広がり方が鈍いといえる。これまでは、いくつかの自治体が独自で同センターにこの事業を委託したり補助金を出しているが、そのような例はまだ一部に限られている。そこで、国全体の取り組みとしてこのワンコインサービスへの補助金支給を検討することを提言したい。

② トラック等の混載規制のさらなる緩和

第6章では荷物の集配トラックが有料で助手席に客を乗せられる仕組みや、タクシーによる買い物代行が広まることの方がより望ましいと述べた。しかし現行制度では、荷物を運ぶトラックと、客を乗せるタクシーやバスは、その役割が明確に区分されており、バスが少量の郵便物や新聞を運ぶことは認められているが、トラックが客を乗せると違法となる。そのような中、国土交通省は、貨物トラックに客を乗せたり、タクシーで荷物だけを運んだりする「貨客混載」について、一部の過疎地域で解禁する方針をすでに決めており、制度改正の検討をすすめている。この改正が実現すれば、荷物の集配トラックが有料で、助手席に客を乗せることができたり、タクシーの買い物代行ができるようになる。それにより、高齢者がトラックの助手席に乗せてもらえるようになり、外出時のバリアの軽減

が期待できる。しかし、この制度改正は、あくまで「過疎地」に限定されている点に問題がある。本研究の対象地域である、Q市を例にとっても、市町村合併により、市街地と農村部が混在している。それは、多くの地方都市でも同様だと考えられるが、そのような市町村は、この新制度の対象には含まれない。そのため国土交通省は、制度を改正する際は、対象地域を一部の過疎地に限定せず、より広い地域を対象とした規制緩和を進めることが重要といえよう。

(2) 目指すべき好循環

上記のような行政や社協の働きかけが実現すれば、高齢者を含む市民全体のサポート授受意識が浸透することで、高齢者の消極性の解消が期待できるといえる。それにより彼らの外出や交流やサポート授受の機会が増えることで、健康が維持でき日常的な行為も継続していくことができると考えられる。これらの関係と具体策を図終-3にまとめた。

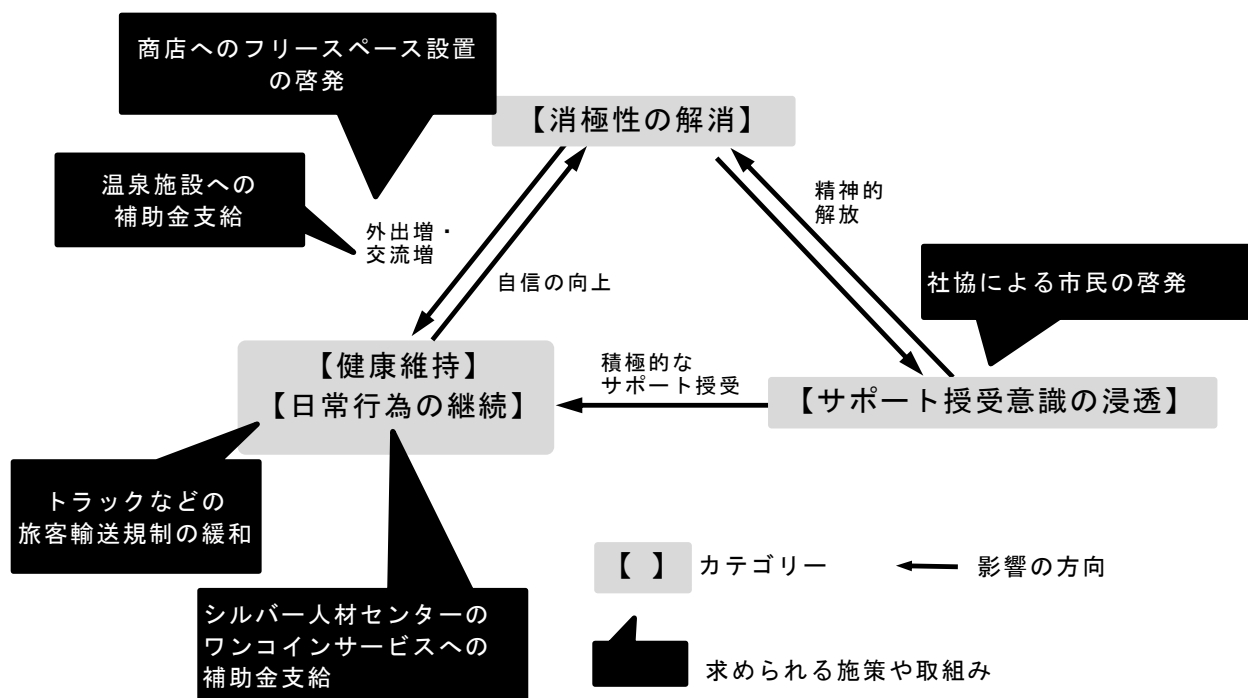


図 終-3 高齢者に関する「目指すべき好循環」

(3) 関係者による「人間理解」の必要性

支えられる側の人間は「罪や恥の意識」に苛まれながら日々を生きており、高齢者が孤立していても近距離に住む者が支えれば十分なのかということ、そのような単純な構図ではないことが本研究の調査で把握することができた。支えられる側の「人間理解」をおろそかにしては、いくら高齢者の孤立防止に励んでも机上の空論にしかならない。政府や自治体、専門職といった施策やサービス関係者は、高齢者の「生きがい」のような「正」の面と同

時に「罪や恥」といった「負」の面も理解をした上で、政策を進めたりサービスを進めなければ、本当の意味での高齢者の孤立問題の解消にはつながらないといえよう。

6. 今後の研究課題

本研究で見出したことは、今後地域に実践的に活かしていきたいと考えている。また、研究の課題としては次のようなものが挙げられる。

本研究では、調査地域が限定されていた。Q市のうちでライフヒストリー調査は農村部であるS町でしかしておらず、今後は市街地であるR町においても独居高齢女性に対する同調査を行い、市街地と農村部における独居高齢者へのソーシャルサポートの差異を比較する必要がある。

また、本研究によって、独居高齢女性にとって「娘」が重要なサポート源だということが明らかになった。しかし、その「娘」に対しての調査は行えなかった。今後は独居高齢者の「娘」にもインタビュー調査を行い、「自己効用感」や「満足感」に加え、「葛藤」や「負担」なども明らかにする必要がある。また、本研究では結論の1つに「近隣による情緒的なサポートの限界」があるとした。そこで、専門職に対してこの点についてフォーカスグループインタビューを行うことも意義があると考ええる。これらのアプローチで、サポートの受け手だけでなくサポートの提供者の意識を調べることは、本研究の結果をトライアンギュレーションすることになり、研究結果の信頼性の向上につながるといえる。

また、本研究は質的な調査方法のみを用い、量的な調査は行わなかったために、研究の結果や結論に十分な信頼性があるとはいえない。今後はQ市の独居高齢女性を対象とした量的調査を行い、娘からのサポートや友人からのサポート、近隣とのつきあいなどを統計的に分析し、本論において結論づけた点を検証する必要もあるといえる。ただし、郵送調査では独居高齢女性が子供に回答を丸投げしたり、代筆を依頼することが十分に考えられる。前者は、回答の信頼性は全くなく、後者も子供に配慮した、バイアスのかかった回答になる恐れが十分にあり得る。そのため、各戸を調査員が訪問して質問を説明しながら回答してもらう「他計式調査」が最も適切ではないかと考える。

このように、独居高齢女性へのサポートに関して、「当事者と支援者」、「質的調査と量的調査」といったように、トライアンギュレーションの考えを用いて複数のアプローチで調査を進めることで、調査研究全体の信頼性が増し、独居高齢女性が抱える問題の本質に迫ることができるといえる。

また、独居高齢男性に対しても調査を行うなど、性差によるサポート源や、授受している道具的・情緒的サポートの相違についても、今後、さらなる探求が必要である。

注 釈

- 1) 以下,「社協」に省略.
- 2) 以下,「包括」に省略.
- 3) 以下,「民生委員」に省略.
- 4) 社会老年学文献データベース
公益財団法人 ダイヤ高齢社会研究財団作成したもので,「社会福祉学」や「老年社会科学」などの学会誌等によるデータベース. URLは次のとおり. (<http://dia.or.jp/dial/>)
- 5) 民生委員は, R 町管轄の T 地区と, S 町管轄の S 地区の, 各民生委員児童委員協議会(以下, 地区民協)の中から選定した. (T 地区民協会長は, R 町以外の町を担当しているため, R 町担当民生委員のうち, 別の調査依頼時に独居高齢者が抱える課題を語っていた民生委員から調査. S 町は S 地区民協の会長から調査.)
- 6) 【 】はカテゴリー名を表している.
- 7) 具体例は, 表 5-6 に示している.
- 8) 《 》は概念を示す.
- 9) 具体例は, 読み手が調査地域を限定できないように, 意味が変わらない範囲で方言を標準語に修正し, 解釈における重要な部分に波線を加えた.
- 10) 参考資料の表①~③について
 - a) 論文の年代順で表記(同じ年の論文は論文名のアルファベット順).
 - b) 在宅高齢者に関する一般的なソーシャルサポートの知見を整理することがねらいのため,「生命予後」「同居家族の死別」「携帯電話の利用」等に関するもの等は含めていない.
 - c) 調査地域のうち, 東京都内の区については東京都の表記を省略.
 - d) 単身で暮らす高齢者の呼称は各研究によって不統一なため, 本表では「独居高齢者」や「独居の者」に統一した.
 - e) 表の知見は, 特に断りがない場合, 高齢者について述べたもの.
 - f) 比較しやすいように, 出典元では過去形で記述されている知見も, 一部を除き, 現在形に統一した.
 - g) 「S サポート」および「S ネットワーク」はソーシャルサポートおよびソーシャルネットワークの略.
 - h) SDS は self-rating Depression Scale の略.
 - i) %の小数点 1 位以下は四捨五入した.
 - j) 表②と表③の括弧内は, 調査対象地域の区分と調査対象者.

文 献

- 青木邦男・松本耕二(2001)「在宅高齢者のセルフ・エフィカシーとそれに関連する因」『社会福祉学』41(2), 35-48.
- 青木邦男(2001)「在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因:地方都市の調査研究から」『社会福祉学』42(1), 125-136.
- 青木邦夫(2004)「在宅高齢者の社会活動性に関連する要因の共分散構造解析」『社会福祉学』45(1), 23-34.
- 浅川達人・古谷野亘・安藤孝敏(1999)「高齢者の社会関係の構造と量」『老年社会科学』21(3), 329-338.
- 浅川達人(2008)「多様性に寛容なコミュニティ-社会的つながりを構築するために」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』(129), 163-175.
- 板東彩・河野あゆみ・津村智恵子(2008)「独居虚弱高齢者の身体的機能, 心理社会的機能, 生活行動における性差の比較」『日本地域看護学会誌』11(1), 93-99.
- 土居健郎(2001)『「甘え」の構造』弘文堂, 36-40.
- 江上渉(1994)「大都市居住高齢者の近隣交際関係:北区高齢者調査から」『総合都市研究』54, 179-190.
- 権玄珠・岡田進一・白澤政和(2004)「大都市在宅高齢者のソーシャルサポート源に対する選好度の特徴:手段的サポートと情緒的サポートにおける類似点と相違点」『社会福祉学』44(3), 52-61.
- 後藤昌彦・山崎治子・飯村のぶ子・松坂裕子・菊池弘明(1990)「農村における老人の社会的孤立」『北海道高齢者問題研究』6, 173-174.
- 原珠里(2009)『農村女性のパーソナルネットワーク』農林統計協会.
- 橋本有理子(2001)「老年期の孤独感と子ども世代に対する主観的評価との関連性に関する研究:配偶者, 友人との関連性も含めて」『家族関係学』20, 65-73.
- 橋本有理子・本村汎(1998)「老年期の自尊感情に関する一研究:脱親性, 役割逆転との関連において」『家族関係学』17, 43-52.
- 畠山明子(2014)「過疎地域における単身高齢者のインフォーマルサポートに関する事例研究-介護保険サービス利用前後の変化を中心に」北星学園大学博士論文 45.
- 林孝之(2010)「一人暮らし高齢者のソーシャルサポートの研究動向」『北星学園大学大学院論集』1(3), 141-152.
- 林孝之(2012)「高齢者における近隣からのソーシャル・サポート選考に関する研究の課題」『北星学園大学大学院論集』3, 179-184.
- 早川洋行(2010)「質的社会調査の必要性」谷富夫・山本努『よくわかる質的社会調査 プロセス編』ミネルヴァ書房, 22.
- 林孝之(2010)「一人暮らし高齢者のソーシャルサポートの研究動向」『北星学園大学大学院論集』1(3), 141-152.
- 林孝之(2012)「高齢者における近隣からのソーシャル・サポート選考に関する研究の課題」『北星学園大学大学院論集』3, 179-184.
- 平野順子(1998)「地域における高齢者のソーシャル・サポート:東京都台東区を事例として」『家族関係学』17, 93-103.

- 平野順子(1998)「都市居住高齢者のソーシャルサポート授受:家族類型別モラルへの影響」『家族社会学研究』10(2), 95-110.
- 井村圭壮(2011)『地域福祉分析論—理論と実践を基盤として〔第2版〕』学文社, 116-117.
- 井上忠司(1986)『「世間体」の構造 社会心理史への試み』日本放送出版, 127-142.
- 岩佐一(2011)「高齢者のソーシャルサポート・ネットワーク評価尺度」『老年精神医学雑誌』22(6), 660-671.
- 河合千恵子・下仲順子(1990)「老年期における家族:老人とその配偶者, 子世代, 孫世代の対人関係についての心理学的アプローチ」『社会老年学』31, 12-21.
- 河合克義(2009)『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社, 114-115.
- 金恵京・甲斐一郎・久田満ほか(2000)「農村在宅高齢者におけるソーシャルサポート授受と主観的幸福感」『老年社会科学』22(3), 395-404.
- 岸玲子・江口照子・笹谷春美・矢口孝行(1994)「高齢者のソーシャル・サポートおよびネットワークの現状と健康状態—旧産炭地・夕張と大都市・札幌の実態」『日本公衆衛生雑誌』41(5), 474-488.
- 木下康仁(2003)『ライブ講義 M-GTA』弘文堂, 28-34.
- 同上, 150.
- 同上, 223-229.
- 木下康仁(2007)『ライブ講義 M-GTA』弘文堂, 29-30.
- 同上, 66-68.
- 同上, 226-229.
- 小林江里香・杉原陽子・深谷太郎ほか(2005)「配偶者の有無と子どもとの距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果」『老年社会科学』26(4), 438-450.
- 小林江里香(2011)「孤立高齢者におけるソーシャルサポートの利用可能性と心理的健康」『日本公衆衛生雑誌』58(6), 446-456.
- 小窪輝吉・高橋信行・田畑洋一(1998)「過疎地における高齢者の孤独感と個人的, 社会的特性との関連 —健康状態, 対人的ネットワーク, 社会参加との関連を中心に」『鹿児島経済大学社会学部論集』12(3), 1-20.
- 国立社会保障・人口問題研究所(2013)「生活と支え合いに関する調査」(<http://www.ipss.go.jp/ss-seikatsu/j/2012/seikatsu2012summary.pdf>, 2015. 10. 30)
- 同上(2013)「日本の世帯数の将来推計(全国推計—2010(平成22)年~2035(平成47)年—」(http://www.ipss.go.jp/pp-ajsetai/j/HPRJ2013/hhprj2013_honbun.pdf, 2013. 8. 19)
- 高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議(2008)「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議(孤独死ゼロを目指して)報告書」(http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/03/d1/h0328-8a_0001.pdf#search=%E9%AB%98%E9%BD%A2%E8%80%85%E7%AD%89%E3%81%8C%E4%B8%80%E4%BA%BA%E3%81%A7%E3%82%82%E5%AE%89%E5%BF%83%E3%81%97%E3%81%A6%E6%9A%AE%E3%82%89%E3%81%9B%E3%82%8B%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%83%86%E3%82%A3%E3%81%A5%E3%81%8F%E3%82%8A%E6%8E%A8%E9%80%B2%E4%BC%9A%E8%AD%B0+%28%E5%AD%A4%E7%8B%AC%E6%AD%BB%E3%82%BC%E3%83%AD%E3%82%92%E7%9B%AE%E6%8C%87%E3%81%97%E3%81%A6%29+%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8)

- , 2012. 10. 10)
- 厚生労働省(2000)「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉の在り方に関する検討会報告書」(http://www1.mhlw.go.jp/shingi/s0012/s1208-2_16.html, 2012. 11. 05)
- 厚生労働省(2009)「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7a.html>, 2012. 11. 01)
- 厚生労働省(2015)「平成 26 年国民生活基礎調査」(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/>, 2015. 10. 30)
- 古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏ほか(1994)「社会関係の研究における分析単位の問題: ケース単位の分析とタイ単位の分析」『老年社会科学』16(1), 11-18.
- 古谷野亘・安藤孝敏・浅川達人ほか(1998)「地域老人の社会関係にみられる階層的補完」『老年社会科学』19(2), 140-150.
- 古谷野亘・西村昌記・安藤孝敏ほか(2000)「都市男性高齢者の社会関係」『老年社会科学』22(1), 83-88.
- 古谷野亘(2003)「高齢期の人間関係」古谷野亘 安藤孝敏編『新老年学 シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング 115.
- 前田尚子(2004)「友人関係のジェンダー差 ―ライフコースの視点から―」『老年社会科学』26(3), 320-329.
- 松下光子・米増直美(2010)「過疎地域で別居の子どもによる通い介護を受けて暮らす高齢者世帯への地域住民による支援を促す方法の検討」『日本地域看護学会誌』12(2), 51.
- 見田宗介(1984)『新版 現代日本の精神構造』弘文堂, 9-41.
- 水上喜美子(2005)「高齢者の主観的健康感と老いの自覚との関連性に関する検討」『老年社会科学』27(1), 5-16.
- 水嶋陽子(2002)「老年期親子における交渉と親しい関係」『家族研究年報』27, 63-74.
- 村田千代栄・斎藤嘉孝・近藤克則ほか(2011)「地域在住高齢者における社会的サポートと抑うつに関連: AGES プロジェクト」『老年社会科学』33(1), 15-22.
- 村山明彦(2013)「介護保険制度下での住宅改修におけるエビデンスを構築するための研究 ―評価法の使用動向に着目した文献的検討―」『最新社会福祉学研究』8, 59-65.
- 中嶋和夫・香川幸次郎(1999)「高齢者の社会支援と主観的 QOL の関係」『社会福祉学』39(2), 48-61.
- 内閣府(2003)「平成 14 年度一人暮らし高齢者に関する意識調査結果の概要」(http://www.kourei/ishiki/h14_kiso/gaiyou.html, 2013. 8. 12).
- 西村昌記(2004)「一人暮らし高齢者の生活課題～サポートネットワーク (Su. N) の観点から～」『老年精神医学雑誌』15(2), 184-191.
- 西下彰俊(1987)「高齢女性の社会的ネットワーク―友人ネットワークを中心に―」社会老年学 26, 43-53.
- 農林水産政策研究所(2014)「食料品アクセス問題と高齢者の健康 (報告要旨)」(<http://www.maff.go.jp/primaff/meeting/kaisai/2014/pdf/20141021.pdf>, 2015. 9. 15).
- 野辺政雄(1999)「地方都市に住む高齢女性の主観的幸福感」『理論と方法』14(1), 105-123.
- 野辺政雄(1999)「高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて」『社会学評論』50(3), 375-392.

- 野邊政雄(2005)「地方小都市に住む高齢女性の社会関係における階層的補完性」『社会心理学研究』21(2), 116-132.
- 野口裕二(1991)「高齢者のソーシャルサポート:その概念と測定」『社会老年学』34, 37-48.
- 野口裕二(1991)「高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート:友人・近隣・親戚関係の生態類型別分析」『老年社会科学』13, 89-105.
- 小川栄二(2006)「高齢者の援助拒否・孤立・潜在化」『福祉のひろば』71(436), 24-29.
- 岡壇(2013)『生き心地の良い町 この自殺率の低さには理由がある』講談社.
- 岡本双美子・河野あゆみ・津村智恵子ほか(2009)「同居家族との死別を体験した在宅高齢者の閉じこもりについての比較検討:性差による比較」『日本地域看護学会誌』11(2), 31-37.
- 大森純子(2005)「前期高齢女性の家族以外の身近な他者との交流関係に関する質的記録記述的研究 -関係性の特徴:『気遣い合い的日常交流』」『老年社会科学』27(3), 303-312.
- Rook,K.S (1987) Social support versus companionship:Effects on life stress, loneliness, and evaluation by others,Jornal of Personality and Social Psychology,52, 1132-1147.
- 澤岡詩野・福尾健司・浜田知久馬(2006)「都市高齢者のネットワークタイプによる友人との交流媒体としての携帯電話の利用状況」『老年社会科学』28(1), 12-20.
- 澤岡詩野・古谷野亘(2011)「社会関係の研究において用いられている非親族との関係の指標—日本の高齢者を対象とした最近の量的実証研究のレビュー」『老年社会科学』33(1), 47-59.
- 澤岡詩野・古谷野亘・本田亜起子(2012)「都市のひとり暮らし後期高齢者における他者との日常的交流」『老年社会科学』34(1):39-45.
- 斎藤雅茂・冷水豊・武居幸子・山口麻衣(2010)「大都市高齢者の社会的孤立と一人暮らしに至る経緯との関連」『老年社会科学』31(4), 470-480.
- 斎藤雅茂・冷水豊・山口麻衣・武居幸子(2009)「大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴」『社会福祉学』50(1), 110-122.
- 斎藤浩子・石川尚子・大久保みたみほか(1991)「東京多摩西部地区の高齢者の生活に関する研究(第2報):対人関係」『日本家政学会誌』42(12), 1029-1041.
- 斎藤美華・小林淳子・服部ユカリ(2005)「前期高齢者の「お茶飲み」がソーシャル・サポートと主観的幸福感および交流の充実感に及ぼす影響」『日本地域看護学会誌』7(2), 41-47.
- 流石ゆり子(2001)「障害をもつ在宅高齢者の生活の質への影響要因:ソーシャル・サポート授受の視点より」『日本在宅ケア学会誌』4(3), 32-39.
- 冷水豊(2009)『「地域生活の質」に基づく高齢者ケアの推進』有斐閣, 39-64.
- 同上 157-159.
- 総務省(2011)「平成22年国勢調査 人口等基本集計(男女・年齢・配偶関係, 世帯の構成, 住居の状態など)」(http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001035030&cyco_de=0, 2012.11.16).
- 玉野和志(1990)「団地居住老人の社会的ネットワーク」『社会老年学』32, 29-39.
- 橘木俊詣(2011)『無縁社会の正体』PHP 研究所, 134-139.

同上, 206-212.

鑪幹八郎(1998)『恥と意地』講談社, 40-41.

ToniC.Antonucci H.Akiyama(1987) Social Networks in Adult Life and a Preliminary Examination of the Convoy Model, Journal of Gerontology, 42(5), 519-527.

上野谷加代子他(2011)「ソーシャルサポートネットワーク」社会福祉士養成講座編集委員会『地域福祉の理論と方法第2版 新社会福祉士養成講座9』中央法規, 174-178.

浦光博(1992)『支えあう人と人 ソーシャル・サポートの社会心理学』サイエンス社, 58-61.

同, 120-121.

ウヴェ フリック・小田博志監訳(2011)『新版 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』春秋社, 18.

渡瀬典子(1998)「過疎地域における高齢単独世帯者の不安感に関する一研究: 静岡県北遠地区の調査から」『家族関係学』17, 33-42.

山口麻衣・冷水豊・斉藤雅茂ほか(2011)「大都市独居高齢者の近隣住民・知人による声かけ・安否確認に対する選好」『日本の地域福祉』24, 21-31.

大和三重・前田大作・野口裕二ほか(1990)「日本の高齢者の自尊感情とその要因分析」『老年社会科学』12, 147-167.

大和礼子(1996)「中高年男性におけるサポート・ネットワークと「結びつき志向」役割との関係: ジェンダー・ロールの視点から」『社会学評論』47(3), 350-365.

横山博子・芳賀博志・安村誠司・藺牟田洋美・植木章三・島貫秀樹・伊藤常久(2005)「外出頻度の低い「閉じこもり」高齢者の特徴に関する研究-自立度の差に着目して-」『老年社会学』26(4), 424-437.

全国社会福祉協議会(1992)「新・社会福祉協議会基本要項」(<http://www.ipss.go.jp/Publication/j/shiryou/no.13/data/shiryou/syakaifukushi/443.pdf#search='%E6%96%B0%E3%83%BB%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%A6%8F%E7%A5%89%E5%8D%94%E8%AD%B0%E4%BC%9A+%E5%9F%BA%E6%9C%AC%E8%A6%81%E9%A0%85'>, 2015. 11. 13)

参考資料

表① 高齢者に関するソーシャルサポート研究の調査地域・調査対象と主な結論⁹⁾

研究者 (年)	①調査地域 ②調査対象	ソーシャルサポートに関する主な結論(知見)
玉野 (1990)	①都内 2 公団の賃貸 住宅団地 ②単身高齢者と高齢 者夫婦世帯	○独居の方が夫婦のみの者よりも関係数が多い。 ○配偶者がいない場合には、その他のネットワークとの機能的な意味での親密さや重要性が大きくなる。 ○子供はもちろん兄弟・親戚といった家族的な親族との関係数や、専門的なサービスを提供してくれる人との関係数が、独居の場合、特に高くなる。
大和、 前田、 野口他 (1990)	①全国 ②60 歳以上男女	○女性の場合、社会的な孤立感や理解者の有無よりも、もっと身近な周りの親しい人たちからの精神的支えの方がより自尊感情に強い影響を与えるという、かなり明確な性差が見られる。
河合、 下仲 (1990)	①東京都内 ②老人福祉施設利 用者	○男性はその妻から援助行動をより多く受けていると認め、かつ妻に対して肯定的感情を多く抱いていた。 ○女性は男性より、子どもが友好・親和的な行動をとり、援助してくれると認知しており、しかも子どもに対する愛情期待も高い。
野口 (1991)	①板橋区 ②高齢者	情緒的サポート、手段的サポート、ネガティブサポートの3種のサポートを区別し、配偶者以外の同居家族、別居子と親族、友人・知人・近隣の3主体別に、サポートの入手可能性をその提供者の有無によって測定。 ○20の下位尺度のほとんどに関して良好な信頼性が得られた。 ○3種のサポートを区別する構成概念の妥当性が支持された。 ○女性の方が得点が高く、幸福感などの変数ともよく反応するという性差も確認された。
野口 (1991)	①全国 ②60 歳以上男女	○ネットワーク、サポートの両方とも年齢とともに縮小あるいは低下する傾向が見られる。 ○特に友人数と手段的ポジティブサポートに顕著な傾向がみられる。 ○独居の者はネットワークの規模は小さいが、頻度は多くサポートも多いのに対し、夫婦の世帯ではネットワークの規模は大きい、頻度は少なくサポートも少なく、ネットワークとサポートの関連の仕方は世帯類型によって異なる。 ○ネットワークの規模とポジティブサポートの関連の全ての世帯類型にみられるが、独居の場合にもっとも強い。 ○ネットワークの頻度とポジティブサポートは、夫婦と同居子世帯では、相関がない。 ○ネットワーク規模とネガティブサポートは、同居者がいない場合(独居と夫婦のみ)に相関が高い。 ○モラルとの関係は、独居の者の友人数と情緒的ポジティブサポートでとくに強く現れる一方、夫婦と同居子世帯では関連が弱い。 ○活動能力との関係は、サポートよりもネットワークにより強く現れる傾向があるが、その現れ方は世帯類型によって異なる。
斉藤、 石川、 大久保 他 (1991)	①青梅市中部市 ②70 歳以上老人ク ラブ会員	○84%の高齢者が、近隣と、もののやりとりをすると答えたが、性差や年齢による差はない。 ○品物の預かり合いをするものは、57%であり、性別では男性 53%、女性 61%と、やや女性が多い。「しない」は 3 割である。
江上 (1994)	①東京都北区内 2 地 区 ②①に 25 年以上住 む高齢者	○道具的な援助が近隣や親族から与えられているとはいえない。
岸、 江口、 笹谷他 (1994)	1) ①夕張市 ②69～70 歳の 全高齢者 2) ①札幌市中央区と 北区 ②69～70 歳高齢者	○高齢者の S ネットワークは地域と家族類型で大きな差がある。 ○札幌の独居高齢者は情緒サポートや介護サポートが有意に少ない。 ○現状でのサポートの担い手は家族・近隣が主で、公的サポートの比率は両地域とも低い。 ○札幌ではどの家族類型でも近隣との交流は希薄で、地域活動への参加率も低い。
古谷野、 岡村、 安藤他 (1994)	①世田谷区と山形 県米沢市 ②65～79 歳高齢者	○情緒的・手段的なサポートの授受、同伴行動、一体感、介護的サポートの可能性を尋ねたところ、これらの関係を有する者の頻度は、高齢者個人を単位としたときと、高齢者と他者との間の「タイ」を単位にして時で大きく異なる。 ○高齢者を単位とする際は、複数の他者との関係を、相互の違いを無視してまとめあげるという手続きをとるため、社会関係が実際よりも密接なものと評価される傾向にある。 ○高齢者の社会関係についての精密な分析を行うためには、「タイ」を単位とすべき。
渡瀬 (1998)	①静岡県磐田郡 ②独居高齢者	◎量的調査 ○別居子と会う頻度が密であるからといって独居高齢者が不安を感じる頻度が減る訳ではない。 ○不安の内容は「病気のとき」が多く、不安に関する頻度が加齢に伴ってやや減少する傾向は体調が悪いと感じる頻度の中間層(たまに感じる・あまりない)の加齢に伴う増加が影響している。 ○「自分が困った時に相談できる人がいる」が 9 割以上。 ◎質的調査 ○複数の非家族によるネットワークも支えの重要な一部。 ○独居高齢者は複数の近隣住民と関わり長年のネットワークにより緊密な関係を形成。 ○趣味の有無は近隣関係を深める一要素になったのでは。
橋本、 本村 (1998)	①大阪府内 ②60 歳以上教養講座 受講者	○男性女性ともに、生活的、物質的、情緒的サポートの授受の指標でみる「役割逆転」の有無と自尊感情との間に関連性はない。 ○役割逆転は子どもからの支援を不可欠としていない場合には、老親の自尊感情を必ずしも低下させるとはいえない。
平野 (1998)	①台東区 ②高齢者	○サポートについては、ネットワークと同様、近居の別居子がいる場合には、それらの子どもや親族を中心としたサポート授受を行っており、近隣サポートは二次的なものである。 ○近隣サポートの少ないタイプでは、特に、近隣が果たすといわれる日常性・緊急性の高いサポートさえも、子どもを含む親族がサポートしていた。 ○近隣とのサポート授受の多かったタイプは、日常的・緊急的サポートの他、日常的な「おすそわけ」やお土産の交換、様々な話をして気晴らしをするといった情緒的なサポートが見られる。 ○同居子・近居の別居子がいなくても、子に頼るまいと思う者がいる。 ○子や親族しか頼らないと思う者がいる。

古谷野、 安藤、 浅川他 (1998)	① 世田谷区と山形県 米沢市 ② 65～79 歳高齢者	○ 社会関係の指標の、「配偶者」「配偶者以外の同居家族」「同居家族」「別居子とのその配偶者」「兄弟・親戚」「近隣・友人」の 6 つ階層的な補充関係は、配偶者と「配偶者以外の同居家族」の間にのみ、情緒の一体感と介護の可能性のみが認められる。 ○ 配偶者の有無が子どもとの同居に関連しているのは、「配偶者以外の同居家族」との関係が配偶者との関係の欠如を補充する。 ○ 配偶者の有無と同・別居の関連という家族形態についての知見に、社会関係の面から裏付けを与えたもの。
平野 (1998)	① 世田谷区・台東区・ 東久留米清瀬市 ② 65 歳以上高齢者	対象者の世帯における配偶者と同居子の有無という家族類型に着目して、4 つのグループに分類。 ○ 4 群いずれも、情緒的サポートは家族や友人や近隣といったサポート資源と自発的にサポート授受を行っている。 ○ 手段的サポートと介護的サポートは主に家族との間で授受されている。 ○ これらのサポートは家族人数の減少につれて授受も減少している。 ○ 「サポートを受領する必要がない」という自立性は、サポートの授受そのものよりもモラルに対しての正の影響がある。 ○ 夫婦のみ世帯の男性は、葉への提供サポートがモラルに正の影響がある。 ○ 配偶者も同居子もある男性は、子どもとの互補的なサポート授受が高いモラルと関連している。
中嶋、 香川 (1999)	① 北海道 A 町 ② 高齢者	○ S サポートのうちでも、「友人・知人・隣人」とでは、ネガティブサポートと手段的提供サポートが、モラルに大きく影響している。 ○ 前期高齢者の提供的な手段的サポートはモラルに対し正の影響を持つ傾向。 ○ 前期、後期高齢者ともネガティブなサポートがモラルに対し負の影響を持つ傾向(加齢と共に、身体機能が低下し、受領的サポートが増大する後期高齢者で傾向が顕著) ○ 手段的な提供サポートがモラルを高める。 ○ S サポートとモラルの関係はかなり強固。 ○ S サポートは主観的 QOL に影響するという理論が「友人・知人・隣人」関係にも成立し、その傾向が提供的な手段的サポートとネガティブサポートにおいて顕著。
野辺 (1999)	① 岡山市中央部 ② 65～94 歳の男女	○ 男性は女性よりも S ネットワークの中に配偶者を含めている。 ○ 男性は女性よりも多くの職場仲間関係を組織している。 ○ 女性は男性よりも多くの近隣関係を組織している。 ○ 男女とも、社会関係の大部分を近隣ないし岡山市内で取り結んでいる。 ○ S ネットワークの規模に性差はない。 ○ 配偶者と親族がサポート源として圧倒的に重要。 ○ 近隣者・友人・職場仲間はサポートの提供でそれほど重要な役割を果たしていない。 ○ 男性は配偶者と職場仲間からサポートを入手できたが、女性は親族と近隣者にサポートを求めやすい。 ○ 配偶者に入院時の世話をしてもらえらる割合で性差が大。 ○ 女性は男性よりも心配事の相談をいずれかの社会関係の人々に頼れる。 ○ 男性は女性よりも仕事上の話と相談を、いずれかの社会関係の人々にできる。
野辺 (1999)	① 岡山市中央部 ② 65～79 歳女性	○ 配偶者がいるとか子どもが同居しているということではなく、何らかの S サポートを求めうる親密な人々が同居家族として身近にいることが、女性の主観的幸福感を高めている。
金、 甲斐、 久田他 (2000)	① 長野県佐久市東地区 ② 60 歳以上の人	○ 配偶者のいる男性においては、妻からの受領サポートと主観的幸福感とか負の関連を示し、妻からの受領サポートと妻への提供サポートの交互作用が有意。 ○ 女性の場合、有配偶者では友人からの受領サポートと主観的幸福感とは負の関連、無配偶者では友人への提供サポートと主観的幸福感とは正の関連。 ○ 地域在住の者は、サポートを受けるだけよりも、サポートを提供することが主観的幸福感を高める。
古谷野、 西村、 安藤他 (2000)	① 杉並区 ② 60～79 歳男性高齢者	○ 「ちょっとした用事をしてくれた」他者は 2 割以下で、配偶者は 9 割以上、子どもは 5 割程度、子の配偶者は 2～3 割である。 ○ 「ちょっとした用事をしてくれた」他者は平均 0.8 人である。
橋本 (2001)	① 大阪市内(枚方、寝屋川、西区) ② 60 歳以上教養講座受講者	○ 老親の孤独感は、子どもや子どもの配偶者がそばにいるその瞬間に感じる安心感よりも、老親が子ども、子どもの配偶者の「思いやり」「信頼」「理解」を、どの程度感じているかという主観的評価との関連性が高い。 ○ 友人をもつ男性の場合、子ども世代に対する主観的評価と老親の孤独感との間に関連性が認められる。 ○ 友人をもつ女性の場合、子どもの配偶者に対する主観的評価と老親の孤独感との間にのみ関連性が認められない。
流石 (2001)	① 山梨県甲府盆地南部の石和保健所管内 5 町 3 村 ② 機能訓練・デイサービスに月 1 回以上通所する在宅障害高齢者	○ サポートの授受は配偶者、同居子、別居子、友人の順でよく行われている。 ○ サポート授受の頻度、パターンは男女差が顕著。 ○ 配偶者や友人とサポートの授受が行われている者は QOL が高い。 ○ QOL への影響要因は、活動能力、世帯状況、年齢、住居の状況、受領サポートで活動能力が高いこと、同居世帯、75～84 歳の年齢層、持ち家があること、適度な量の受領サポートがあること等が QOL を高める方向に強く作用し、その逆の場合は QOL を低下させる方向に作用している。
青木 (2001)	① 山口市 ② 在宅高齢者	男性) ○ 「SDS」「生活満足度」「対人・自立的対処」「家族・親戚 S サポート」の 4 要因が孤独感に対して関連。 ○ 有意な関連を示した要因では「SDS」では抑うつが高いほど、「生活満足度」では満足度が低いほど、「対人自立的対処」では自立的対処が高いほど「家族・親戚 S サポート」ではサポートが低いほど孤独感が高い。 女性) ○ 上記 4 要因と「友人知人 S サポート」の 5 要因が孤独感に対して有意に関連。 ○ 有意な関連を示した要因では「SDS」「生活満足度」「対人・自立的対処」「家族・親戚 S サポート」は同じ。 ○ 「友人知人 S サポート」ではサポートが低いほど孤独感が高い。
青木、 松本 (2001)	① 山口市 ② 60 歳以上在宅高齢者	○ 在宅の人のセルフ・エフィカシーに対して有意に関連した要因は、男性で SDS、自尊感情、生活満足度の 3 要因であり、女性ではこの 3 要因に加えて子供の有無、友人ソーシャルサポートであった。 ○ 女性は、子どもがいて、抑うつ状態が低く、友人の S サポートが多く、自尊感情が高く、生活満足度が高い程、セルフ・エフィカシーが高い。
水嶋 (2002)	① 大阪、神戸、京都、 東京、神奈川 ② 73～91 歳の女性	○ 女性は娘的存在に対して、反発、開き直りという過程を経て、「こうやって生きてきた、だから老後をこのように過ごしたい」という自己承認にむけたコミュニケーションを展開する。 ○ こうしたサポート獲得を目指す過程で、女性は自分の自己承認欲求を受け止める人との間に親しい関係をつくる。 ○ 女性はこの結びつきにより、老いのライフスタイルへの情緒的承認を伴うサポートを得ている。 ○ 娘的存在は、女性の老いのライフスタイルを尊重し、自己表現の機会を保障する類のサポートを行う。
権、 岡田、 白澤 (2004)	① 大阪市 ② 高齢者	○ 全体的に、家族やフォーマルサポート源に対する選好度が高く、近隣、友人、親戚といった家族以外のインフォーマルサポート源への選好度は低い。 ○ 情緒的サポートは、家族とフォーマルサポート源に対する選好度には程度差がある反面、手段的サポートは、両者に対する選好度が同程度に高い。 ○ 手段的・情緒的の両サポートで、ボランティアがフォーマル資源へ分類され注目された。

		○全体的に、経済的、社会心理的面でリスクが高くなりやすい高齢者層は、フォーマルサポート源への選好度が高い。
小林、 杉原、 深谷他 (2005)	①全国 ②70歳以上男女	○無配偶者は、有配偶者より友人などとの接触頻度が高く、無配偶者や子どもが遠くに住む人ほど友人、近隣が情緒的、手段的サポート源となっている。 ○家族資源のサポート源への効果の強さは性やサポートの種類による違いがあり、子どものいない人は親戚をサポート源とする傾向がある。
水上 (2005)	①F県0市 ②61歳から94歳の老人福祉センター利用者	○高齢者の主観的健康感には①老いの自覚②老研式活動能力指標③Sサポートにおけるポジティブサポート④互いに行き来する近隣数⑤主観的生活満足度における下位尺度の老いの評価、などが関連している。
野邊 (2005)	①高梁市 ②65～79歳女性	○多くの女性は手段的サポートを「配偶者以外の同居家族」に期待している。 ○女性にとって同居家族がサポート源として重要。 ○高学歴の高齢女性は、低学歴の高齢女性よりも「その他の親族」に手段的サポートを期待する。 ○農村部の女性は市街地の女性よりも別居子とその配偶者に手段的サポートを期待する。 ○最も身近な別居子が近くに居住しているほど、別居子とその配偶者に、手段的サポートと情緒的サポートいずれも期待しやすい。
齋藤、 小林、 服部 (2005)	①M県T町農村 ②前期高齢者	○「お茶飲み」は友人・隣人・知人からの情緒的サポートと手段的サポートにおいて影響を及ぼす要因である。 ○主観的幸福感においては「お茶のみ」は有意な関連要因ではない。
澤岡、 福尾、 浜田 (2006)	①世田谷区・大都市 ②高齢者	○「介護」「介助」「相談」に関しては、親族ネットワーク内に代替性が認められる。 ○同居家族、別居家族の順番で階層性が存在する。 ○「情緒」「余暇」に関しては、友人ネットワークが親族ネットワークを代替していることが考えられる。代替性に着目し、ネットワークタイプを分類した結果、「同居家族」「別居家族」「近所の人」に依存するタイプが74%で最も高く、「同居家族」「別居家族」「近所の人」以外の「それ以外の友人」「その他の人」からもサポートを期待するタイプは20%、サポートの提供者がいないタイプは7%である。
板東、 河野、 津村 (2008)	①大阪府A町 ②要支援要介護を除く独居高齢者	○男性は自身の食事の支度をしている者、友人の家を訪ねるものが少なかった。 ○男性は女性に比べ、家族や友人とのつながりが弱く、自身で食事の支度をしている者が少なかった。
斉藤、 冷水、 山口他 (2009)	①板橋区 ②独居高齢者	○孤立状態の人のうち、約8～9割の人は緊急時や日常の軽微な支援を頼める人が1人もいない。
岡本、 河野、 津村他 (2009)	①A市B地区 ②在宅で、1年間での同居家族との死別経験高齢者と未経験高齢者	○同居家族死別体験者は、買い物や自分でしている者が多い。 ○同居家族死別体験者は、留守中用事を頼める人がいない者が多い。 ○男性の同居家族死別体験者は、人との交流やSサポートも乏しい。
山口、 冷水、 斎藤他 (2011)	①板橋区 ②独居高齢者	○子の有無や社会階層などの違いにより独居高齢者は多様。 ○声かけに対する選好では4割がフォーマルケアのみを選好。 ○男性より女性が近隣を選好する割合が高い。 ○声かけに関するインフォーマルケア担い手選好の結果、独居高齢者の4割弱が、近所・知人など非親族ケアを選好。 ○インフォーマルケアの中で住民が担い手として選好されるかどうかを検討する際にも、「その他親族」は独居高齢者の場合、見逃せない要素。 ○声かけに対するインフォーマルな担い手選好として約2割が近隣(約4割が近隣・知人)を挙げた。 ○近隣、知人への声かけに関するロジスティック回帰分析の結果、所得階層が低いほど地域活動経験があるほど、近隣、知人への声かけ選好の確立が高まる。
村田、 斎藤、 近藤他 (2011)	①3県5自治体 ②高齢者	○同居家族からの手段的サポートの受領・提供を除き、女性の方がより多くの相手とのサポートの授受を行っている。 ○同居家族、別居家族・親族、近隣・友人・知人の全てとサポート授受を行っている。 ○女性が男性より広範なサポートネットワークをもっている傾向がある。 ○サポート授受の相手は、同居家族とのサポート授受は、男性が女性より多い。 ○女性は男性より、別居子・親族や、近隣・友人・知人との情緒的サポートの授受が多く、どのサポート授受の相手にも、多くの手段的サポートを提供している。 ○独居の者は、家族と同居している者よりも、サポートの授受を全く行っていないと回答する割合が高い。 ○情緒的サポートに関しては、同居別居に関わらず、別居子や親族とも、近隣・友人・知人とも同程度のサポートを行っている。 ○手段的サポートに関しては、近隣・友人・知人に比べ、別居子や親族とのサポート授受が多い。 ○男女とも、Sサポートの授受あり群で、抑うつありの割合が低い。 ○男性は別居子・親族による情緒的サポートの受領、近隣・友人・知人による手段的サポートの受領で、抑うつとの関連が弱い傾向あり。 ○男女とも、サポート授受の相手に関わらず、サポートのない者に比べ、サポートを有する者は抑うつのリスクが低い。 ○つまり、相手に関わらず、サポート授受が期待できる者は、実際のサポート授受にかかわらず、年齢、疾患、家族との同居や配偶者有無を調整しても、抑うつの割合が低い。
澤岡、 古谷野、 本田 (2012)	①杉並区 ②独居後期高齢者	○多くのひとり暮らし後期高齢者は非親族との交流を有している。 ○交流のある非親族では「近所の人」と「友だち」が多い。 ○他者の多くは、よく話をしたり、名前と連絡先の両方を知っている人である。 ○他者との間で話されるのは軽いあるいは習慣的な事柄が多く情緒的サポートの授受はわずかである。 ○日常的に交流する他者のなかには役割のうえの関係のみを有する非親族も多く含まれている。

表② ソーシャルサポート研究における近隣サポートに関する主な知見⁹⁾

地域区分	近隣サポートに関する主な知見
都市	<p>○情緒的サポート、手段的サポート、ネガティブサポートの3種のサポートを区別し、配偶者以外の同居家族、別居子と親族、友人・知人・近隣の3主体別に、サポートの入手可能性をその提供者の有無によって測定したところ、女性の方が、得点が高く、幸福感などの変数ともよく反応するという性差も確認された。(大都市、高齢者)</p> <p>○84%の高齢者が、近隣と、もののやりとりをすると答えたが、性差や年齢による差はない。(中都市、70歳以上の老人クラブ会員)</p> <p>○札幌ではどの家族類型でも近隣との交流は希薄で、地域活動への参加率も低かった。(大都市、69～70)</p> <p>○近隣とのサポート授受の多かったタイプは、日常的・緊急的サポートの他、日常的な「おすそわけ」やお土産の交換、様々な話をして気晴らしをするといった情緒的なサポートが見られる。(大都市、高齢者)</p> <p>○近隣サポートの少ないタイプでは、特に、近隣が果たすといわれる日常性・緊急性の高いサポートさえも、子どもを含む親族がサポートしていた。(大都市、高齢者)</p> <p>○サポートについては、ネットワークと同様、近居の別居者がいる場合には、それらの子どもや親族を中心としたサポート授受を行っており、近隣サポートは二次的なものである。(大都市、高齢者)</p> <p>○男女とも、社会関係の大部分を近隣ないし岡山市内で取り結んでいる。(大都市、65～94歳)</p> <p>○女性は男性よりも多くの近隣関係を組織している。(大都市、65～94歳)</p> <p>○近隣者・友人・職場仲間はサポートの提供でそれほど重要な役割を果たしていない。(大都市、65～94歳)</p> <p>○男性は配偶者と職場仲間からサポートを入手できたが女性は親族と近隣者にサポートを求めやすい。(大都市、65～94歳)</p> <p>○全体的に、家族やフォーマルサポート源に対する選好度が高く、近隣、友人、親戚といった家族以外のインフォーマルサポート源への選好度は低い。(大都市、高齢者)</p> <p>○近隣、知人への声かけに関して、所得階層が低いほど地域活動経験があるほど、近隣、知人への声かけ選好の確立が高まる。(大都市、独居)</p> <p>○男性より女性が近隣を選好する割合が高い。(大都市、独居)</p>
農村	<p>○独居高齢者は複数の近隣住民と関わり長年のネットワークにより緊密な関係を形成。(農村と過疎、独居)</p> <p>○Sサポートは主観的QOLに影響するという理論が「友人・知人・隣人」関係にも成立し、その傾向が提供的な手段的サポートとネガティブサポートにおいて顕著。(農村と過疎、高齢者)</p>

表③ ソーシャルサポート研究における独居高齢者に関する主な知見⁹⁾

地域区分	ソーシャルサポートに関する主な知見
都市	<p>○札幌の独居高齢者は情緒サポートや介護サポートが有意に少ない。(大都市、69～70歳高齢者)</p> <p>○孤立状態の人のうち、約8～9割の人は緊急時や日常の軽微な支援を頼める人が1人もいない。(大都市、独居高齢者)</p> <p>○他者との間で話されるのは軽いあるいは習慣的な事柄が多く情緒的サポートの授受はわずかである。(大都市、独居高齢者)</p> <p>○日常的に交流する他者のなかには役割のうえの関係のみを有する非親族も多く含まれている。(大都市、独居高齢者)</p>
農村	<p>○別居子と会う頻度が密であるからといって独居高齢者が不安を感じる頻度が減る訳ではない。(農村、独居高齢者)</p> <p>○独居高齢者は複数の近隣住民と関わり長年のネットワークにより緊密な関係を形成。(農村、独居高齢者)</p>

表④ カテゴリー・概念・定義と具体例の典型例

カテゴリー	概念	定義	典型的な具体例	具体例
自助努力の不足	他者への閉塞感	他者が家に入ることに嫌悪感がある。	「 <u>家に人が入って来て掃除してもらうのが「いい」家と「いや」な家とね、それがうちの一区は特に、もう、うちの家内なんかは徹底的に嫌だった。それで、この間もね、家に入れてね、介護2やから入れて、掃除してもらって、なんか作ってもらおうっていうんだけど、やっぱり嫌がるから、どうしても自分だけでしないといけない。そういう、<u>個人の意識の問題もあるんですね。</u></u> 」	②
不安の増幅	買物困難 高齢者の健康不安	徒歩圏内の小売店や移動販売、配達を利用できなかったり知らない高齢者の健康が不安。	「最近では買い物難民とか言葉が使われていますけど、まあ、自分の歩いていける範囲で食材の買い物ができる店があったりとか、あー、移動販売車が、こう来てからですね、あの利用できる、食材を買うことができるとか、食材の配達とか、弁当の配達を利用するなど。そういうことを利用されている独居高齢者の方は、いいと思うんですけど、 <u>いずれのような方法もとれないとかですね、知らないとか、んー、そういった方は、食に直結することは健康の維持にもつながることですので、あのそういった点は不安だなあと</u> 思います。」	⑫
	身体の変えによる膨らむ不安	身体の変えによって不安が膨らむ。	「だから、ま、自分が、体が健康だと全然考えなかったけど、 <u>自分がだんだん弱っていくと、やっぱりすごく不安が募って来てる方も多いですね。やっぱりそして、ひとり暮らしでも、やっぱりほら、認知が始まったりとかですね、そういう方たちには、また、「それなりに分かってらっしゃるのか、ちょっと不安は、あの、またちがった不安が出てこられてるのか、全く、そんなの気づかれてないのか」</u> っていう感じで。」	⑧
支援者との意識の相違	情報共有に対する理解不足	個人情報共有が重要にも関わらず本人の理解が不足している	「特にそういった個人情報とか、結構、敏感なんですもんね。だから、V(地区)の民生委員さんがおっしゃるんですけど、 <u>「なんであんたが、その個人的なことを知ってるのか、話さないといけないのか」</u> っていうって、もう関係を閉ざされる方もいらっしゃるんです…」	④
	支援者との価値観の相違	支援者はサービスを提案しても本人が必要と判断するなど価値観にズレがある。	「そういう電化製品がうまく…。 <u>こちらがいいと思ってもらって利用できないこともあるんですけど、あとは、今、私が一人関わってる方がですね、介護拒否じゃないですけど、なかなか受入がうまくいかなくて、私たちがこうあった方がいいっていう状況が必ずしもその人たちがいいと思っていないですね。</u> 」 「もう一人、今、大変な人がいるんですけど、認知症で、結局、今まで通りずっとひとりで生活してて、あの信頼した甥っ子さんが、いらっしゃるんですね。そうすると、今まで一人で頑張ってきたら、自分が少しみえさんとかがうなっているのも分からないじゃないですか。そうすると、 <u>今までどおり生活されてるけど、まわりはハラハラなんですよ、なんに対して前ベースでいかれてるんで。</u> 」	①
身体の変え	活動可能年齢の境界	85歳を過ぎると身体的に弱り地域活動に参加できなくなる。	「あと、V地区の方はギリギリまで、自分で自立して生活を楽しみたいっていうのもあられるので、あの一、公民館活動も、公民館もすぐ近くじゃないですか。(中略)だからギリギリまではそういう自分の活動を積極的に、楽しまれてる方も多くて、ここに相談に来られる方っていうのは、若年性とか、早く障害を持たれる方は別として、 <u>85過ぎぐらいから、うん、85過ぎたら、とたんに体が弱って、そういった公民館活動もできなくなっ、っていうところで相談に来られる方がいらっしゃるんですよ。</u> 」	⑨

経済的な 制約	通院費用 の増幅	病院にタクシー で行かざる 得ない。	「85 前の人、4 だったのかな。もう、歩けなくなって、って いうか外に出て、こう買い物とかなんかができないくらい、 足腰が痛んで、そういう方が病院に治療に行くのはタクシー でね、R 町から、W 外科とかタクシーで行って、タクシーで帰 って、とか、そういう状態のときに、やっぱりゴミ出しを近 所の人がしてくれてるけれど、とっても気の毒っていうところ で介護保険を使って、ゴミ出しをしてもらう、それから買 い物をしてもらう、っていう、そういう使い方をして、今は 元気になって、はい、86、今は元気になりましたけどね、 そういう使い方…」	⑤
	経済面 によるサー ビス利用 の支障	経済的に不安 な高齢者は、タ クシーやヘル パーを利用し にくい。	「特に、今、(中略)大きな、あの一、スーパーが、ね、車を 若い人は持っていて、さっと買い物に行ってますね、あの、 買い物できるような状況にはありますけれども、独居の方 で、自分で運転して行く方は、問題ですけど、そういう所 にも、あ一例えば、タクシーを使っていけないといけないとか なると、 <u>経済的に恵まれた方ばかりじゃないので、えーその いうのを辛抱してしまったりとか、必要最低限のものを買う とか、</u> というような生活になるんじゃないかと思えますね。で、 まあ要支援とか、要介護認定とか受けている方であれば、あ の、ヘルパーの活用とかですね、ヘルパーに、こう、買い物 をしてもらうとか、そういうこともできるんですけど、えー、 まあ認定を受けてない方でも、自費のヘルパーとか活用は考 えられますが、それでも 1 時間 1500 円ぐらい、あーかかっ たりとかするから、やっぱり、これもさきほどのような、 <u>経 済的な、あの一、不安がある方は、なかなか利用しにくいん じゃないか</u> かと思えます。」	⑥
周囲から の孤立	活動不参 加者の孤 立	地域活動に参 加できない高 齢者が取り残 される。	「あー課題ですね。うーん、そうですね。 <u>そういったのに ついていけない方が取り残されるの</u> かなっていうのもあり ますね。(中略)やっぱりその <u>身体的に、活動に参加できない とか…</u> 。」	⑪
	役割・目 的を求め る男性の ひきこも り	男性は役割や 目的がないと 地域に出てい かずひきこも りに。	「その <u>介護サービスにつなげるにしても、男性の方は目的意 識がない</u> といかないじゃないですか。」 「 <u>男性の引きこもりじゃないですけど、活動をする場がない っていうところを、</u> どういう風に地域にいっぱい出すのかっ てところで。」	⑬
	外出減に よる孤立	買物などに自 力で外出でき ない高齢者は 孤立しやすい。	「日常の安否確認という事ですけど、これも、あの、 <u>買い物 などで、自分で、あの、外出できる間は、人と会ったりとか 交流する機会に恵まれていますけど、</u> そのようなつきあいを 行っていないとか、そういった方は、孤立しやすいという風 に考えます。」	⑩
サポ ートの 限界	インフォ ーマルサ ポートの 限界	インフォー ーマルな社会 資源に依頼 できること は限界があ る。	「ペースメーカー入れて倒れられたとき、もうどきっとした から、夜になってちょっと助けのときは R 町ぐるっとまわっ てきて、とか、日暮時に、それを週に 1 回でもできればいい んですけど、心配な時はちょっと、回ってみたりとか訪問を、 あまり気にならない方は月に 1 回なんだけど、2 回 3 回とか 頻繁に、なんか用事があつたら行ってみるとか、用事をかこ つけて訪問するようになったというか、 <u>特別にそういう方は 見守りを、ネットワークの方</u> にお願いするのもちよつとね、 なかなか…」 「あの、住民の方…。もう本人さん…。たとえば、ちょっと 相談にいただけで嫌な顔をしてるとか、現実的にはありま すもんね。うん、必ずしも皆さんが、巻き込んでっていつて るのは、私達が言ってることであって、住民の方が巻き込ん でくださって言って訳ではない、と思うんですね。だから、 そこに、認知があられる方が、飛び込んで、いろいろ相談し て同じことを繰り返して相談して、それをこう <u>受容的に受けて とめて頂ける近所の方とか見守りの方が、必ずしも良心的に</u>	③

			あるかっていうと、難しいと思うんですよ。あの、X(町)の田舎のね、昔からあるおうちでも、現実的にそういう状況になってるし、増して、これが団地とかなると、周りを知らない状況の中でっていうのは厳しいなっていうのは思います。」	
	フォーマルサポートの限界	フォーマルサポートだけで全てに対応するのは難しい。	<p>「去年も、ほんと買い物支援とかもヘルパーさんもできるんですけど、今、<u>介護保険の縛りとかも、さっき言った経済状況もあるし</u>、1回の利用時間が1時間とか決まってるんですね。生活支援が入れるのが1時間って決まってるんですね。1時間の中で掃除、食事、買い物って無理なんですよ。じゃあ、週に2回入ってもらえばいいんじゃないかっていうと、<u>経済的にとか</u>、なってきた本人さんがお金がかかるのが、ってなればですね、まあそこは三回、ほんの数分ですけど、「元氣してる」みたいな。」</p> <p>「どうしても介護保険のサービス内ではできないような、あと回数、限度額の件もあるので、それ以上に利用したい、足りない方にはですね、(保険外のサービスも)お勧めして…」</p>	⑦
家族サポートの不足	家族・子どもサポートの減少	家族や子どもがサポートしなれない自覚がなくなっている。	<p>「全てではないですが、1人、2人はですね、孤独死というね、あの、やっぱり、心配があります。一人の女性はですね、もう、<u>家族がほとんど来ない、あのー、もう、兄弟、子どもたちも近寄らない、</u>という方がいらっしゃって、非常に心配しております。」</p> <p>「<u>子どもたちの言葉を聞きたいんですね。ちゃんとして見て下さる方が、あの、きちんと、「もお、こうやって、心配ないから、ね、お母さん安心してね」</u>っていう言葉を聞きたいけど、<u>なかなか、そういうコミュニケーションがとれない、</u>遠くにいるから、帰ってきても短期間じゃないですか。そこまで話がじっくりできない。っていうような方もいらっしゃるんです。だから、やっぱり不安だらけ、不安が多い。いくらサービスを受けていても、やっぱりどこか不安。ま、全く子どもさんがいらっしゃらない場合にはもっと不安なんだろうけど、また違った不安があると思います。家族がいても不安がある。」</p>	⑭

謝 辞

九州保健福祉大学大学院（通信制）連合社会福祉学研究科の横山奈緒枝先生からは、いつもきめ細やかなご指導を賜りました。修士号を取得してから長い期間に渡って福祉の現場におり研究からやや遠ざかっていた私に対し、研究の進め方から論文執筆の「いろは」に至るまで丁寧に教えて頂いたことは、一生の宝だと感じております。

また副査をお引き受け頂いた同研究科の小川先生並びに高橋先生には、スクーリングの度に研究デザインの問題点についてご指摘をいただきました。小川先生から頂いた「社会福祉学を学んでいるのだから現場につながる研究成果を」というお言葉や、高橋先生から頂いた「内容は悪くないのでもっと自信をもってプレゼンをすべき」といったお言葉を本審査まで肝に銘じて取り組みました。

同研究科の正野先生ならびに九州大学大学院の小野先生からは、論文における表現方法や質的研究の信頼性について貴重なご指導を賜り、それらを踏まえて私なりに修正に取り組みました。他にも同研究科の諸先生方におかれましては、スクーリングの度に貴重なご指摘をして頂き、その度に研究の方向性や構成を考える機会となりました。

九州保健福祉大学の、通信事務室の牧野さんをはじめとした職員皆様や附属図書館職員の皆様には、私の無理難題をいつも心よく受け止めて頂きました。

北星学園大学の杉岡先生には、どのように博士論文をまとめていくべきかといった貴重なご助言をして頂きました。また同大学の畠山先生には、他の方には聞けないような基本的な質問についても丁寧に答え頂きました。

長崎ウエスレヤン大学の佐藤学長をはじめ教職員の皆様には、年に2回、大学が忙しい時期にも関わらず快くスクーリングに送りだして頂きました。仕事と学業が両立できたのは同大学の皆様のお陰に他なりません。

前職時代からお世話になっている池松正光さんには、仕事を辞めた後も何度も相談に乗っていただき貴重なご助言をいくつも頂戴しました。

尼崎と鹿児島に住む両親や宮崎の妹夫婦には、私が前職を退職して博士課程に進学することを応援してもらいました。皆様のご理解とご支援がなければ、博士課程への進学そのものができなかったかもしれません。

長崎大学准教授の万田先生には、研究者の道に進むことについて、親身になって相談にのって頂きました。

私が前職を辞めたいと言い出したとき、多くの方々が「もう少し考えたらどうか」と心配してくださいました。そのような中でも、仕事を辞めて進学することを後押ししてくれ、物心共に研究に専念させてくれた妻と、博士課程入学後に生まれ、我が家に毎日笑顔を運んでくれている娘には感謝し尽くせません。

皆様に心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

2016 年 3 月

岩永 耕